ラストランナー

Ｔｈｅ　Ｌａｓｔ　Ｒｕｎｎｅｒｓ

「みちのく津軽ジャーニーラン」はレースではない。スポーツエイドジャパンの代表である舘山氏が、自らの出身地である津軽地方の素晴らしさをランナーに伝えるべく、地元弘前市の友人伏見氏、そして数多くの盟友、また彼らに賛同した情熱高きボランティアの人々がつくりあげた「走る旅」だ。

旅には始まりがあり、そして終わりがある。終わりのない旅は旅ではなく、漂流になってしまう。
だから彼らは終わりの時刻を決めて我々走る者達を送り出してくれる。彼らが我々に最大限差し出すことができる時間は５１時間だ。そして、可能な限りの援助も一緒に提供してくれる。

我々はあらゆる場所から集う。皆思うだろう。津軽とはどんな所なのか、「走る旅」とは何か、そして、はたして自分は走り切れるのだろうかと。

走る者たちは様々だ。強靭な足腰を持ち長い時間を駆け抜けることができる者、豊富な経験を持ちあらゆる困難でさえ乗り切る自信を持つ者。
一方でこんな者もいるだろう。この日のために鍛錬を積んだがゆえに故障を抱えてしまった者、自らに課した練習を満足にこなせずにこの日をむかえてしまった者、過去何度も挑戦したが最後まで走り切れなかった者。

我々全ての者が皆強いわけではない。励ましの声に笑顔で応え、拍手と賞賛の中で歓喜のゴールを果たす者ばかりではないのだ。
体力を使い切り情熱を失い、道端の縁石に座り込んでしまう者。深く長い夜の闇の中で歩きながら眠ってしまう者。一歩踏み出すごとに激痛がはしる自らの脚を必死で前に出す者。限界を超えた距離を走ったが、まだ残る道程の果てしなさに呆然と立ち尽くす者。あまりにも深く重くのしかかる夜の闇に耐え切れず、自らが照らす路面しか見ることができなくなった者。
参加者のうち、実に半数近くのランナーがリタイヤしている。

還って来られなかった人達へ。あなた方は決して敗者ではない。
これを読んでもらえば、きっとわかってもらえると思う。完走を果した者でさえ、諦めるか進むかの瀬戸際にいたのだということを。
しかしそのような苦しい状況の中であっても、時折出会う津軽の自然や人々に癒され励まされたからこそ、ゴールにたどり着くことができたのだということも。

これから、みちのく津軽ジャーニーランで最後方を走り、津軽の風景を見て感じたこと、様々な人々と出会って思ったことを、ありのままに伝えたいと思う。

一日目の夜

天気予報はあいまいだった。津軽はもちこたえるが、東の方は大きく崩れるという。でもこのジャーニーランの参加者なら皆知っている。津軽を走ると一度は必ず雨に降られる、ということを。たとえ予報を聞いていても、結局はその場での天候に向き合うだけなのだということも。

旅の始まりはさくらの百貨店だ。ここはゴール地点としてのみ訪れる場所だったのだが、この日は違った。そのために距離が伸びた。そのせいかどうかわからないが、１６０名弱の旅人達は皆どこか不安げだ。いまだコロナウイルスは収まってはいない。２０２０年に開催予定だった第５回大会は１年延期した後に正式に中止となり、今年三年振りに開催されたのではあるが、街も人も皆まだ手探りのような毎日を過ごしている。夕暮れが迫るスタート地点の店前広場には、再び津軽を走れる喜びを思い切り発散できない、どこか抑えた雰囲気が漂っている。でもやっぱり皆、嬉しそうだ。

スタートして、最初は交通量の多い広くて新しい道路に出る。そして西に向かい弘前城を目指す。この道はまるで自分が普段走っている町のような気もしてくる、ありふれた幹線道路だ。都会ならではの街並みを見ながら走っていると、さっきまでの気持ちの昂ぶりも落ち着いてくるようだ。
大通りゆえに信号待ちも多い。そのたびに集団が分断され、前を行く人々が遠ざかってしまう。でも気にすることはない。数時間後には皆ひとりぼっちになってしまうのだから。

新しくてきれいなアンダーパスをくぐって信号待ちをしていると、ひとつの案内板があることに気が付いた。いま自分達が駆け抜けた歩道ができる前は、もともとはたった一人の、ゆみちゃんという少女の願いからつくられた道があったという。彼女の名前が付けられた歩行者専用道は今、立派な道路に生まれ変わり、我々を安全に送り出してくれる。ゆみちゃんも今は大人になり、ゆみさん、と呼ぶにふさわしい素敵な女性になっていることだろう。

度重なる信号待ちも程よい準備体操のようで、徐々に身体が温まってくる。そして歩道

の舗装に傷みが目立ってきて、道路がどことなく年月を感じてくるようになってきた頃、弘前城東門に着いた。その時、左手にある工事中の市民会館から、自分達をじっと見つめる津軽為信像に気付いた者はいただろうか。

戦国の世の頃。小田原攻撃の参陣を促す秀吉に応じ、使者と見せかけて股肱の臣わずか十八名とともに京都へ赴き、秀吉軍に従い小田原へ向かう途上の沼津で津軽所領安堵の朱印状を得た為信。それは領土を争う南部信直が武蔵国に到着するわずか三日前だったという。先の見通しもたしかで政治も能く人心も得た為信。彼が完成を成し遂げられなかった城をいま、自分たちは走り抜ける。

広々とした城内をゆっくりと走る。三年前、津軽太鼓を聞き大勢の人で賑わった頃が懐かしい。夕方の園内は人も少なく、静かで穏やかだ。先行している人達はもういない。周りには数人の参加者だけだ。皆少し緊張気味で会話も少ない。この先の長い道のりと深い闇を想像しているのだろう。ざっざっざっ、と足音だけが木々やお濠に響いている。

地元在住の先導ランナーの案内により、迷うことなく広い城内を抜けると街中に入る。歩道も狭く交通量は多いが、すれ違う車はこちらを気遣って間隔を取って走ってくれる。狭い歩道を慎重に走っていくとすぐに岩木橋だ。この橋を渡ると城下町を出て、道も広くゆったりとしてくる。そしていよいよ旅が始まった気がしてくる。そして空も広くなってくる。雲は多いが、まずまずの天気だ。

前方の見通しが良くなると先行している人達が見えるが、今年はそう多くはいない。まるで自分が大きく出遅れているような気もしてくるが問題ない。時間は十分にある。
景色が広くなったので気付きにくいのだが、実は道は登っていて、ゆるくゆるく遠くまで続いている。

ここまでずっと付き添って走ってくれたガイドランナーの男性と、少し話をする。普段の練習のこと、住んでいるところのこと、そしてジャーニーランのこと。こちらを気遣って多くは語らず、筋肉質でずっしりとした身体で、一歩一歩黙々と力強く走る彼は、しかし話しかければ必ず、優しい眼差しでこちらの問いかけに答えてくれる。その実直な姿に、ああ、津軽の人ってこういう人なんだなと思った。
彼とはローソン岩木町賀田店で別れた。別れ際には力強い励ましの言葉もかけてくれた。店ではおにぎりを二つ買い、ひとつをその場で食べる。

郊外店も徐々に減って緑が多くなってきた。少し興奮も冷めてきて足が重くなってくるのがこのあたりだ。多くの人もそのときこう考えるはずだ。おかしい。なんだか調子が上

がらない。まだ序盤なのに大丈夫だろうかと。
　走るのをやめて、歩きに切り替える。ふと右手の岩木山を見てみると、以外なほどに山が近い。と同時に、あたり一面がりんご畑だったことにも気付く。そして反対側を見てみると、これもまた以外なほどの道路の勾配がわかる。そう、自分は坂道を登っているのだ。そしてこの坂道はまだまだ続く。あせらなくていいのだ。
　実はこの最初の、嶽温泉までの区間は登りが結構長く、スタート直後の興奮状態で突っ走ってしまうと、後で必ず後悔してしまう。
　ゆっくりと走りだす。速度が上がってしまったら少し力を抜き、失速してしまいそうなときはまた少し脚に力を入れる。こうして加速と減速を繰り返しながら、体の声に耳を傾けて走っていく。広々とした道路は通り過ぎる車も少なく、静かだ。

　気持ちが少し落ち着いてきて、夕暮れが迫って来た頃に岩木山神社に着いた。
　神社前の駐車場に大きな鳥居が立っていて、その奥に続く参道はゆるく登っていて先は見えない。ここに着くと、他の参加者を見かけることができて少し安心できる。同時にまた一人になることへの不安も感じてしまう。

　時間を惜しまず、お参りをしてみる。参道の石畳は、都会の神社のように歩きやすくはなくでこぼこしているが、それはまた歴史の長さを表しているともいえる。一歩一歩踏みしめながら奥まで進むと、あいにく山門は閉じられてしまって本堂には行くことができなかった。仕方ないのでその場で二礼二拍手一礼をする。そして祈る。我を完走させ給えと。そして帰り際、参道の左右に鎮座している、大きな燈籠の台座にお賽銭を置いてみた。するとそこには、他にも錆びついた小銭があることに気付く。きっと自分と同じように引き返した者が置いていったのかもしれない。彼らの願いは叶ったのだろうか。

　境内は沈み込むように静かだ。そしてゆっくりと闇がおりてくるかのように暗くなってきた。ふと背後の山から声が聞こえてくるようだ。自らのその一歩を重ねよ、と。

　神社の向かいには商店があるが閉まっていて、観光客もおらず辺りは静寂そのものだ。
　鳥居前の公衆トイレに寄ってから、嶽温泉に向かう。ランナーが一人またひとりと通り過ぎてゆく。すでに暗くなり始めているので、ヘッドランプを額に装着する。するとその時点で昼から夜へと気持ちが切り替わり、明るく照らされた路面を見て、長い夜が始まったことを実感する。

　坂道は続く。辺りは日が暮れて真っ暗だ。昼間ならば大きな公園などがあって開放的な道なのだが、いまは黒い路面が目の前に広がっていて暗闇を強調しているだけだ。走れるところは走り、疲れたら歩きを繰り返す。時間はかかるが、確実に進んでいる。

前をよく見てみると、先の方を走る人がいることに気が付く。彼も同じように孤独を感じながら、ヘッドランプに照らされた道路をじっとみつめて走っている。まるで今の自分と同じようだ。
そして後ろを振り返ってみる。自分が最後尾だと思っていたが、後続者の小さな光がゆれているのが見える。きっと彼も見ているのだろう。前を行く自分が照らす路面を。

暗闇の道にぱっと明るく光る案内板が見えてきた。それに導かれて右に分岐する脇道を入り、民家や商店が並ぶ道路沿いにＣＰ１嶽温泉があった。公衆トイレ裏の広場にテーブルを広げ、灯りを点し、飲料や果物などを並べてランナー達を待ってくれている。

今回もそうだが、ここに到着するのはいつも日が暮れてからだ。想像以上に疲労を感じているが、ずっと登り続けてきたのだから当然だ。でも少し休めばきっと回復するだろう。
ここでは何人かの参加者と会えるのだが、今年は人数が少なく皆も疲れ気味だ。でもスタッフの人々は明るく労ってくれる。彼らが気を利かせて用意してくれた食べ物と飲み物と笑顔とともに。時刻は２０時１５分。ここに来るまで思っていた以上に時間がかかってしまった。でもあせらずにしっかりと休む。次の日本海拠点館までは遠いのだから。

出発する。小さな温泉街はひっそりと夜に溶け込んでいて、いつも静かに送り出してくれる。どんな宿があるのだろう。暗くてよくわからない。でもきっといい宿があるのだろう。いつもそのような気持ちで走り出すのだ。道はすぐにもとの真っ暗な県道に合流し、少し進むと道が下り始めて夜空が視界に入ってくる。どうやら雨は降らなさそうだ。また一人になった。

真っ暗な峠道を下る。車の往来もない広い道をゆっくりだが、歩かずに走り続ける。森の中は深い闇だが、少し開けた場所もある。以前は田んぼだったようだが、いまは使われていないようだ。なので蛙の鳴き声も今年は聞こえてこない。本当に静かだ。ふと、少し先のほうをごく小さな青い光が横切って道路に落ちていったのが見えた。立ち止まって足元を見てみると小さな虫のようだが、お尻が青く光っている。蛍だろうか。しかし子供の頃に見た蛍の光は、たしか緑色だった気がする。

急な曲がりを繰り返し下りていくと、時折道路が大きくカーブして夜空が広がる場所がある。何度走っても気持ちのいいところだと思う。そして森が終わり、左下方に街灯の明かりが見えてくる。そこが県道の突き当りだ。ここまで数人を追い抜いたが、後ろをみても誰もいない。ずっと一人だった。

この県道の丁字交差点を右に曲がったとき、前方に一人走り去るランナーが見えたが、すぐにいなくなってしまった。ローソンで買った残りのおにぎりを食べながら、もう一度後ろを振り返ってみる。いま走ってきた峠全体を見てみるが、ヘッドランプの光は見えない。そのとき山の上に月が出ているのが見えた。いざよい、というのだろうか。満月で明るい。そばの雲を照らしてとても幻想的だ。

ここからは鰺ヶ沢の海に向かう。道は右側を流れる中村川に沿って集落をいくつも越えてゆく。右に左に曲がりながら上に下にうねりながらと、徐々に高度を下げていくこの道を走っていると、以前のこの大会で走ったときのことを必ず思い出す。興奮を抑えきれず嶽温泉を越え、峠道を駆け下りてきてこの道に着いたときに初めて気付いたのだ。ああ、飛ばしすぎた、と。急に疲労を感じてしまってその後は足が進まなくなり、気持ちが急に落ち込んでしまったことが何度もあった。そしてもうひとつ必ず思い出すのが、海の方角の空に大きな流れ星を見たことだ。その流れ星は上から下の方へ、まるで白い滴が落ちていくように見えた。

今回もやはり、疲れてしまって走り続けることが出来なくなってきた。仕方なく歩きと走りを交互に繰り返す。

不思議な音が聞こえて、はっとする。
ピィーイン…、という鳥の鳴き声なのか動物の声なのか、よくわからない高い音だ。過去にも一度だけ、第二回大会のときにこの辺りで聞いたことがある。必ず左側の森からピィーンと聞こえてきて、それに答えるように今度は右側の中村川のほうからもう一回ピィーイン…と聞こえてくる。まるで夜中に秘密の通信をしているような、もの悲しくて寂しい響きだ。聞こえてくるのは百数十メートル程の区間だっただろうか。走ることも忘れて、じっと耳をすませて聴き入ってしまう。

森と川の音のやりとりが聞こえなくなってきたとき、道路の右側にある駐車帯に着いた。なにげなく見渡してみると、手前側の奥に自販機があることに気が付いた。いつもこの区間は黙々と前方しか見ていなかったので知らなかった。ちょうど手持ちの二本の水のうち一本が空になっていたので、補充しようと思ったがほとんど売り切れていた。幸い、果汁入りの小さいペットボトル飲料が一種類だけ残っていたのだが、自分が買ったら売り切れてしまうかもしれない。あとはコーヒー類しか無い。まだ後方には何人もいたはずだ。どうするか迷ってしまったが、結局二本買ってしまった。でも売り切れにならずほっとする。
自販機の周囲は予想通り、いっぱいになった赤い回収箱のまわりに空容器が散乱している。ポリ袋を持ってくればよかった。過去にも別の自販機で同じ光景を見たことがあって、同じ思いをしたのに。うかつだったと、後悔する。

買ったばかりの一本はすぐに飲み干してしまい、空のペットボトルを手に握りながら走る。冷たい飲み物のおかげで少し元気が出てきて、やる気が出てきた。
津軽の旅はいつも、辛くなったり楽になったりを延々と繰り返している。走ることに疲れたら歩き、気持ちが落ち着いたらまた走り出すのだ。
道の両側には民家があり、みなひっそりと寝静まっている。そんな人々に気付かれることもなく、そっと通り過ぎていく。集落を越えると森があり、そしてまた家々が現れる。中村川は近付いたり離れたりを繰り返している。車は全く通らず、本当に静かだ。

空が広くなって、道が平坦になってきた。もうすぐ国道１０１号バイパスの交差点に着くはずだ。その手前でようやく一人のランナーに追いついた。不意に、先ほど欲張って二本も買ってしまった自分が恥ずかしくなり、まだ背中のザックのポケットに入っている冷たいままの残りの一本を、彼に差し上げてしまった。突然の申し出にもかかわらず、彼はヘッドランプに光る汗を輝かせながら、ありがとう、と笑顔で受け取ってくれた。
信号待ちで数人のランナー達と一緒になる。皆ほっとした表情で歩いている。どことなく空気が湿ってきて、海に近付いているな、と思った。

交差点を越え、すぐ先の踏切を渡ったところにあった自販機で水を買う。そしてずっと持ち続けていた空のペットボトルも回収箱へ落とす。冷たい水が美味しい。ああ、山を越えたと実感した。道路の右手の中村川はひろくゆったりと流れ、左手には家々が並び建っていてどことなく港町の雰囲気が漂う。静かな鰺ヶ沢の町は月夜で明るく、前方には暗い海が広がっている。日本海拠点館はもうすぐだ。

長い山道が海で突き当り、右折して中村川に架かる橋を渡ると鰺ヶ沢の市街地に入る。渡り終えてすぐ、ヘッドランプをこちらに向けて一人のランナーが歩いてきた。どうしたんですかと声をかける。彼は、ローソンが無いので道を間違えたと思ったらしい。前回と違って、今回のルートはローソンの前を通らない。時間の余裕もあまり無いので、このままＣＰ２を目指したほうがいいですよと伝え、案内する。
津軽を走っていると、時々こういった人に出会う。長時間に及ぶ夜間走行と疲労のせいで判断力が落ち、前後に誰もいなくなってしまって道を間違えたと思い込んでしまうのだ。逆走をしてしまうのは、すでに体力の限界を超えて思考力が低下している証拠であり、たいていの場合その後リタイヤしてしまう。ただ、このような出会いは二日目の夜に多く、まだ序盤の鰺ヶ沢で会うのは初めてだ。
実は彼と話をしていた交差点からは、右の方に平行する一本隣りの道が見えていて、ローソンの看板の青い照明も確認できていた。でも、それを教えると彼はきっとそこへ行ってしまって動けなくなってしまうだろうと直感して、あえてそれを伝えずに日本海拠点館

へと誘ったのだ。
　彼はぽつりと一言、２６０キロは今回初めてなんですと言った。

　リタイヤはすぐには決断できない。
　諦めるか続けるかをずっと自分に問いながら、何キロも何時間も歩き続け、そして自分の胸の中で何かの区切りがついたとき、やめてしまうのだ。

　寝静まった鰺ヶ沢の市街地を淡々と進み、国道１０１号に出た所にある日本海拠点館のＣＰ２に着いた。逆走した彼も一緒だ。時刻は０時１２分。かなり遅れている。近代的な大きな建物前の、暗がりのなかに設営されたテーブルとほのかな明るさのランタンの周りには二、三人の参加者しか見えず、みな静かに休憩を取っている。キャンプ用の折り畳みテーブルに並べられたバナナとグレープフルーツ、そしてスイカをいただく。どれもみな、食べやすいように小さく切ってある。予想以上に汗をかいた体にスイカの甘さが体にしみわたって、本当に美味しかった。スタッフの方々はみな明るく親切に手渡してくれる。

　二つ目のスイカを食べていたとき、少し離れたところで一人の参加者がリタイヤの相談をスタッフとしているのが聞こえた。先ほどの逆走の彼とは違う人のようだ。この地点でのリタイヤとはかなり早いな、と思った。きっと故障か体調不良をかかえたままスタートしてしまったのだろう。こういうとき、まわりのランナーはかける言葉を見つけることができず、聞こえないふりをしてみな黙ってしまう。

　あまり長居はせず、気持ちも切り替わったので出発する。次に目指すのはローソン津軽森田店だ。
　ここからしばらくは国道沿いを行く。ただ深夜ということもあり、車は全く通らない。歩き出してすぐの坂を登ったところで五能線を越えた。そして下ったところでバイパスと合流し少し進むと右丁字交差点があり、その先の左側にあるのがわさおの家だ。そのうしろには真っ暗な海が静かに横たわっている。いつもここを通るときの海は穏やかだ。

　職場に沖縄の石垣島出身の人がいた。あるとき、島の人ってどんな宗教なんですかと、軽い気持ちで訊いてみたことがあった。
　でも彼は意外なことを言った。島では、海が神様なのだと。そして島では、満ち潮のときに子供が生まれ、引き潮のときに人が亡くなるのだそうだ。だから島の人間はお寺ではなく、海に祈るんだよ、と彼は教えてくれた。
　元気だった頃のわさおの映像で印象的だったのは、砂浜で元気よく走り回る姿だった。きっとわさおも、海に還っていったのだろう。

丁字交差点に着いたとき、ちょうど信号待ちをしていた女性ランナーに追い着いたので声をかけてみたが、返事が無かった。あまり話をする気分になれないのだろう。それ以上は何も言わず、それぞれのペースで走り出す。その後彼女とは何度か前後したが、結局ひとことも話すことは無かった。

深夜の国道１０１号線は車の通行はほとんど無く、前を行く何人かのランナー達は車を気にせず、並んでおしゃべりをしながらのんびりと歩いていて、何だか楽しそうだ。だが、この先には辛く果てしない直線が鰊御殿まで続いていることを、彼らは知っているのだろうか。時刻は午前１時近くで、かなり遅れている。本来ならば我々のような後方のランナー達は、この区間は皆緊張しながら黙々とローソンを目指して走らなければならない。先ほどの彼女のように。

バイパスと合流する丁字交差点での信号待ちで全員集合し、青信号で出発し左折する。真っ暗な森の中を進んでいくと、ゆるく下った直線の先に小さく青い看板が見えてきた。あれがローソンだ。

ローソン津軽森田町店に着いた。駐車場で休んでいる参加者はおらず、ちょうど一人のランナーが出発していくところだった。いつもならここには何人かが休んでいて少し安心できるのだが、やはり今年は違う。参加人数の少なさとコース延長により、ランナー達の間隔を広げてしまっている。今年の津軽は孤独で静かな旅になるだろうなと、あらためて認識させられてしまった。時刻は１時１０分を少し回ったところだ。

ここではしっかりと食べておかないと、亀ヶ岡遺跡で一気に疲労が押し寄せてきて、その先は走れなくなってしまう。過去に何度も経験しているので、今年はちゃんと食べようと思っていた。そのために時間はかかっても、少しでも走れたほうが歩き通しになるよりは結局、早く鰊御殿に到着できるのだ。

おにぎり２個とカップ入りの味噌汁を買って店を出ると、ぽつりぽつりとランナーが集まってきた。そして皆仲良く縁石に並んで座って補給をする。一般の方々に迷惑がかかるので良くないことなのだが、この時間帯に車で来店する人は全くおらず、すこし気が楽だった。あたりにはなごやかな雰囲気が漂う。

だがあまり長居はできない。食べ終わってすぐに出発する。立ち上がって、並んで座っている人達の後ろを通りがかったとき、ひとりのランナーがこちらを振り返って手を上げてくれた。鰺ヶ沢で逆走していた彼だ。疲労が顔に滲み出ている。ああ、これは完走は無理だろうなと直感し、少し気が重くなってしまった。

ローソン津軽森田町店前の交差点を左折してからの県道１２号は、真夜中の一本道で目標物も無く、精神的にも辛い区間だ。だが良い方法がある。それは、交差する県道を目印

に区切って行くのだ。
　距離は正確ではないが、県道１８６号、そして県道１１４号までがそれぞれ約４キロ、１６１号の交差点までが約３キロ、そして亀ヶ岡遺跡のＣＰ３までが約１キロくらいだろうか。こうして細かく区切って走ると、冷静に自分の位置と時間の経過が把握でき、集中力を維持できる。
　大事なことは、何十キロも先のことを考えるのではなく、目前の４キロ先の県道交差点のことだけを考えて進む、ということだ。長い距離を走るジャーニーランだからこそ有効な手段だ。

　県道１２号を走り出す。道は大きく右に左にカーブし、またゆるく登ったり下ったりしている。道の左手には民家と森が交互に現れ、右手には広大な田圃がどこまでも続いている。空は曇っているが、雲が月の光を反射してうす明るく、遠くまで良く見えていい気分になってくる。たったったと少し走り、ふーっと息を吐きながら歩く。歩きながら広い田圃を見て、そして夜空を見上げる。やがてまた前を見て走り出す。

　しばらく経つと、右手前方に田圃を横切るように伸びる道路と陸橋が見えてきた。あれが県道１８６号だ。程なく信号が現れて、交差点に着いた。次は県道１１４号を目指す。
　交差点を越えて丸山地区の集落を過ぎると、読み方はわからないが菰槌という大きな集落へと、コースは左へ分岐する。いつもならばこの広い道を直進するのだが、今年は旧道へと変更になった。たいていの場合、集落を抜ける旧道は登り下りがある。バイパスも可ということなので、今回はそのまま直進することにした。
　分岐を過ぎてすこし進むと、県道１１４号の交差点に着いた。雨は降っていないが、風が吹いてきた。

　少し進むと、道路は左へカーブしてしばらく直線が続く。田圃のはるか先のほうを見ながら走っていると、ランナーが一人、こちらに向かって急ぎながら走ってきた。今度は女性だ。彼女はそのまますれ違っていきそうだったので、立ち止まって、大丈夫ですかと声をかけた。
　彼女はハッと立ち止まり、息を切らせながら振り返って、コースはどこですかと聞いてきた。このままでいいと伝えたが、確信が持てないらしい。その場でスマートホンを取り出し、落ち着かない様子で落とし込んだルート図を見ている。ちょうどその場所から、進行方向左手の田圃を隔てた数百メートル向こうに、平行する旧道が見えていて、ひとりのランナーがヘッドランプを点けて走っているのが見えた。それを指さして、今年はコースが旧道へと変更したけどバイパスも可ですから、と教えてあげた。
　この先で合流するんですか、と彼女は不安げに聞いてくるだけで動こうとしない。このままでは時間を浪費してしまうので、ええ、と答えつつ彼女を促して走り出そうとしたと

き、ちょうどそこへもう一人女性ランナーが追い着いてきた。それを見て安心したのか、ようやく彼女もその女性と一緒に走り出してくれた。

　しばらく進むと道は旧道と合流し、また一本道になった。先ほどの彼女達は少し後方を走っている。逆走した彼女は元気そうに見えたが、やはり消耗しているのだろう。亀ヶ岡から先もまだ距離がある。辛いだろうな、と少し気の毒に思ってしまった。

　一人で黙々と、三つめの県道１６１号を目指して走っていると、突然後ろから「ナイスジャーニー！」と声をかけられた。驚いて横を見ると、長身の男性ランナーが力強い足取りで追い越して行った。
　ナイスラン、という声がけはよく聞くが、「ナイスジャーニー」は新鮮な響きだ。そう、これはジャーニーランなのだからそうだよな、と妙に納得してしまった。他人を励まし、そして自らをも鼓舞するかのように、彼は言った。いい言葉だ。こういう場合、返事はきっと「Ｙｏｕ　ｔｏｏ！」なのだろう。

　ひっそりとした県道１６１号の交差点を通過すると、弱い雨が降ってきた。道の左側には森が続いていて見通しがきかず、じっと我慢して走り、そして歩く。
　亀ヶ岡遺跡は左カーブを曲がってすぐのところにあるので、直前にならないとわからない。一本道のはずなのに、目標とするＣＰが全く見えて来ないのは精神的にきついものだ。しかし県道１６１号からの距離は短いはずだ。冷静に前方を見渡す。

　予測通り、亀ヶ岡遺跡ＣＰ３はカーブの先に突然あらわれた。きれいに整備された駐車場と土偶の像も相変わらずだ。時刻は３時０４分だった。ここは公園のようになっていて、開放的な雰囲気があってほっと出来る。休んでいるランナーの数も多めだ。
　駐車場そばの真っ暗な広場にランタンを灯してテーブルを広げ、スタッフの方がせっせと食べ物を渡してくれた。ここでは、手のひらほどの小さなプラ容器に入った暖かいうどんを頂いた。
　ここに到着するころには歩く時間も増え、気温が下がってきて汗も冷え寒い。暖かい食べ物が本当に有り難かった。

　例年通り、ログハウス風の真っ暗な公衆トイレで小用を済ませて出発する。時折、意識してトイレに行くことが大切だ。尿の色や量を確認して、水分補給が適切かどうかを確認するのだ。ジャーニーランのような長時間の行動では、水分の摂り過ぎに注意しなくてはならない。本当はエネルギー切れの状態であるのに、疲労のせいでそれに気付かずに、スポーツ飲料などの甘いものを飲み続けてしまって食欲を失ってしまい、食事が摂れなくなる。しかし甘い飲み物だけは飲めるので、また飲み続けてしまう。結果的に胃が働かなく

なって嘔き気に苦しみ、空腹で走るどころか歩くことさえ出来なくなってしまうのだ。こういった失敗を何度も経験してきた。

水分はすぐに吸収されるが、糖分は長時間、胃に残る。だから行動中は水のみとし、スポーツドリンクはエイドステーションだけで飲むことにした。エイドステーションやコンビニエンスストアなど、食事をしようとする場所が近付いてきたら、あえて水分補給の量を減らす。すると胃袋が活発に動きだして、お腹が空いたと感じてくる。こうして意図的に空腹を作り出して食欲を引き起こすことが、本当に重要だ。食べ続けることができなければ、走り続けることは絶対に出来ないのだから。

ゆっくりと走り出す。次の目標はファミリーマート車力町店だ。ただその前に牛潟町の集落と県道４３号があるので、それを目指して暗い道を進む。道路はいくつかの市街地を通っていくので、変化を感じられる。しかし地図ではあまりわからないのだが、道は右に左に大きくカーブを繰り返していて、他のランナーの存在を隠してしまう。また孤独との戦いになる。腕時計を見て、時間の経過から自分の進み具合を判断し、あと何分で着くと自らを励ます。ヘッドランプに照らされた路面だけ見て走るとペースは遅くなり、歩きも入る。

左側に小さなガソリンスタンドが現れた。このように給油機と駐車帯だけの、個人商店が兼業するスタンドは近頃は見かけなくなったが、以前は山奥の集落などではよく見られたものだ。たいてい隣りに食料品店などがあり、声をかけるとお店のおばさんが出て来てくれて、ガチャガチャと慣れた手つきで給油してくれる。お金を渡すとまた店に戻り、おつりと手書きの領収書を持ってきてくれる。まさにガソリンを買う、という感じで何とものどかな気持ちになれるのだ。

このガソリンスタンドが、牛潟の町への目印だ。道はその先で二股に別れ、左へ進むと上り坂になり、街中に入る。道も所々細くなり、住宅のすぐそばを通ったりしながら大きく右方向へ迂回していく。いつの間にか周囲が薄明るくなっていて、夜が明けたことに気が付いた。雨は降っておらず、風もあまり吹いていなくて穏やかだ。
市街地はすぐに終わり、道はまた田園風景に向かって一気に下り坂となる。目の前に田圃が広がり、一本道が続いている。朝の清々しさに疲労も忘れて、思わず両手を広げて走ってしまう。ここはこの平坦な道が続く区間の中では、特に印象的な場所だ。

道はまた田圃の一本道に戻った。左側には大きなため池があり、建ち並ぶ風よけのフェンスの隙間からその原始的な水辺の景色が見える。とても幻想的だ。
道の向こうに上り坂が見えてきた。あの先が県道４３号線の交差点だ。

せっせと歩いて坂を越えて県道４３号線の信号を渡り、また下ってすぐに左へカーブすると、ずっと先のほうに小さな緑色の看板の明かりが見えた。あれがファミリーマート車力町店だ。

ファミリーマート車力町店に着いた。長い長い孤独な夜を越えて、今年もたどり着いた。時刻はもう４時半になるところだ。相変わらず遅れがちなペースだが仕方ない。
広い駐車場にはわりと多めのランナーが休んでいた。すっかり夜が明けて明るくなった周囲の田園風景を眺めながら、それぞれが疲れを癒している。幸いまだ雨は降っておらず、気温も低くなく過ごしやすい。
店内でトイレを借りて、カップ入りのパスタをひとつ買う。以前の大会のとき、たったひとりで途切れることない選手達に対応し、そのために商品の陳列や他の業務が進まず、苛立ちを隠さずレジのキーを激しく叩いていた店員の青年も今年は機嫌が良さそうだった。彼の父親だろうか、隣のレジではオーナーらしき年配の男性が愛想よく対応していた。今年は迷惑な客にならずに済んで良かった、と胸をなでおろす。

駐車場の端の膝の高さ位のブロック塀に腰かけて、パスタが出来上がるの待っていると、少し離れた店の入り口付近から、元気の良い女性の声が聞こえてきた。開会式での司会でおなじみの宮崎裕子さんだ。どうやら、周りのランナー達にハッパをかけているらしい。彼女は、鰊御殿には遅くとも８時頃までには着いておかないと後がきつくなるわよ、というようなことを言い、早々と出発していった。
彼女の言葉で、その場にいた者達も皆はっとしたように腰を上げ、ぞろぞろと歩き出して行く。

ここのコンビニエンスストアでは、疲労から食欲が落ちているうえ、時間が気になってあまり食べないまま出発してしまい、鰊御殿までの道のりで失速してしまったことが何度もあった。だから、あえてゆっくり食べることにする。パスタを食べ終わったあと、ずっと持ってきていたクラッカーを残りのスープに浸して食べた。この場で必要なのは炭水化物と、塩分だ。

その間にも、ランナーが一人、またひとりと辿り着く。でもこの時間になってくると、みな疲れ切っている者がほとんだ。彼らは、先ほどの宮崎さんの言葉を聞いていない。聞いていたとしても、すぐには走り出せないだろう。早朝の広い駐車場には、取り残された数人が所々でじっとしていて、諦めと無念の空気が静かに漂っている。

意を決して立ち上がる。脚の筋肉が硬くなってしまって辛い。出発してしばらくは歩きのままで、すぐには走れなかった。天気は曇ったままだが、雨は降らなさそうだ。道路に

出ると、先の方に何人かのランナーが見えた。この辺りになると、大体皆周りの者と走るペースが同じになってくる。ただ、注意しないといけないのは、歩きながらの会話が弾んでしまって時間を浪費してしまうことだ。宮崎さんはきっとそれを知っていたのだろう。遅れを取り戻すことが大変だということを。

　さきほど食べたパスタの味を思い出し、体の中にエネルギーが入って力が入るのだと自分を励まし、腕を意識して振り、脚を前に出してゆっくりと走り出す。次の目標は約４キロ先にある県道１８９号の交差点であり、その次は十三湊だ。
　道は程なく市街地に入り、両側には学校や大型店、クリニックや自動車修理店そして民家などが次々と現れてくる。まだ早朝なので人気もなく、また車もほとんど通らない静かな広い通りをゆっくりと進んでゆく。ランナー達はまた散り散りとなり、ひとりで自分の呼吸する音だけを聞きながら走り、歩いていく。
　そして道はまた田園地帯の一本道となり、前方に県道１８９号線が見えてきた。道は平坦で走りやすいのだが、なかなか近づかず足元ばかりを見てしまう。

　県道１８９号線の交差点を渡ると、道はゆるく左へカーブし、また広々とした直線道路となる。ずっと先のほうに森が見えており、そこで長かった田園道路は終わり、住宅街に入る。ここからは見えないが、右手には十三湖が近付いてきているはずだ。
　じっとこらえて走り、そして歩く。長かった直線を越えて、左側に小さな神社の石段が現れた。それが市街地への入り口への目印だ。前回大会のとき、胃の不調で力が出なくなって、この石段に座り込んでしまったことを思い出す。しかし今年は大丈夫だ。

　早朝の整然とした住宅街を通り抜ける。道の両側には敷地の大きな家や、商店などが続いているが、十三湖は見えない。前後にランナーは見えず、ひとりで淡々と進む。ときおり、出勤していく車やバイクが家々から出ていく。彼らはランニング姿の者には特に興味も示さず、それぞれの日常を始めていく。
　しばらく行くと、一人のランナーに追いついた。あいさつを交わすと、彼も少し元気を取り戻して、先行していってしまった。その後も、ぽつりぽつりと他のランナーたちと出会い、前になったり後ろになったりしながら進んで行く。

　街中を抜けていくと、並木道となる。道の両側には高い木が植えてあり、強い風に大きく揺れていた。天気が良ければ、右手の木々の隙間から朝日にかがやく十三湖の湖面が見えて、とても気分のよい道なのだが、今日は強風のため水面も波が立って荒れている。
　並木道の途中左側には、きれいな公衆トイレが併設されたパーキングエリアもある。少し休んでいきたくなるような場所なのだが、ランナーは誰もおらず、皆先に行ってしまったらしい。木々が大きくざざあ、と風にあおられていて、このあとの悪天候を知らせてく

れている。

　やがて道路はまた住宅地へと入っていき、道幅も狭くなって旧来の街道のような趣になってくる。このあたりから前方に五、六人の集団が見え始めてきた。彼らも走ったり歩いたりしながら、お互いを励まし合ってここまで旅を続けてきたのだろう。まだ諦めていない強い意志が背中に滲み出ている。みんな完走できるといいな、と思う。

　道が一段と狭くなってきて、十三湊遺跡へと右へ分岐する交差点に着いた。前回大会までは、いつも直進して旧道を通っていた。道はやがて前潟と呼ばれる細長い入り江に突き当り、すぐ向こう岸の小高い土手の向こうは、もう日本海だ。家々の裏には小さなボートが見えたりして、湖とともに暮らす人々の生活が感じられて、わりと気に入っていた。
しかし今年は右方向のバイパスへとルートが指定されているので、そちらへ進む。初めて通る道だが、整備されていて走りやすかった。

　数人のランナー達とともに十三湊遺跡の案内板を通過する。かつてのこの地は、東には畑地、西側には港を持つ広大な港湾都市だったらしい。衰退した原因は、津波なのか大火なのか諸説あるようだ。数十キロを走ってきて、数百年前にここで生きていた人々と同じ風景を見て、風に吹かれ、潮のにおいを吸い込むことができるだけでも感慨深い。彼らも今の自分と同じように空を見上げ、一面に広がる雲に不安をつのらせたのだろうか。

　十三湊遺跡を越えたあたりから、ランナー達の集団にも変化が表れ、先行する者や遅れ出す者がでてきて少しずつばらけてきた。会話はせず、歩きながらも走る時間を少し増やして先行させてもらう。鰊御殿まではまだ少し距離がある。集中力を切らすことはできない。
　旧道と合流し、ランナー達におなじみの「湖の駅」の商店を通り過ぎると、視界が開けて十三湖大橋が見えてきた。右手には十三湖が大きく広がり、左は日本海だ。大きな橋の中程までの登り坂を歩いて上ると、橋の上には強い風が吹いていた。唸るような風の音を聞きながら、右手の十三湖の港を眺めてみる。細かく波打っている湖は雲に覆われて遠くまでは見渡せず、漁港に繋がれた漁船達は何もできずに皆じっとしている。周囲に人はおらず、まるで絵画のような風景もいつものことだ。きっと何百年も変わらないまま、この深い緑に囲まれた平べったい湖は、左手に見えている、重々しく広がる日本海と狭い河口を挟んで存在していたのだろう。その上に架かるこの立派な橋の上は、湖が大きく呼吸するようにいつも強い風が吹いている。

　向こう岸への下り坂をゆっくりと走り出す。橋を渡り終えると道路はまた歩道の整備された街道となり、林を抜ける途中に一人のランナーを追い越す。お疲れ様、とひとこと声

をかけると、笑顔で返事をしてくれた。お互いにおしゃべりは不要だという暗黙の空気が流れ、それぞれのペースでそっと離れていく。孤独な時間が流れつつも、周囲のランナー達との程良い距離感が心地いい。もしかしたらジャーニーランの本当の良さは、このような瞬間にあるのかもしれない。

少し走って、中の島ブリッジパーク入口に着いた。右手の湖面には木造のきれいな橋が一直線に伸び、十三湖にある大きな島の公園に渡ることができる。

中の島ブリッジパークは第二回大会のときにレストポイントになった場所だ。前日の午後８時にスタートしたときは晴れていたのだが、明け方に鰺ヶ沢へ着く直前から降りだした雨はときおり豪雨となり、精神的にかなり疲れ果ててこの橋を渡ったことを思い出す。しかし本当の苦しみはその先の行程だった。両足の足裏にできた大きな肉刺の痛みと睡魔で全くペースが上がらず、もうろうとしながら夜中の峠を越えることになり、最後まで幻覚に悩まされ続けてしまった。過去の大会の中でも、距離は２５０キロと短かったものの、この第二回大会が一番きつかったと今でも思う。

中の島から道は直線となり、右側に緑が多く繁っている湿地を見ながら進む。その自然そのままの風景に、心がすうーっと落ち着いてくる。

すると前方にいた一人のランナーが近付いてきた。彼も自分と同じように走りと歩きを繰り返しているのだが、走る時間が短いために少しずつ追い着いていく。ようやく横に並び、あいさつを交わす。疲労のせいで厳しい顔つきだが、あきらめてはいない表情だった。ただもう走ることはできないようで、その後追いつかれることはなかった。

直線先に見える右カーブを曲がっていけば、国道３３９号に突き当たるはずだ。頑張って長めに走り、そして歩く。右方向へと続いていく道路の前方にまた海が見えた。空は曇っているが明るい。ふと、竜飛崎は天候が荒れているかもしれないなと思った。

信号も車もいない、ひっそりと静かな国道３３９号交差点を左折する。ここから鰊御殿までは上り下りがあり、距離が長く感じてしまう辛い区間だ。

林の中を抜けて見通しの良い場所に出ると、また前方にランナーが見えた。休憩がてらの歩きのようだ。足取りはしっかりしている。宮崎さんだ。追い着いて横に並び、お疲れさまと声をかける。すると彼女は、それまで前方を見ていた厳しい顔をふっと和らげて、人懐っこい笑顔をこちらに向けて返事をしてくれた。

歩きながら、彼女と少し話をする。お互いに津軽ジャーニーランの経験があるので、どんな幻覚を見たか、などで会話が弾む。また、明日の夜明け頃になるであろう「やまなみトンネル」越えが最も重要で、本当にきついのはトンネルをこえてからですよね、ということでも二人の意見が一致した。

しばしのおしゃべりで良い気分転換になった。その後彼女は元気を取り戻し、まるで走るかように力強く歩いて行き、あっという間にカーブの先にいなくなってしまった。

彼女を見送ったあと道沿いの自販機で水を一本買い、また淡々と住宅街の中を登ったり下ったりしながら進んで、ようやく鰊御殿へと分岐する道に着いた。道路が一段と登りになる手前の、左側にある商店の先を左折して海岸に向かって坂をおりていく。いつもならきれいな日本海の風景が迎えてくれるのだが、今日は目の前には曇った空と風吹く青黒い海が広がっているだけだ。少し残念だが、ここまで辿り着いた嬉しさであまり悪い気はしない。

海岸そばまで坂を一気に下り、そのまま海沿いを進むと、右手の高台に見えてくる和風建築の立派な平屋の建物が鰊御殿だ。
まだ１００キロも走っていない。しかも、いつもより疲労感も大きく大幅に遅れての到着だが、やっぱりここに着いたときは素直に嬉しい。

建物へと続く急坂をゆっくりと登っていると、坂の上でカメラを構えている人が見えた。越川志津さんだ。到着するランナー一人一人を撮影し続けてくれていたのだろうか。こんなに遅れてしまって申し訳ない気持ちになってしまい、せめてもの思いでとっさにポーズを取ってみる。すると彼女は大きなカメラのモニターを見ながら、微笑んでくれた。

写真を撮ってもらうとき、カメラマンの表情を見ると皆いい顔をしているな、と思う。それはまるで小さな宝物を見つけたように嬉しそうで、カメラに魅せられた人だけが見せてくれる、偽りのない良い顔なんだと思う。彼女もその眼鏡の奥のやさしい眼差しで選手たちを見つめながら、シャッターを押して長い旅の瞬間瞬間をていねいに切り取っている。

二日目の朝

ＣＰ４鰊御殿に着いた。時刻は７時４０分だ。ボランティアさんの労いの言葉を受けて玄関を入ると、右手の大広間には遅い時間にもかかわらず、まだ多くのランナーが休んでいた。スタート地点で預けていた荷物を受け取って、畳の上に腰をおろす。二回分の着替えや携行する食料、予備の医薬品などが入っていて、２０リットルの小振りのザックはパンパンに膨らんでいる。さっそく着替えと洗面用具を持って手洗い所へ向かう。大広間の裏には廊下を挟んでトイレや洗面所などがあるのだが、ふと見ると奥にある浴室から一人男性が出てきたのが見えた。予定にはなかったのだが、思い切って自分も入浴することに

した。運良く中には誰もおらず、ゆっくりと風呂に入ることができた。
　大広間に戻るとだいぶ人が減ってきており、静けさが漂っている。残されたランナー達も、遅れを気にしているのか皆少し緊張気味だ。

　大広間とは玄関を挟んで反対側にある食堂に入った。町の食堂ほどの広さの部屋には、まだ数人が残って食事を摂っている。ここはボランティアの方々が食事を提供してくれる有り難い場所だ。いくつかあるメニューは毎年変わるのだが、ここの名物でもあるカレーライスは必ず食べることができる。細かく具が刻んであり食べやすく、甘口で口当たりの良いこのカレーライスを食べると、お腹の中がじいんとしてきて本当に美味しいな、と思う。前回、前々回のときは共に胃の調子が悪く、このカレーライスでさえも食べるのに難儀したのだが、今年はしっかりと食べることができた。ここでの食事が、この先竜飛崎を越えてからの海岸ルートでの走りに大きく影響する。少し気持ちが前向きになってきた。
　我々ランナーのために忙しく世話を焼いてくれているボランティアの女性たちにお礼を言い、食堂を出て大広間に戻った。洗面所で歯を磨き、行動用の食料を補充しリュックを再度預ける。少し横になりたかったが、もう時間が無かった。時刻は８時４５分を過ぎようとしている。

　玄関を出ようとしたとき、スタッフの男性に声をかけられた。どうやら竜飛崎に向かう龍泊ラインという峠道が悪天候らしく、頂上にあるエイドステーションが手前の麓に移動したらしい。続けて彼は、雨具は持っているかと聞いてきたので、雨用の上着はありますと答えた。すると彼は、じゃあこれを着ていけと自分の雨具のズボンを渡してくれた。
気持ちは有り難かったが、特に必要とは思わなかったのでお礼を言いお断りさせてもらった。
　外に出てみると、雨は降っていたがあまり寒くはなかったので、そのままで行くことにする。

　龍泊ラインを越えるのは今回で四度目だ。そしてここを通るときはいつも風が吹き、雨が降っている。たとえ手前の小泊の道の駅が快晴で暑い日であっても、峠をめざして登り始めると空はみるみるうちに曇ってきて、頂上付近にくると必ず風雨に見舞われるのだ。なので、鰊御殿では必ず寒さを想定したウエアを選ばなくてはならない。具体的には、汗冷えしないアンダーウエアに半袖シャツを着て、さらにもう一枚半袖とレインジャケットをザックに入れておく。それは、ふるさと体験館に着く頃は深夜となるために気温が下がり、疲労で走れなくなり体が冷え切ってしまうからだ。二日目の行程で本当に厳しいのは龍泊ラインではなく、日没後に走ることになってしまう平舘から先の区間だ。

　鰊御殿を出発して国道に合流し、左に海を見ながら海岸沿いを進む。道は突き出た半島

に向かって登り坂となり、それを越えて下りきったところにある丁字交差点を右折して、小泊をめざす。この先はちょっとした峠道となっており、無理せず歩いて登る。雨は降っているがそれほど激しくはなく、気温も低くはないので坂の途中でレインジャケットを脱ぐことにした。道端で立ち止まってザックをいじっているときに一人、坂道を登ったあとの下り坂で一人、直後にまた一人と立て続けに抜かれていく。皆しっかりとした足取りで走っているので、きっと鰊御殿で長めの休養が取れた足の速いランナー達なのだろう。こちらはそうもいかず、筋肉を傷めないよう歩くような速度で後を追う。

森に囲まれた小さな峠道はすぐに終わり、道は小泊の市街地へと下っていく。道の左側にホームセンターが現れ、ランナーが一人店内に入っていくのが見えた。そしてその先にあるのがファミリーマート小泊店だ。ここは特に寄る必要はなく、そのまま通り過ぎる。この辺りから道は平坦になり、走りやすくなってくる。片側一車線の道路は車も多いのだが、それでも以前ここを通ったときよりは交通量は少ない。やはりコロナの影響で、外出を控えるひとが多いのだろう。

前方に交差点が見えてきた。ちょうどランナーが一人、その信号にさしかかっていたのだが、意外にも彼はすっと国道を右に曲がっていなくなってしまった。あれ？おかしいな。津軽の像記念館へは直進するはずだ。もしかしたらコースを間違えたのかもしれない。早く教えてあげようと思ったが、こちらの足が遅いため交差点に着いて右方向を見たときにはすでに、彼の姿はカーブの向こうに走り去っていた。
ふと、開会式のとき舘山代表が、津軽の像記念館はショートカットせず必ず立ち寄ってください、と言っていたことを思い出す。その言葉を聞いたとき、正直驚いた。そのようなランナーがいるなんて信じられなかったからだ。右折していった彼も、もしかしたらコースを間違えたことに気付いて戻ってくるかもしれない、いや、きっとそうだと思いながら交差点で信号待ちをする。やがて青になり、道を渡りながらもう一度右手を見てみたが、やはり誰も戻って来なかった。

交差点を直進して少し進むと道も狭くなってきて静かな住宅街に入る。そして細い道の五差路を右折して、すぐ先のぐっと盛り上がった短い橋を渡ると小学校に突き当たる。左折して学校の塀沿いに行くとまた道は突き当りとなり、それを右折して小学校を回り込んですぐ先の十字路をまた右にいくと、高台の上に小さな建物が見えてくる。あれが津軽の像記念館だ。建物に上がる階段を登るときふと見ると、以前記念館の前にあったグランドが工事をしており、自販機が撤去されていた。ここで水を買うつもりだったが、あてが外れてしまった。

津軽の像記念館ＣＰ５に着いた。

第一回大会のとき、初めてここを訪れたのは雨が降る深夜の時間だった。第二回大会のときは小雨の降る蒸し暑い午後の遅い時間、第三回と第四回大会のときは晴れて暑い朝だった。そして今年、三年振りにまたここに来ることができた。階段を上がって記念館になっている小さな木造のモダンな建物のすぐ脇に、小説「津軽」の中に出てくる太宰治とタケの像がある。その周りは広場になっていて、あいにくの天気だが遠くを見渡せて気分はいい。時刻は９時４１分だ。

二人の表情を見てみると、太宰治はやたらと照れ笑いをしていて、反対にタケは妙にしかめっ面をしているのが面白い。二人が再会を果たした小学校も今はすっかり現代的な校舎となって、当時の情景を想像することはとても難しいのだが、それでもやはりこの場所は、血の繋がりの無い二人がお互いに絆を確かめ合った記念の場所なのだ。

小説「津軽」を読んでみたのだが、太宰治という人物は意外と気さくな人だったのではないかというのが率直な感想だ。一見気難しそうで、無口でとっつきづらい人かと思いきや、話してみると朗らかに微笑んで答えてくれるような人物。そう、この像のように感情を隠さず笑っている人なのかもしれない。そしてタケも昔話に涙したあとはこわばった顔をすぐに崩して、笑って最近の出来事などを話していたのかもしれない。

グラウンドを見下ろすように並んで座る小さな像の二人は、小泊の港の向こうに金木の懐かしい街並みを見ながら、いつもここでひそひそとおしゃべりしている。ぜひ一目その表情を見てもらいたいと思う。きっといろいろなことが想像できることだろう。

記念館の階段を下りて一旦もと来た道を少し戻り、先ほどの十字路で小学校方向を見てみたが誰もいない。いつもならば、この記念館に着けば必ず他のランナーと会えたのだが、今日は先着していた人も追い着いてきた人もおらず、見える範囲でもランナーの姿は全く発見できなかった。皆、素通りしてしまったのだろうか。

無人のチェックポイントを通らないランナーを、決して非難してはいけないと思う。どのような旅をするかは個人個人が判断することであって、他人が口を挿むべきではない。あくまでランナー本人と「みちのく津軽ジャーニーラン」の関係であると理解しなくてはならないのだ。したがって、この記念館で通過チェックをする必要も、ましてやスタッフを配置する必要などもない。タケと太宰治に会えなくて残念でしたね、でも次回はぜひ行ってみてください。ただそれだけを伝えたい。

十字路を右に曲がり、住宅街を通り過ぎて行く。民家や小さな商店、船舶置き場などここで穏やかに暮らす人達の生活を間近に見ることができる。日曜日の朝の静かな時間が流れていて、まるで自分が地元の人間になって散歩をしているみたいだ。

やがて住宅は無くなり、道は里山を越えるために登り坂となる。くねくねとした細い急坂の山道をせっせと歩いてゆけば、国道に出る。それを左に曲がって海を目指して走ろう

としたが足が思うように動かず、走り出してもすぐに歩いてしまった。道は小泊の道の駅に向かって下り坂となり、雨は弱く降ったままだ。筋肉を傷めないよう慎重に下りて行く。山の中のカーブをいくつか過ぎたあとの直線の向こうに海が見えてきた。あれが道の駅だ。

小泊の道の駅。ここは印象に残る場所だ。なぜならここは、大勢の人々に出会える最後の場所だからだ。この先、海岸沿いの数えきれないほどの人気の少ない静かな集落を通り過ぎて行く。疲労はピークとなり、日暮を迎えてますます無口になってゆく。夜空と真っ暗な海を見ながら、第二レストポイントを目指すだけの孤独な旅となってゆくのだ。

毎年このジャーニーランと同じ日程で開催されていたビーチサッカーの大会も、今年は行われていないようだった。だがそれでも、この夏の休日を楽しく過ごしたい人たちが集まっていた。それはまるで、逃れることのできないコロナウイルス禍のなかでも、ほんの少しの時間でもいいから自らを縛りつけていた制限を忘れたいという、嬉しさと罪悪感が入り混じった熱気が満ち満ちていた。

見晴らしのいい場所にある建物でトイレを使い、自販機で水を二本買う。重くなってしまうが、次の自販機は竜飛崎を越えてからでないと無いので仕方ない。

車が頻繁に行き来している駐車場をゆるゆると歩き、海に面した国道に出て走り出す。また雨が降ってきたが、すぐに弱くなってきた。おそらくこのまま回復していくのかもしれない。ただ、左手に見える海の波は荒かった。

道の駅小泊から龍泊ラインと呼ばれる峠道の入り口までの道は、海に沿って右に左にと地形を忠実になぞり、時に大きく入り江を回り込むように弧を描き、海に突き出た半島を越えるとまたゆるくカーブが右に左に続いてゆく。このパターンは、この先竜飛崎を越えてからも続いていた。幸いこの区間は登り下りは少なく、少し楽だ。雨と風に耐えながら、歩きとゆっくりとした走りを繰り返す。

道の駅を出発したときは雨が降っていたが、徐々に弱くなっていった。相変わらず風は吹いているが、それほど寒くはなく気が楽になった。ただ海を見てみると、水面に顔をだしている岩に波が激しくぶつかっていて、少し荒れているようだった。いくつか小さな半島を越えたとき、ずっと向こうの半島に一人のランナーがいるのが見えただけで、ずっと一人だった。

途中の道沿いに、七つ滝と呼ばれているところがある。両側の高い崖の間から小さな滝が幾重にも重なって流れ落ちている。奥行き感があって、まるでこちらに向かって迫ってくるような流れだ。雨が降っていたせいか、水量も多い。海と風の音しか聞こえないなかで、ここを通るときだけ爽やかな気分になる。ここを過ぎれば、龍泊ラインの登り口まではもうすぐだ。

カーブをいくつか抜けると、前方の山の斜面を一直線に横切って登っていく道路が見えてきた。その坂道が始まる場所、ちょうど道路の右側の路肩が広くなっているところに、スタッフがエイドを作っていてくれた。龍泊ラインの頂上にある、眺瞰台と呼ばれる展望台に設営予定だったものだ。到着したとき、ちょうどランナーが一人出発していった。宮崎さんだった。彼女は歩くのが早い。きっとずっと先のほうに行ってしまうだろう。
エイドでバナナを食べながら、レインジャケットを着た。いつもこの先は風が強くなり気温が下がる。龍飛と小泊は全く別世界なのだ。ただ、今日はいつもと違ってこちら側に雨が降り風が吹いている。ということはもう頂上は風雨が通り過ぎているのかもしれない。そう思うと、少し気が楽になってきた。ここからは歩いて登るので、無理して走らなくて済む。

わざわざ山を下りて、再び後方のランナー達のためにエイドを設営してくれたスタッフの方々にお礼を言い、出発する。そのとき、後続のランナーが一人やってきた。自分が最後尾だと思っていたが、まだ後ろにいたようだ。完走を目指すのなら、この時間にはもうこの場所にいなくてはならない、いや、すでに厳しい時間だ。時刻は１１時半をまわっている。

龍泊ラインは、海に突き出た大きな半島を越えて行く山道だ。前半は小泊側のつづら折りの急坂を一気に上り、その後、竜飛に向かって山あいをゆるやかな坂道が続いていく。
登り出してすぐ、急坂が次々と現れてきてペースががくっと落ちてしまった。脚は疲れ切っているので、一定のリズムを維持して歩くのが精いっぱいだ。ただ、大きく道が折り返すときに見下ろす深い谷間の眺めが素晴らしい。おそらく厳しい気象条件のために、高い樹木が育たず低い木々や草にびっしりと覆われた山は緑深く、人間が全く立ち入ることのできない本当の自然がそこにある。この険しい山に、こうして見事に道路を作り上げた人間の凄さにあらためて感動してしまう。これは、歩いているからこそ実感できることだ。

ふと後ろを見ると、さきほどエイドに到着してきたランナーがもう追い着いてきた。ただ彼は一定の距離を置いて後ろに着いたままで、眺瞰台までのあいだ追い越してくることはなかった。
小泊側の急坂区間が終わり、前方に視界が開けて歩きやすくなってきた。雨はやみ、風も収まっている。天気はあいかわらず曇っているが、気温もあまり低くなく体に負担がかからずほっとした。

道の右側を淡々と歩いていると、前から一匹の野生の猿がこちらに向かってゆっくりと歩いてくるのが見えた。体の大きなその猿は、数十メートルほどまで近付くと、ぷいっと

横を向いて道路の反対側へ渡ってしまい、そしてそのまま道を隔てたまますれ違っていった。するとまた前方に、また猿が一匹歩いてきた。いますれ違った猿と同じくらいの距離に近付くとその猿は今度は、右側のガードレールをひょいっと飛び越えて、がさがさと草むらのなかに消えてしまった。そしてまた同じくらいの間隔でまた猿が一匹現れ、同じようにガードレールの外側へすっと消えてしまった。

以前、スキー場に向かう途中の峠道で休憩していたとき、道の外側の雪原を移動する十匹ほどの猿の群れを見たことがあるが、やはりそのときも一列で一定の間隔をおいて歩いていた。先頭と最後尾の猿は体が大きく、子猿を含めた数匹の群れ全体を守るように導いていたのを覚えている。いま出会った猿たちも、きっと今日の自分と同じように餌場を探して旅をしていたのだろうか。彼らには決して敵意は感じられず、自然条件の厳しいこの竜飛の地で生き抜いてきたとは思えないくらい、穏やかな目をしていた。目的地に向かってただ無心で歩き続ける者同士の、無言の出会いだった。

頂上に向かって道は大きく右に左にと山をよけていく。麓から一時間半以上かけて、ようやく最後の勾配のある坂道に来た。道は左右に大きく折り返し、その山の頂上に眺瞰台が見える。上り初めて後ろを振り返ると、いま登ってきた道や山、雲の切れ間に遠くの海も見えていい眺めだ。

眺瞰台と呼ばれる場所には広い駐車場とトイレがあり、景色を見ながら休憩できるようになっている。到着したとき、ランナーが一人出発していった。駐車場の脇の縁石に腰掛け、レインジャケットを脱いでザックにしまっていると、トイレから出てきた宮崎さんと再会した。登っているときは全く姿が見えなかったので、とっくに下り始めているかと思っていたので意外だった。明るく挨拶して彼女はすぐに、霧がうっすらと漂う中を歩き出して、すぐに見えなくなってしまった。ずっと後ろに着いてきた彼も、すぐに霧の中に消えて行ってしまった。
駐車場には数台の車と観光客が何人かいるだけだ。楽しそうに話しながら眺めの良い場所を探して歩き回る人たちをぼんやりと見ながら、コロナ禍も少し落ち着いてよかったな、と思えてきて、なんだかこちらも嬉しくなってくる。
いつも必ず強風が吹いているこの場所も、今日は全くの無風で過ごしやすい。体も冷えずに出発することができた。

歩き出してすぐに、道端に何かが落ちているのがみえた。拾ってみると、ネックウォーマーだった。このような所に徒歩で来る人がいるとは思えないので、おそらく先行していったランナーが落としていったのだろう。次のチェックポイントである龍飛のコミュニティーセンターでスタッフに渡そうと思い、手に持って走り出す。

龍飛崎までの下りは、急な所は無いので一気に走れてしまいそうだが、ここで調子に乗って走ってしまうとその先で後悔することになる。ここまで１００ｋｍ以上走ってきたうえ、さらに延々と一時間以上かけて登ってきているのだから、体は想像以上に消耗している。龍飛から第二レストポイントのふるさと体験館まではまだ５０ｋｍ以上あるので、決して飛ばしてはいけない。龍飛崎が今日のゴールではないのだ。

とは言え、やはり走らなくては時間的に厳しい。ゆっくりでも走るべきなのだが、やはり歩きと小走りの繰り返しになってしまった。右に左にカーブを繰り返す道路は、霧に覆われていて見通しが悪く、景色も見えず静寂そのものだった。ランナーに一人抜かれたが、その姿もすぐに霧の中に消えてしまった。ただ黙々と自らの身体の声を聴きながら、何も考えず下っていく。手には、先ほど拾ったネックウォーマーを握ったままだ。

道はやがて木々に囲まれてきて、不意に人工物と出会う。大きな風車だ。

山道から下りてきて、後半にさしかかる目印になるのがこの風力発電の施設だ。ここに来ると龍飛崎が近付いてきたことがわかる。

初めてここを通ったとき、発電のために回転する巨大なブレードの風切音に驚いたことを思い出す。その音はまるで、低く大きく唸る叫び声のような風の音だ。第二回大会のときは、夕方に疲労困憊で山を下りてきてこの音を聞き、迫りくる夜への不安がいっそう掻き立てられてしまった。

今年も相変わらずこの発電所の大きなプロペラはぶんぶん回り、辺り一帯に津軽半島に吹く風の存在を大きく知らせている。

下りきったところにある道の駅の看板の先に見える、大きく曲がりくねった道を登り返し、小高い山を越えて坂道を下りていくと前方に大きなホテル、駐車場や龍飛崎への階段が見えてくる。ああ、ようやく着いた、と思う。

道路右側に建つ立派なホテル手前の左側に、青函トンネルの工事に伴う殉職者の慰霊碑の看板があり、なぜかいつもこの案内板だけが印象に残ってしまう。

このトンネルを造るために、いったいどれだけの人が亡くなったのだろう。一人の死者も出さずに工事を成し遂げることがどれほど困難なことか、そして彼らが死の瞬間に何を思ったか。歩きながら一瞬の間だけ、死者を想う。そしてまた走り出す。

ちらっとホテルの玄関を見てみたが、営業はしていないようだった。コロナの影響はここにもある、という現実をあらためて感じさせられてしまう。

その先、道の右側にはおなじみの津軽海峡冬景色の碑があった。備え付けられたスピーカーからは、この歌の二番の歌詞を聞くことができる。今日はその歌声を鳴らすことはし

なかったが、聞けばきっと誰もが一緒に口ずさんでしまうくらい有名な曲だ。龍飛岬という名前はこの歌で知った、という人も多いと思う。自分もその一人だ。

道は、竜飛崎の灯台がある高台の広場まで行く石段と階段国道の下り口からさらに先の、岬の先端にある駐車場まで続いているようだ。手前にも駐車場や食事処などがあり、有名な観光場所になっている。この日は人出は少なめだが、それでも賑わっている。天気も薄曇りだが悪くない。

左手の駐車場を通り過ぎたとき、併設された小さな食事処からランナー達が出てくるのが見えた。皆お揃いの鮮やかなオレンジ色のＴシャツを着ている。お昼ご飯にはいささか遅い時間だが、ちゃんと地元の味を堪能するなんて良い旅をしているなあ、とちょっと羨ましかった。

コースでは、一旦灯台まで上がってから折り返し、石段のすぐ近くにあるいわゆる階段国道と言われているきれいに整備された遊歩道の石段を下りてＣＰ７に行くことになっている。まずは灯台前の広場に向かって、ゆっくりと石段を登り始めた。

奥行のある階段を一段一段上がっていくのだが、歩幅と合わないために同じ足でばかり登ることになってしまう。何段かで右足と左足を入れ替えながら半ばまで来たとき、数人のランナーが降りてくるのに行き会った。お疲れさま、と笑顔で挨拶してすれ違ったとき、最後尾の男性が生真面目な表情で「ナイスジャーニー！」と力強く声をかけてくれた。おお、昨晩亀ヶ岡遺跡の手前で出会った人だ。こんなところで会うなんて、なんという偶然だろう。お互いに良い旅が続いていることに何だか嬉しくなった。

疲れてだるくなった脚を一歩一歩持ち上げて階段を上がり、ついに龍飛崎の灯台前広場に着いた。岬の突端の高台からは曇りながらも海が見渡せ、やっとたどり着けた安心感でしばし立ちすくむ。幾人かの観光客も景色を楽しんでいる。ここに来ていつも思うことは、風が強いことだ。でも今年はその風も穏やかだった。いつも自然の厳しさを感じさせる津軽半島が、今日は最後尾付近を歩く旅人たちに優しく風を吹かせてくれている。雨に激しく濡れて寒さに震えることもなく、こんなに楽に山を越えたのは初めてだ。誰にでもなく、ただただ感謝の気持ちがこみあげてきた。

すぐに引き返す。まだまだ旅は続くのだ。

広場から階段を下り、名物の階段国道をさらに下りていく。この階段は遊歩道のように石畳になっていて、しっかりとした手すりで真ん中が仕切られている。もともと幅は広くないのだが、この手すりのおかげでさらに人が通る部分が限られてしまっている。つづら折りに下へ続いているために見通しがきかないので、もし下から上ってきた人と鉢合わせ

してしまうとすれ違うのも大変だ。
　この急で高さのある階段を登ってくる人はほとんどいない。皆、車で海岸から迂回路を通って駐車場まで来て、階段の前にある国道標識の前で記念写真を撮るのがお決まりのパターンのようだ。

　筋肉痛の脚を一歩一歩こらえながら、雨で滑りやすい石段をゆっくり下りて行く。両側は植樹されていて、例年ならアジサイが咲いていてきれいなのだが、今日はその花々も時季が終わっていたようだ。

　黙々と階段を下りてきて、もうすぐチェックポイントに着く頃だろうかと思っていたとき、下から年配の夫婦と思われる二人組とすれ違った。幸いこちらは左側、彼らは右側を通っていたので問題なかった。
　こんにちは、と挨拶して通り過ぎる瞬間、はっと、自分がマスクをしていないことに気がついた。
　もしかしたら相手に不快な思いをさせてしまったかもしれないと思い、足早に階段をかけおり、その先をくの字に折り返したときだ。頭上から、どこまでいぐんですか、と声をかけられた。
　立ち止まって上を見上げると、いますれ違ったばかりのご夫婦が笑顔でこちらを見下ろしている。二人ともアウトドア用のレインウエアを着込み、階段国道をゆったりとハイキングしているようだ。もちろん、彼らもマスクはしていない。そして、観光地には似合わないようなランナー姿の自分に向かって、まるで近所の知り合いに会ったかのように、気さくに話しかけてくれたのだ。
　その優しい笑顔に思わずこちらも緊張感が緩み、はい、平舘をまわって弘前に帰ります、と笑顔で答えることができた。
　すると二人は、驚くふうでもなく笑顔のままでさらっと、あーそうですか、おぎをつげで、と返してくれた。そしてその楽しげな様子のまま、また歩き出して行った。
　ほんの一言だけの短い会話だったが、何だか気分がほぐれて心地いい。まだ１００キロ以上残っているのに、たいしたことのないような気にさえなってきた。その理由は、あの夫婦のあっさりとした物言いだったからだと思う。
　その後は誰とも出会うこともなく階段を下りて、海岸沿いの道路が見下ろせる場所にある龍飛地区コミュニティセンターに到着した。

　ＣＰ７龍飛地区コミュニティセンターは、階段国道をくだりきる直前にある、地区の集会場のような施設だ。斜面にへばりつくように建つ家々の隙間の路地を少し歩いたところにある。平屋の建物の中は広々とした大きな部屋とトイレやキッチンも備えられており、ランナー達はシューズを脱いで体を休めることができる。

着いて中に入ると、すでにランナーが数人横になっている。龍飛崎の食事処で見かけたオレンジ色のＴシャツのランナーも寝転がっていて、皆静かに過ごしている。時刻は１４時４０分だ。
ちょうどそこに宮崎さんがいたので、拾って持っていたネックウォーマーを見せて彼女のものか尋ねてみたが、違うとのことだった。仕方ないので、その場にいた女性スタッフの方に落し物だと思うのですが、と渡したところ、彼女は快く受け取ってくれた。そして長机で部屋の半分ほどが仕切られた向こう側の場所に、そのネックウォーマーを広げて乾かしてくれた。その丁寧な対応に、持ってきてよかったなと安心させられた。
予想以上に空腹を感じてしまったので、バナナのほかに小皿に入った麺を２杯頂く。しかし、少し後に到着したランナーがお替わりをもらおうとしたところ、もう残りは数杯しか無く、まだ後方のランナーのため残しておかなくてはならないとのことで断られていた。

後方を走るランナー達が着く頃、エイドの食べ物が少なくなっていることはよくあることだ。食料は自分で調達し、背負って持ち運ぶのが基本なのだが、少しでも荷物を減らしたいと誰もが思ってしまう。脚力の弱い者ならなおさらだ。朝に小泊のファミリーマートで食べ物を買い込み、それを背負って龍飛の峠を越えることなど誰でも躊躇してしまう。自分だってそうだ。しかし次の三厩までコンビニエンスストアは無い。彼はそこまで腹がもつのだろうか。自分だけおかわりをしてしまって後ろめたい気持ちになってしまった。
がらんとした部屋には午後の気だるい時間が流れており、数人のランナーは思い思いにのんびりと過ごしている。まだこれからも走り続けなくてはならないことなど、忘れてしまうくらいだ。

気持ちも落ち着いたので出発する。
玄関でシューズを履き、外に出ると建物と建物の間に階段があり、眼下に見える海沿いの通りに直接下りることができる。ふと、周囲の家が少なくなっていて基礎だけが残る空き地が増えているような気がした。以前はもう少し建物が多かったような気がする。徐々に人が減ってしまうのはなんとも寂しいものだ。

道路に下りると、左手にバス停が見える。以前の大会でここを通ったとき、二、三人のランナーがあそこでバス待ちをしていたことを思い出す。ここからならば三厩駅までバスで行くことができる。リタイヤした者にはちょうどいい場所なのだ。
と同時に、第二回２５０ｋ大会のときのことも頭によみがえってきた。今回のように昼間ではなく、その大会のときにここ龍飛のコミュニティセンターに到着したのは、１９時半をまわっていただろうか。雨と寒さと疲労で呆然と座り込み、食欲を失ってしまいながらも無理やりに持参していたアルファ米を食べていたとき、すぐ近くに居た女性ランナーがしきりにめまいを訴えていた。同行者とおぼしき男性と二人でその女性は、ボランティ

アのスタッフの一人にここから帰る方法を相談している。しかしその場に居合わせた誰もがその答えを知っていただろうし、彼女もわかっていたのだろう。自力で歩いていくしかないのだ。
　広い部屋の中には何人ものランナーが疲れ果てて横になっていて、静かなゆったりとした時間が流れていた。まるでこのまま朝まで眠り続けてしまいそうな人々を見てそのとき初めて、ただ漠然とリタイヤの恐怖を感じ、ただ黙々とアルファ米を噛んでいたのだ。
　そのとき不意に、すぐ隣に座っていた男性ランナーがこちらのほうを見て一言、そうだよな、食べたいものを食べるのがいちばんだ、と納得したようにつぶやいた。きっと彼は知っていたのだろう。長時間の移動を乗り切るためには、とにかく何かを食べ続けることなのだということを。その核心をついたような一言に思わずこちらもはっと目が覚め、彼と目を合わせて無言のまま頷いていたのを覚えている。

　龍飛地区コミュニティーセンターから次のＣＰ８三厩体育館までの道のりは、海岸に沿って津軽半島の地形を忠実になぞっていく。道は細くなったり広くなったり、ときに大きな岩をくりぬいたような隧道をくぐり、小さな集落をいくつも通りすぎてゆく。
　左側に海を見ながら、海岸通りの旅が始まった。三厩までの距離はたったの１２キロなのだが、やはり走り続けることは出来なくなっていて、少し走っては歩き、また少し小走りしては歩きを繰り返す。この道路から見える海は常にコンクリートの塀で区切られており、意外なほど静かなのは、きっと砂浜などがないために波の音がしないからなのだろう。
　小さな半島を越えて数軒の民家の軒先を通り、また半島を越えてをくりかえしていると、前方に何人かのランナーたちが見えてきた。ちょうど雨がやみかけていたところで、彼らはしばしトンネルで雨宿りをしていたらしい。幸い自分の方にはその雨雲は届かず、あまり濡れずにすんだのだが、先行していた人達はかなり雨に打たれたらしい。
　そのトンネルに近付いていくと同時にその集団は出発し始め、すぐにそれぞれのペースでばらけていくのが見えた。自分もそのトンネルをくぐったあと、何人かのランナーを追い越した。彼らはずっと併走していたらしく、ときおりおしゃべりを交えながらひたむきに旅を続けている。みんな、無事にふるさと体験館まで辿り着けたらいいな、と思った。

　見通しの悪いこの海岸通りは、あっという間にランナー達のお互いの姿を隠してしまう。静かな海を横に見ながら、ただ風に吹かれながらの孤独な時間が流れていく。幸運なのは、ほとんど雨にも降られずしかも気温も低くなく、風が冷たくないことだった。

　しばらくすると、前方にまたひとりランナーが見えてきた。懸命に歩くその後ろ姿を見て、スタート直後に追い越した彼だとすぐにわかった。
　さくらの百貨店を出発して弘前城に向かっていた序盤、まだ皆元気よく走っているなかで、ひとりだけ早歩きで進んでいるランナーが彼だった。大股で腕を懸命に降り続けて歩

くその速度はゆっくり走っている自分とほとんど変わらず、なかなか追いつくことができなかったのだ。
　みちのく津軽ジャーニーランは、すべてを歩きで完走することは難しい。
　走らずに歩き続けるということは、おのずと休息に充てる時間も削っていってしまうことを意味する。休憩をほとんど取らずに長時間連続した歩行は睡魔を招きやすく、より一層の速度低下を招く可能性があり、制限時間内での完走を危うくさせてしまうのだ。
　いま目の前を必死で歩いている彼は、すべてを歩いてこのみちのく津軽ジャーニーランを完走するという大きな挑戦をしているのかもしれない。それが成し遂げられたとしたのなら、本当にすごいことだと思う。
　疲れているのだろう。速度は大幅に落ちていて、辛そうだ。道の左側を進む彼を、反対の右側から追い越したとき、おつかれさまと声をかけた。彼はすぐには反応できず、苦しい表情のまま短く返事を返してくれただけだった。

　三厩体育館までの道のりの途中、大体半分くらいの距離のところにミサゴ岩というものがある。海を隔てる塀越しの海面に、ひらべったい防波堤のようなものが見えるだけなのだが、名前の由来などの詳しいことはわからない。ただ、先の見えないこの海辺の道路を行く者にとっては、ひとつの目印になる。もう少しでチェックポイントだ、頑張ろうと自分を励ます。空は曇っているが少し明るくなっていた。

　またしばらく海岸通りを淡々と進んで行くと、見覚えのある分岐点に着いた。左はそれまでと同じ海沿いの車道で、道なりに続いているような右手の道は旧道のようなおもむきだ。第二回大会で初めてここを通ったときは夜間だったこともあり、真っ暗な海沿いよりも人家が並んでいるこの旧道を選んでしまった。しかしこの旧道は意外なほど坂がきつく、道が狭いがゆえに、家々にいる人達と今の自分の置かれている状況のあまりの違いを通感させられてしまったのだ。
　この二手に分かれた道はこの先でまた合流する。その交差点を越えれば、三厩の市街地が見えるはずだ。

　淡々と走りと歩きを繰り返して、旧道と合流する交差点に着いた。歩道は広々としていて、道はここからきれいに整備された二車線の直線道路となり、海に面した市街地になる。両側に建ち並ぶ建物のずっと向こうの方に目をこらすと、小さくファミリーマートの看板が見えた。あそこが三厩体育館のチェックポイントだ。

　道路右側の歩道を走っていくと、徐々にファミリーマートに近付いてゆく。目的地は実は体育館ではなくあのファミリーマートなのだ。
　少し息を切らしながら、やっと到着した。時刻は１７時を過ぎている。

ファミリーマート外ヶ浜三厩店。
ここはとても重要な場所だ。

第一レストポイントの鰊御殿と第二レストポイントのふるさと体験館。そのちょうど中間地点にあり、ここでの補給がその後の道程に大きく影響する。
後方を走るランナーにとっては、大体この辺りでスタートしてから２４時間が経過する。夜間走行を乗り越えて朝を迎え、竜飛を越えて歩き続けて夕方となり、知らず知らずのうちに疲労により判断力が落ちている。身体はエネルギーよりも睡眠を欲するようになり、本来ならばここでしっかりと食べないといけないのだが、それに気付かず追われるように先を急ぐあまり素通りしそうになってしまう。
過去三度、このコンビニエンスストアの前を通ったが、第二回大会の時は夜間でしかもチェックポイントはまだ先の今別のふれあい文庫前だったこともあり、何も考えず素通りしてしまった。第三回大会のときは食べ物ではなく、なぜかひげそりなどの洗面道具を、そして前回のときは棒アイスを食べただけだった。いずれのときも、この店の重要性を理解していなかった。結果、その後の夜間走行では大幅にペースダウンしてしまったのだ。

店の前の駐車場を見てみたが、ランナーは一人もおらず、店内にも見当たらない。ふと道路の反対側にあるエイドステーションのほうを見ると、数人のランナーとスタッフがいるのが確認できた。あたりは夕方の静かな時間が流れている。

店内に入ってまず、目的のものを買おうと売り場を探してみたのだが、無かった。ずっと買おうと思っていたものは、おにぎりだ。しかし、売り切れていた。弁当類もいっさい無い。想定外の状況にしばし呆然としてしまう。今回に限っての偶然なのか、いや前回、前々回も売り切れていたのだろうか、思い出せない。
何か糖質をとらなくてはならない。しかも沢山。すこし焦りながらパン類の棚を見てみたが、甘い菓子パンか油っこい惣菜パンなどしかなく、とても食べる気が起きない。一瞬、６枚切りの食パンを買おうかと思ったが、ザックに入らない。それでも何か買わなくては、ということでなるべく甘くなさそうな、小さな丸いパンケーキでクリームをはさんだものを手に取った。そして即席のきつねうどんを選び、また惣菜類の棚にもどって咄嗟にパック入りのハムを掴む。とにかく塩分と糖質が欲しかったのだ。
レジを済ませてカップ入りのうどんにお湯を入れて店を出た。目の前の交差点をわたり、向かい側にあるＣＰ８三厩体育館に到着した。時刻は１７時０５分だった。

三厩体育館はこの外ヶ浜町の中心部にある立派な施設だ。建物は道路から一段高い位置に建てられており、入口を入ったところにエイドステーションとしてテーブルが設置され

ていた。
　建物の前でスタッフの人達が労いの言葉をかけてくれた。そのうちの一人が、鰊御殿でもランナーを撮影してくれていた越川さんだ。彼女にレンズを向けられたものの、片手にカップうどん、もう一方には菓子パンとパック入りのハムを持っていて、およそマラソンランナーとは思えない自分の姿に思わず笑ってしまう。そして彼女もいっしょに笑ってくれた。いつも彼女は笑顔だ。

　体育館入口の前の階段に腰を下ろし、ハムを食べる。しょっぱくて美味い。長時間の運動で身体が欲しがるものは甘すぎるジェルではなく、塩分だ。しかし、コンビニエンスストアで手に入るもので、塩気が強いものは意外に少ない。おにぎりの具にしても、弁当類のおかずにしても、甘みがあるものが結構多い。
　つい容量の多いお徳用のものを買ってしまったので食べきるのに難儀したが、ハムを食べ終えてうどんを食べ始める。何気なく目の前の道路の先のほうを見ると、ランナーが数人見える。こうしている間にも一人またひとりと出発していって、体育館前にいるのは自分をふくめても数人程度だ。
　そして今走ってきた道の方を見てみると、やはり遅れて到着してきたランナーが間隔を空けて一人またひとりとやってくる。そのような疲れ果てた人達にも、越川さんはじっと彼らを見つめてその場に立ち続け、ようやく近付いた頃に先ほど自分にしてくれたのと同じように、ねぎらいの言葉をかけ、シャッターを切っている。ランナーも苦しさをこらえほんの一瞬だけ笑顔をつくり、彼女に応えようとしている。そしてそのやりとりを、その場にいる者が皆のんびりと眺めている。曇り空の穏やかな夕方の海辺の街は、静かでゆったりとした時間が流れていた。

　食べながら、向かい側のファミリーマート外ヶ浜三厩店を何気なく見てみると、途切れることなく客が出入りしている。それはランナーであったり、地元の人であったりなのだが、必ず誰かが利用している。
　交通量の少ないこの大通りの一方からやってきた一台の自動車が駐車場に入り、数分後に出発してどこかにいってしまうと、もう一方からまた車がやってきて駐車場に入ってくるといった具合だ。おそらく潮風の影響だろう、少し色あせて見える緑色の看板のこのコンビニエンスストアは、都会にあるそれとは違って周囲の建物によく馴染んでおり、地元の住民には欠かせない大切な場所として存在している。

　すべてを食べ終わってあらためて周囲を見てみると、ランナーはもう二、三人くらいしか残っていない。店で買い物をしている間にほとんどの人達は先行して行ったようだ。体育館の入り口をのぞいて見ると、入ってすぐのところにテーブルが置いてあるが、食べ物は大分少なくなっている。スタッフの方々も一仕事終えたように、ゆっくりと作業をして

いる。

　ふと、玄関わきに伏見さんらしき人がいることに気が付いた。マスクをしているのではっきりとはわからないが、おそらく彼だと思った。
　この津軽ジャーニーランを実現すべく、力を尽くしてくれた人。多くを語らずとも、ランナーなら皆すべてを理解している、彼の存在の大きさそして有り難さ。そのような人がいま、せっせとランナーのために縁の下の力持ちに徹してくれている。何時間もここで我々を待ち続けてくれたのだろう、少し疲れている様子で道路を眺めながら一息入れている。

　彼もランナーとして記念すべき第一回大会を走っている。
　いつの日か、２６０キロ以上もの距離を走り切り、ゴールにたどり着いたときのあの感動を、彼にも味わってほしいと心から思う。

　スタッフの方々にお礼を言い、出発する。目の前の道路をそのまま進むと程なく大きな橋を渡る。左側は相変わらず静かな海が広がっている。空は曇っているが明るい。

　外ヶ浜町はいつも海が見える街だ。
　そして、その海とつながっている広い広い空から吹く風が、ここちよく体をつつんでくれる街だ。
　外ヶ浜町の町長は女性で、ランナーでもあるという。
　彼女はきっとこの海が見える部屋で執務をこなしつつ、広く穏やかな時が流れる町を忙しく駆け回っているのかもしれない。そして数少ない休日のひとときを、この海から吹く風を大きく吸い込みながらのびのびと走り、ふとこの橋の上で脚をゆるめ、海を見るのだろう。今日の自分達と同じように。

　橋を渡り終えると左に分岐する交差点がある。まっすぐ行くとバイパスとなり、ずっと先の方で左に分岐した旧道と合流する。第二回大会のとき、夜間ということもあって、この交差点を直進してしまったことを思い出す。その後の大会でも、ここで道を間違えてしまうランナーが何人かいたようだ。

　交差点を左折してさらに海沿いの道を進みながら、左足の異変に気付いた。いや、随分前から予兆はあった。左太ももと左の尻の筋肉が徐々に痛くなってきて、走る速度が更に落ちてきていたのだ。しかしここにきて、いよいよ走ることも辛くなってきてしまった。原因はわかっている。二週間前に起こした右ふくらはぎの肉離れのために、全く練習が出来なかったからだ。
　故障してしまったので、まったく走ることができずにこの日を迎えてしまった。歩くこ

とはできたのだが、そうはせずにあえて完全に休養することにして、ぎりぎりまで回復させることにしたのだ。走ったのはスタート前日、自宅付近を１５分ほどゆっくりジョギングしただけだ。痛みは引いたのだが、筋肉が落ちてしまったので脚に力が入らない。それでもゆっくりと走ってここまで来た。左脚が痛むのは、右脚をかばっているからかもしれない。
　予測よりはるかに遅いペースで進んできたが、この先もっと時間がかかってしまうことになり、落ち込んでしまう。救いなのは、右ふくらはぎには痛みが無いことだ。

　しばらく進むと、道の両側に建物が並び建つ今別の市街地に入った。夕方ではあるが、車の往来も少なくて走りやすい。
　左側にふれあい文庫という、市民図書館のような施設の駐車場がある。ここは第二回大会のときもチェックポイントだった場所で、夜遅い時間に疲れ果てて到着したことを思い出してしまう。
　あのときと同じように、また二度目の夜が迫っている。

　街中を歩いてゆく。このあたりから、道路は細かく上ったり下ったりと地形に忠実になってゆく。上り坂では必ず歩くことにしているので、おのずと歩く時間が増えて行く。町の中心部を過ぎて、県道１４号線との交差点に着いた。地図上では丁字路だが、実際には左右に分岐するＹ字路のようになっている。

　この交差点を右に行けば、小国峠を経て第二レストポイントであるふるさと体験館の先の大平という場所で、今回のジャーニーランのコースに合流する。第二回大会のときだけ通った道だ。
　そのときはこの、決して標高は高くないのだが緩く長い坂が延々と続くこの区間で、多数のリタイヤ者が出たようだった。
　当時の夜は先行するランナーの赤い点滅灯も見失い、後続の者も全く見えない霧雨の降る真っ暗な道路を、足裏に出来た肉刺の苦痛と、寒さと、そして睡魔に耐えながら、一歩一歩上り続けていた。
　どのぐらい歩き続けただろうか、道路の真ん中にランナーが５,６人集まっているのが見えた。各々のヘッドランプが付近を明るく照らしていている。近付いてその内の一人の女性ランナーに尋ねてみると、なかなか峠に着かない苛立ちでつい、皆で立ち止まってしまったとのことだった。なかなか着かないよねえ、とうんざりした表情でつぶやくと彼女は歩き出し、すぐに他の人々もまたぞろぞろと走り出していってしまった。そしてまた真っ暗闇の中に、ひとり取り残されてしまったのだ。
　峠は結局、そこから少し先の方、坂が終わる場所に小国峠と標識があるだけだった。

今日はその県道１４号線には曲がらず分岐を道なりに直進する。やがて道は空と海が広々と見える海岸線の道路になり、市街地を抜けたことがわかる。右手の人家はまばらになり、畑や原っぱだらけの直線的な道になった。海も良く見える。
左脚をいたわりながらゆっくり走ってゆくと道路の右側に駐車場と公衆トイレがあり、ちょうどランナーが一人出て行くところだった。休みがてら自分もそこで用を足すことにする。
再び道路にもどると道の前後には誰もおらず、風の音だけを聞きながらの孤独な旅になった。陽もだいぶ傾いてきている。車はまったく通らない。静かな夕暮れが訪れようとしていた。

海岸線が終わると一旦急な坂を上り、小さな集落を通る。道は少し狭くなり、両側に民家が並ぶのどかな町を、登り坂は歩き、下り坂や平坦なところはゆっくり走りながら通り抜けると、ここまでずっと右側を平行して走っていたバイパスと合流して左折した。交差点には信号も無く、また車も走っていないので道路右側を路肩から少し間を取りつつ、のんびりと走る。

道はまた海岸に向かって下り坂になり、雑木林の向こうの方にまた海が見えてきたとき、少し先の道路左側の空き地から、一台の白い車が出てくるのが見えた。そして、窓の開いた運転席の女性がこちらに向かって、キャンプ場には必ず来てくださいねーと叫んで、走り去って行ってしまった。初めは地元の人かと思ったが、どうやらボランティアの方だったようだ。
今まさにそのキャンプ場に向かっているのだから、なぜあえてそのようなことを言うのかよくわからなかったが、もしかしたら素通りするランナーがいるからだろうか。もちろん自分は必ず立ち寄るつもりだ。
声をかけてくれたあの女性の、よく通る元気の良い声が強く印象に残った。

道はまた海岸線に戻った。右側はコンクリートの壁が続き、左側には海がすぐそばまで迫ってくるようだ。そして先のほうには半島が見えていて、そこに着けば明るい時間帯の海辺の旅は終わってしまうことを意味している。

徐々に道が上り始め、ふうーっ大きく溜め息をついて歩き出したそのとき、辺りが急に陽に照らされて明るくなった。
左後方を振り返ると、水平線に夕日が沈んでいくところだった。スタートしてから初めて見る太陽だ。ちょうど左右の陸地に挟まれた真ん中の海に、太陽が輝いていた。思わずおお、と声が出て立ち止まり、海を見てしまう。
左側に見えているのは津軽半島、右側は下北半島か北海道か。どちらでもよかった。と

にかく、きれいだった。最後尾付近でこの時間にこの場所にいたからこそ、見ることができた景色に、何だか励まされたような気がしてくる。

半島を上る急坂を歩きながら、何度も夕日に染まる海を振り返り、そしてまた雑木と草っ原に囲まれた道を進む。過去の記憶では、ＣＰ９の高野崎キャンプ場の手前にももうひとつキャンプ場があったはずだ。予想通り、しばらく行ったところに駐車場と公衆トイレがあったのだが、公園だったはずの緑地には人気が全くなく、しんと静まり返っていた。

この公園を過ぎれば、その先に高野崎キャンプ場の標識が現れるはずだ。ところが道は徐々に下り始め、漁港の街へ向って行く。おかしい、見落としたか。いや、そんなことはない。あたりは暗くなり始め、焦りを感じてきた。
足早に小さな港の街を通り抜けて、また半島への道を上る。やはり勘違いだったか。想定外に多く時間を費やしてしまった気がして、気が重くなってしまう。もう日が暮れてしまったというのに。

ふたたび半島の上にあがり、気持ちを落ち着かせて走り出したとき、道の左手の空き地からランナーが一人ひょいっと現れた。
大体この時間になってくると、疲労と睡魔で失速する者が出てくる。本能的に寝場所を探して道の左右を蛇行し、立ち止まるとハッと我に返りまた道路に戻るというパターンを繰り返してしまうのだ。
ところが、いま目の前に出てきた彼は少し違うようだ。足取りはわりとしっかりしていて、後ろ姿を見ても睡魔と闘っているようには見えない。彼がいた場所を見てみたが、民家と民家の間の原っぱのようなところで、横になれるようなベンチは無かった。
短くあいさつを交わし先に進んだが、彼は走らず後方を歩いたままだった。

しばらく進むと道の右側に歩道があらわれ、ゆるく下り始めた。記憶がよみがえり、今度こそ高野崎キャンプ場に着くのだと確信した。なるべく走る時間を長くして、急ぐ。

もうすっかり暗くなってしまったが、標識も確認し、無事に高野崎キャンプ場に到着した。大きな駐車場の奥の、海を見下ろす高台に芝生が広がるきれいな所だ。過去二回、このチェックポイントを訪れたが、いずれもテントは二、三張りくらいしか見かけなかった。しかし今年はコロナの影響でブームがやってきたのだろうか、所狭しとテントが立ち並んで大賑わいだ。
駐車場を通り抜けてすぐのところにある屋根付きの炊事場付近に、エイドステーションが設営されていた。スタッフの人たちが明るく迎えてくれる。時刻は１９時５１分だった。

二日目の夜

これから先のことを考え、しっかり補給しなくてはならないのだが、やはり食欲が落ちてきてしまった。三厩でカップうどんとハムは食べたのだが、もうすでにそのエネルギーは使い果たしてしまったようだ。エイドのバナナを食べたが、それだけでは平舘のチェックポイントまではもたないかもしれない。ザックの中の菓子パンは、平舘から先の区間のために取っておかなければならない。三厩のファミリーマートでもっと買い込んでおくべきだった、また今年も判断を誤ったか、などと考え込んでいると、スタッフの元気の良い女性が紙コップに入った味噌汁をすすめてくれた。一瞬、水分の摂りすぎへの懸念が頭をよぎったが、塩分の補給には最高だ。躊躇せず頂くことにした。

お湯を入れてもらった味噌汁には、わかめやお麩などの具も入っていて本格的だ。日没で気温も低くなり、あまり走れず体温の下がった身体に温かい飲み物が本当に美味しく感じてしまう。

飲みながら海の方を見てみると、水平線付近にわずかに夕日の色を残すだけで、空はもう夜になっていた。ここにいた人達はきっと、すばらしい夕焼けを見たことだろう。

そばのベンチには宮崎さん、それから龍飛コミュニティセンターで寝ていた蛍光オレンジのＴシャツを着たグループのランナー達も休んでいた。彼らにはいつのまにか抜かされていたらしい。みんな、元気そうだ。きっとこの先の夜間走行も難なくこなせるのだろう。まわりでは、キャンプをする人々が灯りを点し、わいわいと夕食の支度で忙しく歩き回っており、その風景の中にエイドステーションも違和感なく溶け込んでいる。

そのとき隣のほうの暗がりで、自分より少し遅れて到着していたランナーが、スタッフにしきりに足の肉刺の痛みを訴えているのが聞こえた。先ほど抜かした人だろうか。道理で走れなかったわけだ、と思った。

肉刺なら、針で刺して水を抜き絆創膏で押さえてしまえば問題ない。たいしたことなくて良かった、彼もこの先旅を続けられるだろうと思っていたところ、会話は意外な方向に進んでいった。

彼は、ここでリタイヤする場合はどうしたらいいか、バスはまだあるかといった相談を始めている。この時間に路線バスはおそらく無く、前に進むしかない。予測していたようなことをあらためてスタッフから言われ、黙ってしまっている。

彼は針と絆創膏は持っていないのだろうか。それともいままで肉刺を創った経験が無かったのだろうか。様々な疑問が頭をよぎった。

確かに、肉刺は針で水だけを抜いて、表皮をそのまま残して上から絆創膏を貼ってしまえば、痛みはかなり和らぐ。しかし、これはあくまで緊急的な処置であって、けして身体によいことではない。走行後には、その表皮が乾いて傷が治るのに相当な時間がかかってしまい、日常生活にも支障をきたしてしまうだろう。だから、肉刺の処理は完全に自己責任で行わなければならない。

針と絆創膏ならありますよ、と言うべきか迷っていた。ここまで自分には肉刺は出来なかった。明日はきっと晴れるだろうから、肉刺を創ってしまう心配もない。絆創膏は何枚も持っているし、針なら安全ピンで代用できる。彼に今自分が持っている裁縫用の針と絆創膏を差し上げてもまったく問題はないのだ。ただ、こちらからそれを申し出て、結果として彼の傷の治りを遅くしてしまったら申し訳ないことになってしまう。だからそれはできなかった。ただ、彼からの一言を待っていた。すいません、針と絆創膏はありますか、という言葉を。そしてすぐに背中のザックをおろして、中から針と絆創膏を取り出すつもりだった。

味噌汁の具に入っていたワカメを噛みながら、ちらと彼のほうを見ると、言葉を失って途方にくれた表情がランタンの明かりにぼんやり照らされているのが見えた。彼はここから平舘を越えて、ふるさと体験館まで激痛をこらえながら延々歩き続けなくてはならない。そして朝を待ち、近くの中小国駅から電車に乗って帰るしかないのだ。きっと相当辛いだろう。その痛みを知っているがゆえに、こちらも気が重くなってしまう。やはり、こちらから申し出るべきだろうか。まだ迷っていた。でも、できなかった。
味噌汁も飲み干し、補給も終わった。もうそろそろ出発しなければならない。ザックを背負い直し、ヘッドランプのスイッチを入れてスタッフの人にお礼を言い、もう一度彼を見た。やはり苦い表情のままだった。

建ち並ぶテントと、灯りを囲んで楽しげに過ごしている人達からそっと離れて、駐車場を横切り、真っ暗な道路に戻った。道は雑木に囲まれて下り始め、次の港町へ向っている。補給をしたので少し元気になったが、左脚の痛みは相変わらずで、今さっき自分が取った行動が正しかったのかそうでなかったのかを考えてしまって、なかなか走り出すことができなかった。
真っ暗な下り坂をしばらく歩き続け市街地に近付いてきた頃、路面にもうひとつライトの明かりが表れ、ランナーが追い着いてきた。宮崎さんだった。彼女は穏やかにしかしよく通る声であいさつをし、さあ、次のチェックポイントを目指すわよ、と言っているかのような足取りですーっと走って行ってしまった。

曲がりくねった坂道を下りきって、街中に入った。両側に民家や商店が立ち並ぶ中を、ゆっくり走り、そして歩いて通り過ぎて行く。前後に誰もおらず、住民の姿もまったく無く、車も通らない。静かな旅が続く。
例年なら、この時間になってくると気温が下がってくるのだが、この日は珍しくあたたかい夜だった。

小さい街はすぐに終わり、急な坂をのぼって次の半島を目指す。道路工事をしていて車線がかなり狭くなっている区間もあったが、やはりこの日は交通量が極端に少ないので、無事に通り抜けることができた。半島へ向かう上り坂を歩きながら、眼下の暗い海と今通ってきた高野崎を見る。この、三つ目の半島を越えれば道は広く直線的な海岸通りになり、半島にはさまれた風情ある港街をめぐる区間も終わりだ。

坂道をくだりきると、道路が広くなった。歩道が整備されている区間もあり、走りやすくなる。第三回大会で初めてここを通ったときは、ゆっくりながらも走ることができ、時刻も夕暮れの頃で気持ちに余裕があった。
しかし、今はもう真っ暗でほとんど走れていない。脚の疲労は増すばかりで、米が食べられなかったことによるエネルギー切れの不安もあいまって、走る意欲が徐々に失われていく。平舘から先もしっかり走って、余裕を持ってふるさと体験館に到着するつもりだったが、それどころではなくなってしまった。
暗い海の上に点滅する無数の小さな灯りをじっと見つめてしまう自分がいた。

道はセンターラインのある片側一車線の道路となり、カーブも少なく開放的だ。通る車もほとんど無く、走りやすい。
いま自分が出せるだけの力を使って慎重に走り、苦しくなってきたら歩く。そしてまた、少し頑張って走り、また歩く。登り坂になれば歩き、下り坂になれば少し走る。漁港を抜け、民家が点在するなかを通り、また海と雑木だけの海岸線を進んで行く。考えているのは、交互に前へ出している右脚と左脚のことだけだ。ときおり海を見て、夜空を見上げる。

道がすこし狭くなって登り坂になっている区間で、先行していたランナーを一人、その先でまた一人抜いていく。自分もかなりペースが落ちていたはずだが、彼らはそれ以上に速度が出ていなかったらしい。この時間になってしまっていては、もはや会話などはする余裕もなく、お互い黙ったまま離れていく。

住宅が点在する市街地を抜けて、ゆるく上ってゆく道の先にトンネルが見えてきたとき、見覚えのあるランナーに追い着いた。宮崎さんだ。ペースが落ちてきているようだが、彼女はここからが粘り強い。きっと大きく失速することなく進み続けられるだろう。ほんの

一瞬、短くあいさつを交わす。

道は海に沿って続き、気温も下がってきた。ペースは遅いが、歩きを交えながらも何とか走っていく。目標は道の駅たいらだての手前、松前街道の分岐交差点だ。
夜間になると、昼間に比べて涼しくなり筋肉が冷まされて走るのが楽に感じてくる。しかしこれはあくまで感覚だけの話であって、実際には疲労が確実に進んでおり、回復しているわけではないのだ。
平舘のＣＰから先は、ふるさと体験館まで２０キロ近くある。走れるだろうか、歩き通しだとかなり時間を要してしまう。少しでもいいから睡眠は取りたい。エネルギーはもつだろうか。いろいろなこと考えながら走ったり歩いたりを繰り返してゆく。
気が付くと市街地を抜けて、真っ暗闇の向こうへ一直線に続くバイパスと、左の松前街道と呼ばれる旧道へ分岐する丁字交差点に着いた。大きく溜め息をつく。

松前街道に入ると、右側は松林、左は海のすぐそばを通る風情のある道になる。この道路を走るときはいつも夜間だが、海を広く見渡せて気分が落ち着いてくる。車も全く通らずとても静かで、ヘッドランプの白い光が遠くの路面を照らすだけで、その先は闇だ。

道の駅たいらだてへの行き方は簡単だ。まっすぐな海岸線をしばらく進み、最初の曲がり角を右折するだけなのだ。ただし、看板などの案内標識は無い。一度だけ、自信がもてずに行ったり来たりを繰り返してしまったことがあった。一番疲労が出てしまい、判断を誤ってしまうのがこの平舘のチェックポイントだ。
真っ暗闇の中にぼんやり光る街灯の明かりをたよりに右折し、平行するバイパスに突き当たる手前の右側にある道の駅たいらだてが、ＣＰ１０だ。到着は２１時４６分だった。

敷地に入ってすぐの駐車場そばに、エイドステーションがあった。周囲にはベンチなどもあり、ランナー達が休んでいる。人数もわりと多めな印象だ。
いつもこの平舘のチェックポイントに着くと、すぐに身体が冷えてきて寒気がし、震えが止まらなくなってしまう。ここに来るまでに、歩きが多いゆえに体温を上げることができなかったからだ。
本当はここでゆっくり脚を休めて、しっかりと食べなくてはならない。次のふるさと体験館レストポイントまでは１９．８キロもあるからだ。しかも、深夜の孤独な走行である。だがいつもこのＣＰでは寒さのために長居できずに滞在時間が短くなってしまい、回復できない。

だから急いで食べなくてはならない。震えが来る前に。

ランタンの明かりのみの薄暗いなかで、テーブルに用意してくれていたバナナをもらい、口に入れる。そしてザックを背中から下ろし、三厩のファミリーマートで買ったパンケーキの袋を取り出した。二個入りの一つをかじってみるが、なかなか飲み込めない。身体は完全にエネルギー切れのはずなのに、この丸くてきつね色の、どら焼きの形をした小さな菓子パンひとつが、食べられない。
焦りながら、無理やり口に押し込み咀嚼を試みる。噛むごとに、鼻から大きく溜め息が出てしまう。それでも、何とか一つを食べ切り、もうひとつは袋に残したままザックに戻してしまった。そして、いま自分が食べることができた量のあまりの少なさに、ひどく落ち込んでしまう。この先、身体がもつとは思えない。

今回もまた、ここ平舘で大きく思惑が狂ってしまった。

そばに、地面に寝転がっているランナー達がいる。オレンジ色のＴシャツのグループだ。彼らはここでしっかり体を休めて、次のレストポイントまでは一気に走りきる作戦のようだ。食欲に悩ませられる様子もなく、半袖のままで平気な姿に感心してしまう。彼らはきっと、この調子でゴールまで到達し完走してしまうのだろう。

奥のほうに綺麗なトイレがあるので、だるくて痛む両脚をひきずりながら中に入り、小用を足す。尿は正常だった。ほんの少しだけ、気持ちが落ち着いてくる。

元の場所に戻り、スタッフの方々にお礼を言い、出発する。周囲にはまだ何人かのランナーがなかなか動こうとできずに残ったままだった。
時刻は２２時近い。もう行かないと、時間的にかなり厳しい。
暗闇に覆われたこの広い道の駅の敷地の一角で、ほのかな明かりに寄り集まってじっと座り込んでいる選手たち。夜はますます深まってゆく。

今夜は幸い、気温が低くない。風もあまり強くなく、ぎりぎりのところで低体温にならずに済んだ。
松前街道に戻り、スタッフの男性に見送られながら右折する。曲がりながら、先ほど歩いてきた方向を見てみたが、ランナーとおぼしきヘッドライトの光は全く見えず、深く暗い道のままだった。

ここから先、バイパスと合流するまでのいわゆる松前街道と呼ばれる旧道は、道路の両側に民家が整然と並び建つ。昔から存在していた街道を想像させてくれる、印象に残る道だ。車がすれ違えるほどの幅の道は決して一直線ではなく、ゆるく右に左にカーブしながら、少し上ったり下ったりしていて、津軽半島の地形を忠実になぞっている。昔からきっ

と多くの旅人たちがここを通ったのであろうこの道は所々を街灯に照らされて、青白く浮かびあった街並みがずうっと続いている。

　できるかぎり走りと歩きを繰り返して、ふるさと体験館を目指す。少ないながらも、補給もした。まだいけるはずだ。必死で自分を励ます。自分を励ますことができるのは、自分しかいない。ふるさと体験館にさえ辿り着ければ、絶対に回復できるはずだ。

　走り出してすぐ、前方に先行している二人のランナーが見えていたのだが、意外に早く追い着いてしまった。彼らは、のんびり歩きながらおしゃべりに興じていて、ペースを上げようとしない。どうやらリタイヤを決めてしまったようだ。この後ふるさと体験館で夜を明かし、翌朝電車で帰還するつもりなのかもしれない。
　道の左側を悠々と歩いている二人を、反対の右側からゆっくり追い抜いてゆく。挨拶はしなかった。彼らもこちらには興味を示さず、楽しそうに話を続けている。わずか数メートルではあるが、あちらとこちらの間には明らかに流れている空気の違いがあった。
　諦めてしまった者とそうでない者。
　どんな言葉をかけるべきか、お互いに一瞬の躊躇があり、そして何もなかったかのようにゆっくり離れていく。

　平行しているバイパスができる前は、この道が唯一の国道として使われていたのだろう。地面を見てみると傷んでいるところが多くあり、車の往来がかなりあったことがわかる。でも今は車はあまり通らず、住民の人は事故の心配もなく穏やかに暮らしているようだ。この旧道がバイパスに合流するまで、７ｋｍ位だろうか。まずはその交差点だけを目指して進むことにする。

　ほんのいっとき、道がバイパスのすぐ横に接近してまた離れていき、しばらく行くと左側の住宅が途切れ海が見えてきて、ぐっと右にカーブしてバイパスと合流した。人も信号もない真っ暗な交差点を左折すると、その先の方は、ヘッドランプに照らされた灰色の道だけがぼうっと浮かび上がっているだけの黒い闇のトンネルが見えているだけだ。
　ここから蟹田の市街地で県道１２号を右折するまで、まっすぐの道だ。その交差点までの大体中間あたりに、公衆トイレをそなえた小さなパーキングエリアがあったはずなので、そこを目指す。
　道路は広く、歩道もあるのだが路面の傷みがひどく歩くのも困難なので、車に気を付けながら車道右側を進むことにする。ただ、車はまったく通らないので危険はない。

　ここまでずっと海沿いの国道を走ってきたが、やはり今回は通り過ぎる車の数が圧倒的に少ない。日曜日の夜ということもあるのだが、それでも前回までのときと比べても差は

明らかだ。皆、行動を控えているのだろう。
　新型コロナウイルス。もう、いやというほど聞かされ続けてこの言葉に、人々は知らず知らずのうちに心の中に闇を作り上げてしまい、前向きになろうという気持ちを後ろから引っ張ってしまっている。

　真っ暗な道を歩く。もう、走れなくなってしまった。
　ヘッドランプの明かりで照らされた道路は狭くなったり広くなったり、下ったり上ったりしながら続く。決して早歩きとはいえないペースだが、集中力だけは切らさないように歩き続けて行く。そして、睡魔が来ないことだけを願っている。後ろを振り返ってみたが、後続者のヘッドランプの明かりは見えなかった。

　いつの間にか、海岸線に出た。見覚えのある道だ。
　右側には平行する細い道に沿って住宅が並び、左側には低い堤防を隔てた海が黒々と広がっているのが見える。頭上には深い群青色の夜空が覆っていて、水平線で海とつながっている。
　暗闇の道路ではない。月も星もよく見えないのだが、明るい夜だ。風も強くない。
　雨と汗に濡れ、残り少なくなってしまった身体の力を、ただ前へ前へと動かすことだけを考え続けている孤独な旅人に、外ヶ浜の海と空と風は、どこまでも優しい。

　もうすぐ、目的のパーキングエリアに着くだろうと思っていたその時。
　不意に、背後から複数の足音と息遣いが聞こえてきて、三人組のランナーに抜かされた。その内の一人は、平舘で地面に横になっていたオレンジ色のＴシャツの人だ。やはり、休養を取っていたので回復したのだろう、ゆっくりながらも走れている。この区間で走れるかどうかで、その後の行程に大きく影響する。彼らは、今の自分よりもずうっと早くふるさと体験館に到着できるのだろう。そして横になって身体を休め、また走っていけるのだろう。
　走れる者と、走れなくなった者。
　ただ、彼らを見送るしかなかった。そして、すぐに見えなくなってしまった。

　一人で歩き続ける。しばらく進むと、公衆トイレとパーキングエリアに着いた。もはや休憩をとろうとするほどの心の余裕はなく、誰もいない小さな建物の明かりをじっとみつめながら通り過ぎてゆく。この駐車場の縁石に座り込んで、呆然と暗い海を見つめていたのは、たしか前回大会のときだった。
　道がそのまま橋を渡る形になり、ふと右側を見下ろしてみると、小さな漁港があった。歩いていたから気付くことができた、こんな何気ない風景に、すこし心が落ちついてくる。もう少し頑張ろう、と自分を励ます。

前方に市街地らしきものが見えてきた。あれが蟹田の街だろう。左右に建物が増えてきて、青い標識があり、右方向は県道１２号であることを示している。少し歩いて行くと小さな交差点に着き、久しぶりに見る信号を右折した。長かった海沿いの道がようやく終わった瞬間だった。

深夜の街はひっそりと静かで、誰もいない道路を歩いてゆく。やがて左右の家屋が途切れ、短い登り坂になった。

初めてこの区間を走った第三回大会のとき、この坂の手前の自販機で缶コーヒーを飲んでいると、左の方の道の反対側から声をかけられた。近所に住んでいるらしい親子三人組のなかの母親らしき女性が、いったい何の大会なのですかーと聞いてきたので、弘前をスタートして、津軽半島をまわってまた弘前に帰るんですと答えた。すると全員が納得したように、あーそうですかと声をそろえて笑って言った。他のランナーはおそらく脇目も振らずに走って行ってしまい、たまたま、のんびりと自販機で休憩していた自分を見つけて声をかけてきたらしかった。ほんの少しの会話ではあったがその一言で気分がほぐれ、その場が和やかな雰囲気になり、良い気分転換になった思い出がある。

今夜はそのような出会いもなく、ただ黙々と坂を上るだけだった。

道路右側の警察署を越えると、道は森に囲まれてくる。この森に囲まれた区間を過ぎると、田圃の中の一本道になるはずだ。ふるさと体験館まで、まだしばらく辛抱が続く。

歩きながら、なにげなく周囲を見回してみると、右手に大きな駐車場があることに気付いた。ヘッドライトを奥の方まで照らしてみると、どうやらスーパーマーケットのようだ。以前からあったのだろうか。いつもこの辺りは前しか見ないで走っていたので、まさかこんな大きなお店があるとは思わなかった。

一切の灯りが消された建物は、数時間前には買い物客で賑わっていたとは思えないくらい、暗闇に溶け込んでしまっていた。もしあの店が開いていたならおにぎりが買えたかもしれないな、と考えてしまう自分がいた。もちろん、その時間にここを通過できるほどの脚力など持っていないことも、わかっていた。

道は森で囲まれてきて、ゆるく下りながら右にカーブしていく。たしか、この先に田圃が現れてくるはずだ。ヘッドライトの光が左右の木々を照らしてトンネルのように見え、幻想的な風景を作り出す。下り勾配の道路は脚に負担がかからず、歩くのが少し楽に感じてくる。本当はかなり疲れているはずなのに。

はっと顔を上げ、道路の中央によろけてしまった自分に気付く。しまった。眠ってしまった。ついに睡魔がやってきてしまった。

道路は森を抜け、真っ暗な田圃が広がってきた。少し左にカーブしてゆく道を歩きながら、また、よろける。

そのとき、視界の左側にヘッドランプの明かりが見え、すうーっと人が現れた。宮崎さんだった。完全に遅れていて、もはや自分の後方には誰もいないと思っていたので意外だった。
彼女はきっと、いま自分が蛇行していたところを後ろから見ていたのだろう。心配そうにこちらを覗き込み、短くあいさつをして先行して行ってしまった。彼女も歩いているのだが、その速度差は圧倒的で、あっという間にヘッドランプが照らしている範囲からも遠ざかり、背後につけている赤い点滅灯も徐々に見えなくなってしまった。

道が平坦になり、しばらく進むと踏切に着いた。このＪＲ津軽線の踏切から、目指すふるさと体験館のレストポイントまでは、大体２キロ無いくらいだろうか。大した距離ではないはずなのに、果てしなく遠く感じてしまう。今年もまた、同じ感じになりそうだ。

踏切を過ぎてすぐ、左側に神社がある。第三回大会のとき、深夜ここで一人のランナーと出会ったことを思い出す。
初めて設定されたふるさと体験館のレストポイントを目指して歩いていると、左の方にヘッドライトの光が見え、見ると男性ランナーがこちらを向いて立っていた。彼は微動だにせず、煌煌とヘッドライトの光を向けているだけだった。そのただならない姿に一瞬ぎょっとなり、思わず大丈夫ですかと声をかけたのだ。
すると彼はまっすぐにこちらを見たまま、ただ一言、チェックポイントはどこですかと聞いてきた。おそらく疲労と睡魔で、進行方向すら分からなくなってしまったらしい。彼の正面に立ち、右手でふるさと体験館の方をはっきりと指さして、あっちですよと教えてあげた。彼はぼうっとしながら、ああ、とつぶやき、ようやく歩き出したので、こちらも一緒に出発する。しかし歩き出してすぐに彼は遅れ出してしまい、何度目かに後ろを振り返って見るといなくなってしまっていた。おそらくまた前後不覚に陥ってしまって、道端に立ち止まってしまったのだろう。
彼を捜しに、来た道を戻る気力も無く、置き去りにするしかなかった。もう、自分のことだけで精一杯だったのだ。

そんな出来事があった神社にも、今は真っ暗で誰もいない。片側一車線の広い道の両側には住宅が立ち並び、どの家もみな寝静まっている。ふるさと体験館の近くに目印となるものは無く、ただ歩き続けるしかないのが辛いところだ。市街地が終わるところにあったはずなので、早くこの町並みが途切れてくれることだけを願いながら、歩き続ける。
ヘッドランプに照らされ、青白く浮かび上がっている街は大きくカーブを繰り返し、道

の左側ばかり見ていているのだが、歩いても歩いても着かない。もう、疲れてしまった。

　ようやく市街地をぬけて、神社の前を通り過ぎた。見覚えはあるのだが、そこからどのくらい距離があったかは思い出せない。しかし、その先の左側に照明が点いた体育館らしき建物が見える。廃校になった学校を再利用した公共施設、ＣＰ１１ふるさと体験館だ。ようやく辿り着いた。
　敷地に入り、昇降口だった入口を入る。中は明るく、ボランティアのスタッフの人が声をかけてくれた。時刻は午前１時４１分。大きなため息が出てしまった。

　三日目の朝

　到着するとすぐに、スタッフの男性が館内を案内してくれた。建物の中は、学校そのもだ。校舎の端に食堂、そして仮眠できる場所もある。今年は体育館が仮眠場所として開放されているらしい。廊下で預けていた荷物を受け取った際、シャワー室はボイラーの故障で使えないことを教えてくれた。すこし残念だったが、実際にはそのような時間的余裕は全く無く、急いで着替えることにする。
　昇降口を入って左手の、道路からも見えた立派な体育館に入ると、広々とした床一面に一人分のマットが間隔をおいて整然と並べられ、そばには毛布も置いてある。前回までは、教室の中に敷かれた畳の上で各々が自由に横になるだけだったので、今年は大違いだ。これら全てを、スタッフの方々が一枚一枚敷いてくれたのか。本当に有り難いことだと思った。
　体育館にはまだ十数人ほどのランナーが横になったり、出発の準備をしたりしている。まだまだ完走をあきらめない、少し張りつめた空気が流れていた。
　入口を入って正面奥に、隣とも程良く間隔が取れそうな場所に決め、荷物を置いた。預けていたリュックサックを開け、着替えを取り出し、補給食として入れておいたクラッカー数袋と魚肉ソーセージを二本、走行用のザックに入れる。食べ残した菓子パンはゴール地点行きのリュックサックに戻した。
　ソックスを脱ぎ、両足に靴擦れ防止のクリームを塗り直す。幸い、肉刺はできていなかった。ただ、左の親指の爪が圧迫されて痛みがある。これは我慢するしかない。
　脱いだソックスをまた穿き直し、二枚重ね着していたＴシャツを脱ぐと、急に寒気をおぼえてきて、慌てて新しいものを着る。そしてすぐにレインジャケットを重ね着した。
　本当は下着とハーフパンツも交換したかったが、今から寒いトイレに行って着替える気力が出て来ない。震えが出てきてしまうかもしれないからだ。仕方なく、そのままで行くことにする。

寒気がしてきた。早く何か食べて体温を上げなくてはならない。
荷物をまとめ終わるとすぐに立ち上がり、食堂に向かう。がらがらと出入り口の引き戸を開けて廊下に出て、さっき入ってきた昇降口を通り過ぎて校舎側に入り、右手奥の食堂に向かう。理科室だったのかまたは家庭科室だったのか、食堂になっている広い部屋に入ると、スタッフの女性二人がにこやかに迎え入れてくれた。中にはランナーが一人、食事中だった。
毎回、ここではシチューライスを頂いている。ホワイトシチューをご飯にかけたものなのだが、これが本当に美味しい。大幅に遅れて到着したランナーには実にありがたい、温かくて力を与えてくれる食事だ。聞けばまだ残っているとのことで、迷わず注文した。
いくつも並んで置いてある、大きなテーブルのひとつに一人で座り、すぐに出してくれたシチューライスを一口食べると、ほどよいシーフードの塩味とずっと欲しかった米の甘みに、思わず目を閉じてしまう。まだ行ける。まだ十分に間に合う。回復して、ゴールを目指すのだという気持ちが湧いてくる。

食べ終わろうとしていたとき、後ろからスタッフの女性が、「げんたれ焼き」は食べますかと声をかけてきた。げんたれ焼きって何だろう？と思っていると、彼女はすぐに、焼肉のたれで味付けした野菜炒めですよと教えてくれた。
早い時間帯から長時間にわたってランナーのために食事を作り続け、こんな夜遅くまで待ち続けてくれたスタッフの方の心遣いには、できる限り応えなくてはならないと思う。
だが、疲れてしまった胃腸では、もうこれ以上は野菜などを消化できる自信がなかった。
本当に申し訳なかったが、遠慮させてもらうことにした。

一旦体育館にもどり、歯ブラシを持って廊下の洗面台まで行き、何時間ぶりかの歯磨きをする。細長い流し台に水道の蛇口がいくつも設置されている、昔なつかしい、学校の廊下の洗面所だ。レストポイントを効果的に使うためにも、歯ブラシやひげそり用の剃刀は、もはや津軽ジャーニーランには欠かせない道具になっている。

動かなくなった両足をやっとの思いで動かして戻り、自分用に確保したマットに腰をおろす。時計を見ると、２時１５分になろうとしている。とにかく３０分だけでも眠ることにした。

このふるさと体験館のレストポイントでは、どんなに急いでいても必ず寝なくてはならない。その理由は、「今日」と「明日」を切り替えるためだ。
弘前をスタートして、ずっと身体を動かし続けてきた脳に一旦区切りを入れ、再度スタートさせてもう一度やる気を引き起こす。そのために必要な時間は、３０分もあれば十分だ。目を瞑り、全身を脱力させる。眠れなくてもいい。きっと、脳は回復できるはずだ。

携帯電話のアラームを２時４６分にセットし、レインウエアを着たまま毛布をかぶり目を閉じる。少し寒いが、震えは起きない。よかった。

ほんの一瞬だった。
携帯電話の小さなアラーム音とバイブレーションで目が覚めた。あっという間に眠ってしまったらしい。周囲の物音がはっきり耳に入ってくる。
身体を起こす。目覚めは悪くない。これで、ここにたどり着くまでの苦しかった道程はすべて「昨日」のことになり、新たに「今日」弘前に還るための一日が始まるのだ。全身の疲労は相変わらずだが、それでもいくらかは回復していると思い込むことにする。

毛布をたたみながら、広い体育館を見渡してみる。がらんとしたフロアの所々に、まだ眠りに落ちている者が数人見える。その誰もが頭まですっぽりと毛布をかぶり、これからまた走り出そうとしているとは思えないくらい、深い眠りに落ちている。
完走を目指すのなら、もうこの時間が限界だ。もう出発しなくてはならない。彼らはきっとリタイヤを決めてしまったのかもしれない。このまま朝まで眠り、最寄りの駅から電車で弘前に向かうのだろう。

座ったままザックを背負い、ストラップを締めてふと出入り口の方をみると、引き戸のすぐ近くのマットの上で、見覚えのあるランナーが背中をこちらにむけて座っているのが見えた。ミニーマウスの服装で必ずこの大会に参加している、鏡畑さんだ。

後方を走っていると、彼の姿は所々で見かけることができるのだが、今回はほとんど見ることがなかった。日焼けした柔和な笑顔と、引き締まり鍛えぬかれた脚で淡々とマイペースで走り続ける彼は、その赤い水玉模様の可愛らしい装いとは裏腹な、真の長距離アスリートだ。そして、決して完走をあきらめない男でもある。
そんな彼が、こんな時間になっても追い着いてきた。さすがだなと思った。

準備が整い、立ち上がろうとしたとき、もう一度彼を見た。なんとなく、様子が変だ。
彼は両手を後ろにつき、足を前に投げ出して座ったままじっと前を見ていて、動かない。時刻はもうすぐ午前３時になろうとしている。次のチェックポイントである津軽中里駅の関門は午前８時２０分だ。すべてを歩きで通すならば、もうそろそろここを出なければ後の行程が厳しくなってくる。しかも、津軽中里駅は今回初めて設定されたチェックポイントなので、道を間違えてしまう可能性もある。
少し睡眠を摂って、走っていくつもりだろうか。でも、横になろうともしない。
我々のような最後方のランナー達では、このふるさと体験館のレストポイントで劇的に回復して元気良く走り出してゆく者など、ほぼいない。したがってこの時間が、完走を目

指すためのタイムリミットだ。

　立ち上がり、荷物を持って出口へ歩き出す。もはや、今から出発しようとするランナーなどは誰もおらず、体育館は静まり返っていた。
　彼のすぐ近くを通りがかったとき、声をかけようかどうか迷ったが、前を見つめたままでこちらに顔を向ける気力すら失くしているようで、できなかった。
　もし、彼が自分を見て、あ、あいつまだ頑張ってるんだ。俺も頑張ろう、と思ってくれたなら、きっと自分もこう言ってたに違いない。
　行きましょう。まだ、間に合いますよ、と。

　がたがたと扉を閉めて、廊下に出た。建物内はしいんとしている。すぐ近くの昇降口にいたスタッフの男性に荷物を預け、下駄箱になっている棚からシューズを取り、床に座った。脚の筋肉はとうに限界を越えてしまって硬く、思うように動かせない。靴ひもを締め、ゆっくり立ち上がり出口へ向かう。身体がだるい。でも、行くしかない。

　外に出て一瞬身構えたが、思っていたほど寒くはなかった。よかった、今夜は運がいい。ただ漠然と、なんだかこの先もうまくいくような気がしてきた。時刻は午前３時０１分だった。

　真っ暗な敷地を校門の方へ歩きだすと、前方にもう一人、外に出たばかりのランナーがいる。横に並んでお互いにヘッドランプで顔を確かめ合うと、宮崎さんだった。意外にも、彼女はまだ出発していなかったようだ。
　道路に出て歩きながら彼女が、寝れました？と聞いてきたので、ええ、３０分でしたけどぐっすりと答えると、いいなあ、あたし全然寝れなかった、と彼女は寂しそうな顔で言った。

　この先のやまなみトンネル越えは、完走できるか否かを決定する最大の山場だ。睡眠を摂らずに行くのか。可哀想に、それはきついな。
　励ます言葉が見つからず、ゆっくり前方にヘッドライトを向けながら、黙ってしまった。しかし彼女はすぐに気を取り戻し、さーっとペースを上げ、街灯にぼんやり照らされた夜道の向こうに歩き去って行ってしまった。その力強い足取りに、少し安心する。よかった。さすがだな。

　彼女と自分が、おそらく最後尾だろう。もう、後ろには誰もいない。本当に、最後の一人になってしまった。
　歩きながら、一瞬両手の拳をぎゅっと握り、上体をぐっとかがめて足を前に出して走っ

てみた。硬直した両脚の筋肉はすぐに反応できなかったが、なんとか、走れた。ただし、かなり遅い。でも、走れたことが嬉しかった。また走りと歩きを繰り返して、前へ進もう。まだ、諦めてはいけない。

道はいくつか集落を越え、新幹線の高架橋をくぐると、大平の市街地に入って行く。今別、小国峠から来る県道１４号との交差点に着いたころ、夜が明けてきた。
交差点を越えると道路は徐々に上り坂となり、走ることはできずにひたすら歩いて行くしかなくなる。
片側一車線のきれいに整備されたこの道路は路肩も広く、安全に歩くことができる。すぐに歩道は終わり、道の右側をてくてくと歩いていく。空が明るくなってきた。

上り始めてしばらくすると、トンネルが現れた。その手前右側に、ポケットパークという名前のパーキングエリアがある。周囲を森林で囲まれていて、静かな環境でゆったり休憩できる。
ここは第二回大会のときにチェックポイントが置かれた場所だ。真夜中に小国峠を越え、この駐車場に辿り着いたのは午前２時半頃だっただろうか。入って左奥の東屋に、ヘッドランプを寄せ合って何人ものランナー達が言葉少なに座り込んでいたのを思い出す。

短いトンネルを通り抜けると、道は山の中をさらに上ってゆく。勾配は決して急ではないのだが、長時間歩き続けてきた者にとっては、やはりきつく感じてしまう。前の方を見ると、ずっと向こうでカーブしていてその先は見えない。

この道は生活道路としての役割を果しているらしく、わりと車の往来が多い。しかし今朝は全く通らない。
道の両側は深い深い森だ。木々が多く、奥の方がどうなっているのか見ることができない。前回ここを通ったときは、夜明け直前で小雨混じりの強風が吹いていて、周囲の木がざざあ、ざざあと揺さぶられていたが、今年は風もなく、森は静まり返っている。まるでひとりぼっちの旅人を黙って見守ってくれているようだ。空を見ると、雲は多いが晴れている。

ゆるい坂道を歩き続ける。道路の先のほうを見てやまなみトンネルの入り口を探し、右側の茂みを見て動物などはいないだろうかと考え、道路左側の森をながめて風が吹いてくる方角を確認してみる。一歩一歩確実に踏み出し、失速しないように力を入れ続けてゆく。
後ろを振り返ってみるが、見える範囲では誰もいなかった。
夜明け直後の深い森は、鳥のさえずりも聞こえず、ただ風がさーっと木々を揺らしてい

るだけで静寂そのものだ。

　いくつかのカーブを越え、まっすぐに伸びて行く道路を上がりきった先のほうに、トンネルが小さく黒い口を開けているのが見えた。やまなみトンネルだ。やっと着いた嬉しさで目が覚めてきた。

　地獄のやまなみトンネル越え。
　過去三度、このトンネルを越えてきたが、そのたびにこう思うようになってしまった。
　ここまでの登り坂でも苦しい思いをするのだが、本当の地獄はトンネルを抜けた後にやってくる。下り坂でほっとして力を抜いてしまうと、とたんに睡魔に襲われ、歩きながら夢を見てしまって何度も足を止めてしまったり、空腹すら感じられずにそのまま走り続け、突然道端の縁石に座り込んでしまったりと、必ず何らかの非常に苦しい思いをしてしまうのがこの区間なのだ。

　トンネルの入り口が近付いてきた。昨日の海岸線の道を思い返してみる。小泊、龍飛崎、外ヶ浜、今別、そしてまた外ヶ浜。たしか、ふるさと体験館は外ヶ浜町の施設だったはず。ということは、このトンネルまでが町内なのだろうか。あの穏やかで丸く広がる海から吹く風が、ずっと背中を押してくれていた。やはり外ヶ浜町は、いつも海を感じることができる町だった。

　トンネルに入ったとき、かすかに人の声のようなものが響いてきた気がした。空耳だろうか。いや、そんなことはない。確かに、ありがとうございましたーという女性の声だった。宮崎さんの声のようだったが、何かおかしい。彼女は随分前に先行していて、上り坂でも姿は全く見えなかったので、追い着いたとは思えない。他のランナーと合流して、トンネル先のパーキングエリアでおしゃべりしていたのだろうか。でも、ありがとうございました、という言葉はやっぱり変だ。
　色々なことを考えながらトンネルの中を歩いてゆく。内部は大きくカーブしていて、出口がなかなか見えて来ない。一生懸命歩くのだが、速度が出せない。中間を過ぎてようやく下り坂になり向こう側が見えてきた。少し走りながら目を凝らしてみたが、やはり人の姿はなかった。

　やまなみトンネルを抜けた。出口のすぐ右手に駐車場と公衆トイレがあり、そして道路に近い場所になぜかベンチとテーブルが一組だけぽつんと設置されている。このベンチはまるでランナーのためにあるかのようだ。いつもここを通ると、必ず誰かが横になっている。でも、あたりまえだが、今朝は無人だ。
　ほんの少し、ランナーと会えるかと期待していたのだが、やはりそのようなことはなか

った。急に疲労感が出て来てしまったので、ここで休もうと思った。

駐車場入り口の路肩に、黒の SUV が一台こちらを向いて停車している。おそらく地元の人が出勤途中にトイレにでも寄ったのだろう。県外から、それも東京から来た者とは接触したくはないのかもしれないので、そっと公衆トイレに入って用を足し、またベンチに戻った。

空はうす曇りだが明るく、森に囲まれたこのパーキングエリアは空気が瑞々しい。あまり時間は無いのだが、ここで何か食べておかないとこの先が辛くなってしまうので、少し休むことにした。

ザックの中からクラッカーを一包みと、魚肉ソーセージを取り出し、交互に口に入れ、ゆっくり噛みしめる。スタート前日に、弘前駅近くの大型商業施設の地下食品売り場で買ったものだ。地元のメーカーのものらしく、美味しかった。食欲はあまり無いが、それでも食べることができて良かった。

もうすぐ食べ終わろうとしていたとき、先ほどから少し離れた場所に停まっていた黒色の SUV から男性が降りてきて、ポカリスエットがありますけど飲みますか、と声をかけてきた。

一般の人なのにスポーツドリンクを持っているなんて珍しいな、しかもポカリスエットなんて。何か趣味でスポーツをやっている人なのだろうか。そしてたまたま出勤途中にボロボロに疲れ果てたランナーを見つけて、つい声をかけてくれたのだろうか。なんて親切な人だろう。

気持ちは本当に有り難かったが、あまり汗もかいておらずのども渇いていなかったので、大丈夫です、ありがとうございますと、できる限り丁重におことわりした。

すると彼はその穏やかな物腰のままで、納得したようにまた車に戻っていった。そして意外なことに、その車はその場所から大きくUターンして、中泊の街へ向って走り去って行ってしまった。

通勤途中なのに引き返して行くなんて変だな、と思ったが、もしかしたら私設エイドをしてくれていたのだろうか。ここに来るまで、自家用車でコースを先回りしてランナー達に飲食物を提供してくれる、いわゆる個人エイドステーションには一度も出会わなかった。コロナ禍で他人との接触を避けがちな現在、県外しかも東京から来た者にエイドを出すことには、きっとかなり抵抗があるだろう。その気持ちは十分すぎるほど理解できていたので、今回のジャーニーランでは期待していなかった。そして実際にも、ここまで私設エイドのない静かな旅を続けている。

少し休んだので元気が出てきた。ザックを背負い、立ち上がって道路へ歩き出た。トン

ネルのそばで立ち止まり、暗い内部を見てみる。まだ誰か来るだろうかと思ったが、ヘッドランプの明かりも見えず、足音も聞こえなかった。本当に最後尾になったしまったようだ。
　トンネル入り口で聞こえた声の主が宮崎さんだったとしても、もうかなり先行しているに違いない。もしかしたら、次の津軽中里駅ＣＰでも追いつかないかもしれないな。しばらくはまた孤独な旅が続きそうだ。

　やまなみトンネルから先はゆるい下り道が伸びている。片側一車線の広い道路は相変わらず車は全く通らず、貸切状態だ。
　歩き出し、そして少し走る。また歩き、ちょっと走る。速度は遅いが、確実に距離は稼げているようだ。空には青い部分が大きくなってきて、晴れてきている。両側の森の木々は深く生い茂り、広大な平野を渡ってきた強い風を吸い込み、このちっぽけな一人の人間にやさしい風を吹いてくれている。なんて清々しいんだ。もう、制限時間のことなど忘れてしまいそうだ。

　道路左手に川が流れている。第三回大会のときだっただろうか、ここで歩きながら眠ってしまって夢をみたのは。
　ようやく夜が明けて薄明るくなっていたとき、まばたきする目を開けることができなくなってきて、いつの間にか眠っていたのだ。夢の中でなぜか川で泳ぐ自分がいて、いつの間にか道路を横切り、ガードレールを乗り越えようとして我に返った。もしそのとき目が覚めなかったら、きっと本当に川に落ちていたかもしれない。
　その川も、今は明るい山の景色の中で爽やかに流れている。幸い、いまのところはまだ眠気も起きていない。

　下り勾配がゆるんできて、辺りの風景が森林から野原へ変わってきた。そろそろ峠道が終わることを意味している。気温も上がってきて、少し暑さを感じるようになってきた。道路脇の畑から、農作業をしている人がつけたラジオの音が聞こえてくる。どうやら山は越えたようだった。

　この先、くの字に曲がる左カーブがある。この道路は、ゆるいカーブが続いているだけだったのだが、そこだけは特徴的な場所でもある。しかしそれは、そこから延々とつづく平坦な道程の始まりをあらわしてもいる。
　下り坂に助けてもらうこともできず、さらに速度が落ちてしまった。脚はより一層重く感じてしまい、歩くのも辛くなってくる。

　ココカカクコ、ココカカクコ。

どこからか、鳥の鳴き声がきこえた。以前、福島県の山で聞いたことがある声と同じだ。やはり今回も、早朝の静かな山間で大きく高らかに響いている。なんてきれいな声なんだろう。思わず歩くのをやめて、聴き入ってしまった。
やまなみトンネルを越える前に夜は明けていたのに、鳥のさえずりは一度も聞くことがなくここまでやってきた。鳥たちは旅人のことなど関係なく、いつもの朝を迎えているだけなのだろうが、その偶然の出会いに感動してしまう。
彼らは３,４回大きく鳴くと、満足したように黙ってしまった。

右手に建設中の倉庫の工事現場があり、そこには久しぶりに見たと感じてしまう自販機があった。これを見ると、何だか人里に下りてきたことを妙に実感してしまう。そしてそのすぐ先のくの字カーブを曲がると、一直線に伸びた道路の先が右に曲がっているのが見える。地図では、国道に合流する手前に右カーブがあるので、あの先にはもう交差点があるのだと勘違してしまったことがある。実際には、あのカーブの先には小さな橋があって、本当の右カーブはそのずっと先にあるのだ。ただ、距離はそう長いわけではないので、じっと我慢して歩き、そして少し走る。道の両側には畑や田圃が広がっている。空は晴れていて、気温も上がってきた。

両側を森で囲まれた小さな橋を歩いて越え、再び道路の先の方を見ると、思った通り右カーブがあった。この辺りに来ると周囲に建物が現れはじめ、市街地の風景になってくる。
ようやく右カーブを曲がると、細くなった道路の向こうに国道を表示する標識が見え、すぐに交差点に着くことができた。国道３３９号だ。一旦立ち止まり、龍飛崎の方を見てみるが人影はない。
ここは、以前ならば２６３ｋの部から半日ほど遅れてスタートした距離の短い部のランナー達と合流する場所だった。久しぶりに来たので、どこか懐かしくなってくる。

交差点を渡って左折し、道路の右側を進む。この道は左右に歩道が現れては無くなったりするので、いつも右側を通ることにしている。交通量は少なく、たまに車が通り過ぎるだけなので安全だ。たしか、しばらく行くと赤い自販機があったはずなので、それを目標にすることにした。

右手に広大な田圃が見えてきた。前日の夜明け頃、反対側で見たあの広々とした田園風景を想う。この田んぼはすべて、人間が作り上げたものだ。人間ってほんとうにすごいものだと思う。
道路ぞいには民家や倉庫などが点在し、左右にカーブを繰り返している。見通しが悪いために、ＣＰまでの距離がとても長く感じてしまう。当然なのだが、見える範囲にランナーの姿は無い。それどころか、車も通行人もまったくおらず、まるで時が止まったような

気さえしてくる。でもそれは決して絶望的なものではなく、むしろプレッシャーから解放されて肩の荷が下りたような気分なのだ。
　路肩は広くなったり狭くなったり、平坦だったりデコボコしていたりと変化しており、ただただ足元を見ながら歩きそして時折走っている。自分の吐く息と、ざっざっという足音だけを聞き、広い田圃の向こうに漂う朝靄を眺めている。身体はもう疲れ切っていて、残り少ない力を使い果たさぬよう脚を動かすことだけを考えている。

　道路は途中で左方向へ旧道と分岐し、その先に信号のある交差点を越えるとぐっと左へカーブしてまた合流する。その先は人家が切れて田圃を見ながらののどかな田舎道になる。いつのまにか、赤い自販機は通り過ぎてしまっていたようだ。

　朝を迎えて大分時間が経ったようで、時々車も通るようになった。ただ、どの車もかなり手前からたった一人のランナーのために、センターラインを大きく割り十分すぎるほどの間隔を取って避けてくれる。その心遣いがとても嬉しく、すれ違うたびに左手をあげ軽く頭を下げる。それが今、自分ができる精一杯の感謝の表現だ。彼らの一瞬の無言の励ましが胸に響き、止まりかけようとしている脚にじわりと力を与え、また前へと動かしてくれている。

　今回新たにチェックポイントに設定された津軽中里駅へと左折する場所は、二つ目の橋を渡った所だ。左側に見覚えのあるため池の標識が現れた。実際には高い位置にあるので水面は見えない。これは、右手に広がる広大な水田に水を流すために高低差を利用するからなのだろう。地元の人にとっては当たり前のことなのだろうが、自分にとっては津軽を走って初めて気付いたことだ。そして、目線と同じ高さから見る湖面の風景の美しさにも。

　一つ目の橋を越えた。二つ目まではさほど離れていないはずなので、少し元気が出てくる。ここまできて、歩く時間と走る時間がどんどん短くなってきていて、速度は早歩きと変わらなくなってきている。それでも、のろのろと歩き通しになるよりはちょっとでも走ったほうがいい。天気は良く、暑くなってきた。昨日までの涼しさが嘘みたいだ。左足の筋肉痛は相変わらずで、さらに同じ左足親指の爪の圧迫通も大きくなっている。

　左右に細かくカーブを抜けると二つ目の橋が見えてきた。道路左側へ移動し、小さな川を見ながら橋をゆっくり歩いて渡った。渡り終えたところにある川沿いの道を左折する際、まっすぐに伸びて行く道路の先の方を見る。
　直線の道の終わるところに陸橋があり、その手前に信号が小さく見えている。あの信号のそばにあったのが、前回までのチェックポイントだったパルナスという施設だ。近代的な建物の広い入口ホールに設置されたエイドステーションで、温かいコーヒーと紙コップ

に入れてくれたチキンラーメンがとても美味しかったことを思い出す。

　左に曲がると、道はすぐに川から離れて野原の中をおおきく右へ回り込んで行く。すると左右に民家が現れ始め、急に町中へと入っていった。道はやや狭く、車がすれ違える程度の幅なのだが、先ほどまで歩いていたバイパスと比べると交通量は多い。商店なども見かけるようになり、準備のために出入りしている人の姿も確認できた。おそらくもう８時近いのだろう。町はいつもの一日を始めようとしていた。
　パルナスへ向って歩いていたときには、一本入った道でこんなにも沢山の人々が暮らしていたとは思いもしなかった。ここにいる人達は広大な津軽平野を吹き付ける風から逃れて、里山に近いこの自然豊かな場所にある津軽中里駅を中心に集まり身を寄せ合い、仲良く助け合いながら暮らしているのだろう。厳しい気象条件を乗り越え、かつ旅人を事故から守ろうとしてくれる心優しくも力強い人々が暮らすこの街こそ、辛く長い夜を乗り越えたランナーの辿り着くチェックポイントにふさわしいと思った。

　建物の軒先を歩きながら、駅への入り口となる交差点を探す。路地を通るたびに左方向を見るのだが、なかなか駅らしい建物が発見できない。道路両側は商店や民家が立ち並んでいて、どこが街の中心地なのかはっきりとしない。道は右に左に細かくカーブを繰り返していて、見通しも悪く距離感がつかめなくなってしまった。コースロストが心配であまり走れず、歩きが多くなってしまう。
　ようやく案内標識のある交差点に着き、左折するとその先の突き当りに、津軽中里と書かれた店舗のような四角い建物を見つけた。やっと着いた。ＣＰ１２津軽中里駅だ。時刻は７時５５分だった。

　入口を入ると小さな待合室になっている。右側の壁には券売機があり、正面奥には改札用の柵越しに外のプラットホームとつながっていて、津軽鉄道の山吹色の車体が見えている。何分後かには出発するのだろう。
　入口のすぐ右手にもう一つ多目的に使われているらしい部屋があり、そこにエイドステーションがあった。中に入ると、その部屋は学校の教室ほどの広さのホールになっている。男性スタッフが二人、後片付けをしている最中だった。
　一人はそのまま部屋の片づけをしていて、もう一人の男性が対応してくれた。バナナを手渡してもらいながら、少し話をする。彼らは昨夜からずっとここにいたのだろう、もうすぐ仕事が終わる安堵感でほっとした表情をしている。こちらも最大の山場であるやまなみトンネル越えを終えた。どちらも静かに満足感をかみしめながら会話している。
　ふと部屋を見回すと、薄暗い室内には奥の方にテーブルとイスが重ねて置いてあり、ゆっくり腰掛けて休めるような状態ではなかった。もしかしたら少し横になれるかもしれないと期待してもいたのだが、もはやゆっくりできる時間は無い。もうそろそろ出発しなく

てはならなかった。

　もう一人の片づけをしていた男性が、このエイドは３０分閉鎖を延長すると話してくれた。どうやら、まだここを目指しているランナーの到着を待ってくれるものらしい。確かに、ここからならばあの山吹色の電車に乗って帰ることができる。もし、そのようなランナーがいたとしたら、たとえリタイヤを決めていたとしてもここにエイドがあったらどんなに嬉しいことだろう。スタッフの気遣いに感動してしまう。

　時計を見ると、８時１０分になろうとしていた。スタッフの男性達にお礼を言い、部屋を出ようとしたとき、ランナーが一人入ってきた。自分が最後尾だと思っていたので、まさか後ろにまだいたとは思わず、びっくりして見てみると、なんと宮崎さんだった。
　ずっと先行していたはずの彼女。どうしたんですか、と聞くと、憮然とした表情でただ一言、バス停で寝てたと答えてくれた。そうか、おそらく旧道には昔ながらの屋根の付いた小さな待合室のようなバス停があったのだろうか。しかしそこで寝てしまうなんて、すごい女性だなと思ってしまった。

　駅を出て、もと来た道を戻り市街地を通る県道を左に曲がる。なんとか走りを交えながら歩き続け、街中を抜けた。晴れて気温も上がってきて、真夏のような暑さになりそうだった。
　道はゆるく下ってゆき、その先の小さな踏切を渡った。津軽鉄道の線路だ。レールをまたぎながら右方向を見てみると、前回大会までコースになっていた国道の陸橋が見える。そして左を見ると、線路手前側すぐの場所に駅があった。地面から一段高い位置にプラットホームだけを設置した簡素なつくりの無人駅だ。ちょうど若い男性がひとり、電車待ちをしている。ということは、もうすぐ電車が来るのだろう。さきほど津軽中里駅で見た、あの山吹色の電車かもしれない。

　踏切を越えて道はゆるい上り坂になった。走ることができず、ゆっくり歩いて行く。
　あたりは野原や畑が広がり、遠くに森や里山が見える。頭上からは、晴れた空にチチチ、チチチッと小鳥のさえずりが聞こえている。ああ、なんてのどかなんだろう。何気ない当たり前のこんな景色が、今はとても印象に残ってしまう。舘山さん、あなたにもこの景色を見せたい。ふと、そう思ってしまった。
　不意に、後方で踏切の警報器がカンカンと鳴りだした。

　坂を上りきると道はやがて従来のコースである国道に合流した。ちょうど左手にため池がある交差点で道路の左側へ移った。いつもこのあたりを通るときは右側を通っていたのだが、今日は車も少ないので気分を変えてみたくなった。

畑や田圃を見ながら、走ったり歩いたりして進む。ペースはかなり遅いが、脚をいたわりながらなので仕方がない。ときおり吹く風がほんの少し身体を押してくれている。

そのとき、がんばれー、という声が聞こえて右側見てみると、何人もスタッフを乗せたミニバンが追い越してゆくところだった。下まで開けた窓からはいくつもの笑顔が見える。急いで右手を上げて、ありがとうと返事をする。声援を受けるなんて、何だかすごく久しぶりのことのような気がしてしまう。素直に嬉しかった。
少し間をおいて、今度は声がけではなく、一台の黒いＳＵＶが助手席からガラガラと賑やかに鈴を鳴らしながら追い越して行った。おそらく応援してくれていたのだろうが、めずらしいやり方だなと思った。でもおかげで気分がほぐれて、楽になれた。
次のチェックポイントである太宰治記念館前までは距離は短い。集中力を切らさないよう気を付けていく。目標地点は津軽鉄道の踏切だ。

程なく、また左手にため池が現れた。今度は先ほどのものよりも大きく、広い。芦野公園というのだろうか。その先にある津軽鉄道の踏切そばにある駅がそのような名前なので、きっとそうなのだろう。自然のままの地形にそのまま水を流し込んだような湖面は奥行きがあり、形も入り組んでいて美しく見応えがある。小説津軽で、太宰治が家族とともにピクニックに行ったのもここだったのだろうか。何気なくふと、そんな光景を想像したりするのも津軽ジャーニーランの楽しさのひとつだ。

見覚えのある左カーブを曲がると、踏切が見えてきた。この場所は何度も通ってきたのでよく覚えている。
初めて津軽を訪れた第一回大会のとき、雨の降る真夜中に鰊御殿を出発し、十三湖で夜が明けてからは雨上がりの国道３３９号を延々と走り続けてこの踏切まで辿り着いた。そして踏切手前にあった自販機で休憩したことを思い出す。そう、あのときは鰊御殿の次のチェックポイントは太宰治記念館前だった。とてもとても遠かったと記憶している。

踏切をまたぎながら線路を見てみると、両側を緑で囲まれた軌道の周辺にも草が生えていたりして、地方のローカル線らしい雰囲気が満載だ。左手にある無人駅と国道をはさんで右側は木々が多く立ち並ぶ広い森林の公園になっている。踏切を越えて公園沿いに歩きながら、振り返り気味に左後方の駅を見てみると、森のなかに旧駅舎を利用したカフェなどが見える。旅番組などでも見たことがある場所だ。ただ、時刻も早いせいもあって人の気配はなかった。でもそれがまたこの駅本来の、静かな森の中の小さな無人駅らしい趣きも感じられる。

夏の陽に照らされて明るい公園に沿って右カーブを抜け、案内標識にしたがって交差点

を左折すると、道は一旦下りながら金木の町中へ入ってゆく。ここまでくると道の狭さとチェックポイントに近付いた安心感から、ほぼ歩きになってしまう。道路の両側には商店が立ち並び、通る車も増えてきて、街はもう完全にいつもの一日が始まっていた。
　右手の建物の隙間から物産館が見え、やがて道は突き当り、右に曲がれば到着だと思っていたら、交差点の角に真新しいローソンがあった。古びた街並みのなかでそのきれいな店の青い看板を見て、大きな変化を感じてしまう。
　補給はこの先にあるファミリーマートでする予定だったので、ここには寄らずに通り過ぎたが、今後はランナー達の力強い存在になることだろう。

　丁字路を右に曲がると、先の方の右手にエイドステーションが見え、スタッフの人達が見えた。道路をはさんで左側には、太宰治の生家を使用している記念館の煉瓦塀があった。すぐにスタッフの人が気付いてくれ手をあげてくれた。ちょうどランナーが出ていくところだ。久しぶりに他の参加者を見た気がする。ほっとしながらＣＰ１３金木町観光物産館に到着した。時刻は９時３３分だった。

　ここ金木町観光物産館でのチェックポイントは、お土産などを扱うきれいな建物の軒先のエイドステーションだ。第一回大会からずっと同じ場所なのだが、その時から比べると街並みも少しづつ変化していて、なんだか時の流れを感じてしまって感慨深い。正面に建つ太宰治の大きな館も、より一層年季が入っているようにも見える。その建物の大きさと珍しい煉瓦の塀も、なぜか周囲の少し色あせた町に違和感なく溶け込んでいるように見えてしまうのは自分だけだろうか。ここに来ていつも思うのは、このいまにも崩れてしまいそうな煉瓦塀が、いったいいつまで持ちこたえられるのだろうかということだ。小泊で会ったあの太宰治像の顔が、少し淋しげにも見えてくる。

　スタッフの方々はこの時間になっていても、まだ多くの食べ物を用意して待ってくれていた。やはりここでもバナナなどを食べながら、しばし休憩する。皆、長時間に渡るエイドステーションの仕事にもようやく終わりが見えてきて、ゆったりとおしゃべりをしている。そして、かなり遅れてここまで辿り着いて口数の減ってしまったランナーにも、彼らはむやみに話しかけたりはせず、ゆっくりさせてくれる。ありがたかった。
　脚はかなり疲れてしまっている。でももう少し頑張って走れば、五所川原の市街地で何か食事が摂れる。そうすればまた元気になれるはずだ。そんなことを考えながら、前向きになれるよう自分を励ます。時間は気にするな。前に進むことだけを考えるんだ。そう自分に言い聞かす。

　立ち上がってスタッフの男性にあいさつしたとき、後方にまだ誰かいるかと聞かれ、はたと思い出した。そうだ、宮崎さんが来ない。いつも後ろから追い抜いてゆく快速列車が、

この区間では姿を現さなかった。どうしたんだろう、と思いつつ、先ほど曲がってきたローソンの方を見てみると、となりの駐車場の奥の方からちょうどコースをショートカットするように、彼女が歩いてくるのが見えた。少し怒ったような表情をしている。疲れているのだろう。でも、無事着いてよかった。

入れ替わりに出発する。記念館のあるこの道は地元の人々の生活道路そのもので、商店や住宅が立ち並ぶ。路面の舗装は傷んでいるところが多く、足元と車の往来に気を付けながらゆるく下っていく。程なく橋が現れ、それを渡るとすぐの国道３３９号に合流するところにある、ファミリーマート五所川原金木店に立ち寄った。

店内に入りトイレで用を足し、念願だったおにぎりを買った。店を出て目の前の、国道３３９号の信号で立ち止まったときに、それを食べる。チャーハン味のそのおにぎりは、とても美味しかった。

青になって道路右側に渡り、歩道を歩き出す。前方の見える範囲にはやはり誰もおらず、相変わらずの一人旅がまた始まった。

ここからの道は歩道が途切れがちで、その都度右側へ渡ったり、また左側へ戻ったりと気を使う。初めは右側をゆくが、その歩道も無くなったりまた現れたりしていて、すぐに終わってしまった。左方向へ分岐する交差点の信号で道路左側へ渡り、また走り出す。天気は良く暑くなってきたが、風が吹いているので苦ではない。補給できたおかげでなんとかペースを維持できている。例年と違って、車の通りは極端に少なく静かだ。

左右には田んぼが多く見られるようになってきて、市街地を抜けたようだ。狭い歩道のアスファルトは損傷がひどく、でこぼこしていてまともに歩くこともできない。足場を探しながら右に左によけながらゆっくり走っていると、まるで未舗装の山道を行くトレイルランニングをしているみたいな気分になってきて、可笑しくなる。

まるで子供のようにジグザグしながら走ったり歩いたりして、歩道にはみだして植えてある大きな木をよけて一息いれながら顔をあげて何気なく田んぼを見ていたとき、すぐ右側の車道をロードレーサーに乗ったサイクリストが二人、さーっと追い越して行った。見ると、後ろの彼が左腕をこちらの方へまっすぐあげ、にぎり拳に親指を立てている。そう、「good luck!」のハンドサインだ。

自転車のロードレースは、風との戦いだ。集団で先頭を走る者の真後ろに着くと、ほとんど風を受けず驚くほど楽にペダルを踏むことができる。そして数秒から数十秒ごとに先頭の人間は後ろに下がり、先頭を交代してゆく。そうすることによって高い速度を維持し、力の劣る選手を集団からふるいおとしてゆく。速く走ることができない者は先頭に出ることが出来ず、集団の最後部に着きっきりになり、やがて前車との間にできたわずかな隙間

に発生する空気の抵抗に負け、離れていってしまうのだ。
　今駆け抜けていった二人も、きっと休日を利用してトレーニングに向かう途中なのだろう。二人で先頭交代しながらであれば、１００ｋｍ位の距離でも午前中で走りきってしまう。彼らはあっという間に小さくなって、カーブの向こうへ吸い込まれていった。
　親指を立てるポーズは、「ＯＫ」のサインでもある。同じアスリートとして、この走り方でいいのだ、このままでいいのだという無言の励ましをもらった気がした。良い気分だ。

　そのとき、左のほうの田んぼの向こうの高台に、津軽鉄道の山吹色の電車がゆっくり追い抜いてゆくのが見えた。何年もの間、この津軽の厳しい自然のなかを走り抜けてきたその車体はうす汚れていて色あせているのだが、それがかえって逞しさを強調している。
　電車は通常、動力をかけている状態のことを力行(りっこう)といい、動力の無い状態で走っていることを惰行という。今見えているこのたった一両の気動車は、津軽の青い空を背景にのんびりと惰行運転しているのではなく、がーっとエンジンをうならせて、愛らしい目でまっすぐ前をみつめながらレールをつかんでひたむきに前へ前へと進んでいる。
　しばらく行くと、左側から県道が合流してくる交差点があり、今度は右側に渡らなくてはならない。この信号では必ず赤信号で引っかかるのだが、今年も同じだった。そこからは歩道が無くなり、慎重に進む。そして先の方に橋が見えてきた。青い空に向かってまっすぐに上ってゆく坂道が印象的だ。そしてその向こうに旧道とバイパスの分岐点があるはずだ。

　橋に向かって坂を上りながら、また左側へ渡る。その先の分岐で旧道に入るためだ。のぼりきると、広々した津軽平野の田んぼやそのまま続くバイパスが見えた。
　このバイパスは、前回の大会のとき初めて通ったのだが、コンビニエンスストアもあって便利な反面、路肩はあまり広くなく交通量も多くて気疲れしてしまった。今年は従来どおり旧道がコースとして指定されていたので、その通りに行くことにする。そのほうが旅らしい気もするからだ。

　橋を渡って坂道を下り、左方向へ分岐して旧道に入った。バイパスも車は少なめであったが、こちらのほうはさらに少なく、ほとんど車は走っていなかった。雑木林の中をやはり走ったり歩いたりを繰り返しながら進む。暑くなってきた。
　道路の左側に、きれいに整備された歩道が始まったところで縁石に座り、ザックをおろした。Ｔシャツを一旦脱ぎ、スタートして以来ずっと身に着けていたアンダーシャツを脱ぐ。この先はもっと暑くなるので、もう必要ないと判断したのだ。そういえば、チェックポイント以外の場所で道端に座り込むのは初めてだ。疲れてはいるが、体力の限界を超えない範囲にとどまっている。とにかく無理をしないで走ったり歩いたりしてきたのがよかったのかもしれない。

アンダーシャツをザックにしまい、半袖Ｔシャツ一枚になり動きやすくなった。すぐに立ち上がり、きれいに舗装された歩道を進んで行く。この旧道は、第一回大会のときから比べると歩道の整備がすすんで大分歩きやすくなった。住宅や倉庫、運送会社や事務所などが両側に建ち並ぶ、典型的な郊外の幹線道路となっていて、ここで暮らす人達の日常を見て生活感を直に感じることができる。ジャーニーランならではの体験だ。

ガソリンスタンドのある交差点で道路右側に渡り、今度は右側のみにつくられている歩道を進む。天気は良く、通る車も少なめで住宅が点在するのどかな風景のなかをゆっくり走り、しんどくなったらためらわずにすぐ歩く。そして息がととのったらまたゆっくり走り出す。腕を振って下半身を動かして右足を出し、左足を出す。ただ走ることだけを考え、歩くことだけを考えている。時々、背中のザックに手をまわし、サイドポケットからペットボトルを引き抜いて水を飲み、またそれをポケットに戻す。そして、また少し走る。

やがて歩道が途切れ、再び左側へ渡る。この先、高架橋下の交差点では左側から渡ることになるので、このままでいい。

道が直線になり、向こうに道を横切る高架が見えてきた。あの交差点を過ぎてちょっと頑張れば五所川原の市街地だ。そこに行けば、エアコンの効いた店で何か食事を摂ることが出来る。じわりとやる気がわいてくる。

程なく交差点に着き、信号を渡りすぐに右にカーブする道をそのまま道なりに直進してゆく。周囲は田んぼのなかに建物が点在するのどかな風景のままだ。

交差点を過ぎて道路左側の歩道を少し行くと、左側の倉庫のような建物の前の入り口階段にランナーが一人座っていた。他のランナーに追い着くなんて、いったい何時間ぶりだろう。本当に久しぶりな気がしてくる。

座り込むなんて、何かあったのだろうか。大丈夫ですか、と声をかけた。すると彼、斉藤さんはにこやかにこちらを見て、はいとしっかりとした口調で答えてくれた。その元気な様子から、あ、この人は完走できる人だなと直感し、ようやく完走組の人達に追い着いたのだと実感してしまった。そのときの気持ちを表現すると、最終列車の最後部車両に乗ることができたようなものだと言えるかもしれない。すごく励みになる出会いだった。

斉藤さんと別れ、またマイペースで走り歩いて行くと、道はゆるく上ってゆき、橋を越えた。道路の幅が広がり、両側の住宅などの建物が増えてくる。歩道も広い。さっき分岐したバイパスと合流する交差点までもうすぐだ。そう思っているとすぐに、ファミリーマートが見えてきた。あれが目印だ。

ファミリーマート五所川原下平井町店。このコンビニエンスストアが角にある交差点を

左に曲がると、道路沿いに店舗が続き市内中心部を通る大通りとなる。津軽ジャーニーランのコース上でもっとも賑やかな区間といえるかもしれない。自販機すら見かけないような所を旅してきた者にとっては、まさに都会とも思えてしまうくらいだ。

交差点を左折し、広い国道の左側の歩道を進む。すぐに津軽鉄道のアンダーパスをくぐり、直線道路になった。道路の反対側を見てみたが、ランナーはいないようだった。いくつかめの交差点で赤信号になったのを機に、右側へ渡る。食事するお店に行くためだ。入る店は決めている。吉野家だ。前々回の大会のときにも入ったことがあるのだが、やはり短時間で補給できるのが利点だと思う。しかも米の飯が食べられる。これも重要なことだ。

段差も多く信号待ちも多いこの区間は、なかなかペースが上がらない。のんびり進んで行くと、前方に二人組のランナーが見えてきた。二人とも歩いているのですぐに追い着いたのだが、片方の人、照井さんの身体が傾いている。これは完全に体力の限界を超えてしまった状態だ。おそらく寝不足で頭を支えられなくなってしまったのだろう。大丈夫だろうか。でも見た所よろけることなくちゃんと歩けている。もうひとりの鍋田さんは元気そうだ。

横に並び、お疲れさまですと声をかけた。二人とも一瞬驚いた様子だったが、すぐに照井さんが、このまま歩いて行っても完走できますよとアドバイスしてくれた。

ここまで時間などは気にせずただひたすらに進んできたせいか、焦っているように見えたのだろう。確かにその通りだと思った。そのひとことで緊張がゆるみ、思わず笑みがこぼれる。自分も一緒に歩いたのだが、こちらのほうは歩く速度が遅く、徐々に遅れ出してしまった。

結局二人はその先のセブンイレブンに入っていった。お昼ごはんの時間なのだろう。こちらもまた走りを再開し、吉野家を目指す。やはり歩きだけでは自分には時間的に無理だと思った。

ほんの数百メートルがやたらと長く感じてしまったが、何とか目的の店に到着できた。中に入ると、時刻はちょうどお昼時と重なってしまっていて店内は少し混んでいたが、無事カウンターに座ることが出来た。他の客は、突如現れた場違いなランナー姿の者には特に興味を示さず、黙々と食事を続けている。おかげでこちらも気を遣うことなく食べることができそうだ。

並盛と玉子を店員の女性に注文すると、すぐに運んできてくれた。暖かい食べ物は昨夜のふるさと体験館以来だ。たいそうな時間が経っているわけではなかったのだが、すごく久しぶりな感じがしてしまった。

食欲は落ちてきてしまっていたが、それでもやはりずっと楽しみに思い続けていたものだけに、食べると本当に美味しい。噛みしめるたびに、寝不足でしょぼつく瞼で何度もま

ばたきを繰り返す。そしてこの先の、延々と直線が続くバイパス区間を想像し、ここでのエネルギー補給が重要なのだと自分に言い聞かせている。

店を出た。暑い。この辺りは建物が多いので、きっと先ほどまで田んぼを吹き抜けていた風がさえぎられているからなのだろう。バイパス区間に出ればまた風が吹いていること願って、また淡々と歩きと走りをくりかえす。

車通りの多い道路ゆえに何度も信号で止まりながらも、目印の大きな陸橋に近付いてきた。あの橋を越えるとバイパスの直線が始まる。途中にコンビニエンスストアもあるのだが、この区間では必ず水のボトルを二本持つことにしているので、手前の大型店舗の店先の自販機で調達しておく。ザックの左右のポケットにそれらを差し込むと、やけに重く感じてしまう。でも、我慢だ。

ゆるい上り坂を歩いて陸橋を越えて行く。歩道はきれいに整備されているので歩きやすい。左右に歩道はあるのだが、いつもここからの区間を通るときは右側にしている。何となく、こちらのほうが津軽平野の大きさをより強く感じられそうだからだ。毎回下ばかり見ていて、それこそ苦行の連続でしかなかったここからの道のりであったが、今回はなるべく景色も見ておこうと心に決めていた。
陸橋の下り坂を下りたところで、また照井さんと鍋田さんに追い着いた。もう、照井さんは傾いていない。コンビニエンスストアでの補給で回復したのだろう。さすがだ。再び横に並び、あいさつを交わす。先に行っていたと思っていたらしく、二人とも意外そうであったので、寄り道していたことを説明した。そして、自分は歩くのが遅いことを伝え先行させてもらった。とはいってもその速度差はごくわずかで、すぐには離れていかなかった。

食事を摂れたことによって少し元気が出てきたが、身体の疲労感は相変わらずだ。走るときには一瞬力をためてからでないと走り出すことができなくなってきた。そしてすぐに息が上がって歩いてしまうのだが、それでもまた走り出す。また歩く。国道に平行しているこの広い歩道はときに農道と合流しながら、一直線にのびてゆく。晴れた空は日差しが強く、暑さも相変わらずだ。
ふと右手に広がる津軽平野を見わたす。田んぼばかりだと思っていたのだが、良く見てみると意外にも郊外型の店舗やスーパーなどがいくつも建っているのが確認できた。初めてここ走った日からもう何年も経っている。街も少しずつ変わっていくのだろう。

陸橋から次の目標地点である道の駅つるたの交差点までは、とてつもなく遠い気がしていたのだが、実は距離がそれほどあるわけではない。６ｋｍ弱くらいだろうか。ただ、一

直線であることがその長さを強く印象付けてしまう。しかも、途中でカーブしているため、目的地がなかなか見えて来ない。かなりきつい思いをしてしまうのだ。
　ただ前を見て、走りそして歩く。
　ふと、景色を見る。遠くに見える建物の角度が少し、変わってきている。
　また走り、そして歩く。
　風が吹いている。
　水を少し飲む。
　また、走る。

　長い直線のずうっと向こうが、左へカーブしているのがおぼろげに見える。あの先に道の駅つるたがあるのだろう。その交差点にあるコンビニエンスストアに入ろう。
　天気は良く、暑い。昨夜、平舘のチェックポイントで寒い思いをしていたことが嘘のようだ。

　田んぼが続く一本道の途中に、ぽつりと一軒の洋風の建物があった。アンジェリークという名前だっただろうか。以前にも寄ったことのあるお店だ。目立った看板は無いのだが、その入り口によく観光地のお店などで見かける大きなソフトクリームの模型がちょこんと置いてあり、ここが洋菓子店なのだとわかる。第一回大会で初めてこの道を通ったとき、一緒に走っていたランナーと一緒にここでソフトクリームを食べたことを思い出す。ふとまた食べたくなり、寄ることにした。

　ハーフパンツのポケットからマスクを取り出して顔に着けながら店に入ると、中は冷房が効いていて快適だった。ただ、以前は広くゆったりとしていた店内も、いまはショウケースに向かってポールを使い順路が作られ、透明シートの向こうではマスクをした女性従業員たちが緊張しながらこちらを見ている。まるで厳戒態勢そのものだ。
　ピーンと張りつめた空気のなかにいると、このようなお店にはあまり似つかわしくないランナー姿の自分は、手短に用をすませて立ち去らなくてはならないような、そんな気がしてしまう。

　レジで注文の品を伝えると、従業員の女性は前回と同じく丁寧な物腰でカウンターに表示してあった容器の種類を指さし、どれにしますかと聞いてきた。前と同じワッフルを選びそれを伝えると、彼女はすぐに奥の機械でソフトクリームをつくって手渡してくれた。代金を払い、レシートをもらう。以前のように上品な笑顔は見ることができなかったが、それでも彼女はマスクをしていながらでも、その目で精一杯のおもてなしを表現しようとしてくれている。コロナが収まったら、またお越しください。そんな希望を伝えようとしているようにも見えた。

店を出て、駐車場を横切りながらソフトクリームを食べた。もう、言葉にできない美味さだ。一気に食べてしまったので、道路に出た時点ではもうワッフルをかじっていた。ふと後ろを見てみると、さきほどの二人がもう追い着いてきている。

ワッフルを包んでいた紙を小さくたたんで、ごみ入れにしているショルダーストラップのメッシュポケットに入れ、また走り出す。気温は高く暑いままだが、身体の中が少し冷やされて動きやすい。ずっと遠くに見えていた左カーブも徐々に近付いてきた。

目標としていたその規則正しく曲がってゆく左カーブを越えると、前方に交差点が見えた。角にファミリーマート鶴田境店があり、左手に森のように見えているのが道の駅つるただ。ようやく信号までたどり着き、青信号で渡りながらこの道の駅にあったエイドステーションを思い出す。今年は設置されていないが、広い敷地の片隅の木陰で涼むことができるあのエイドがまた再び復活してもらえること願った。時刻は１３時４０分だった。

ファミリーマート鶴田境店では５００ｍｌの水を一本購入し、空になった容器を捨てる。ここから先では飲むだけではなく、体にかける必要がでてくる。引き続き２本のペットボトルを持ち続けていくと重くて負担に感じてしまうが仕方ない。暑さを乗りきるためだ。
すぐに店を出て、また歩道を進み続ける。しばらく行けば、田んぼ道の風景にも少し変化が出てくるはずだ。じっと耐え、歩き、走り、また歩く。
一本道の途中に、ぽつりと一本の大きな木を発見し、その下につくられたわずか数メートル四方ほどの日陰に入り、足を止める。背中のザックからペットボトルを取り、丸めた右の手のひらの中に水を満たしそれを首すじにかける。同じようにして、左右の頬へも交互にひたす。すると、それまでは頼りなく感じていた風がすーっと吹き抜けてきて、濡れた肌を乾かしながら涼しさを感じさせてくれた。

歩いている路面にも変化があらわれてきた。大きな道路との交差点を越えると、それまでの整備されたそれとは違って、旧来からあったようなすこしアスファルトに傷みもある歩道になった。そして道沿いに建ち並ぶ大型店舗を通り過ぎると、市街地のような町並みになってきた。飲食店やガソリンスタンド、自動車販売店など、地元の人達の生活道路となっていて、頻繁に信号待ちもありそれがかえって脚を休めることになって少し体力を回復させることにもなった。

やがて町並みが途切れ、周囲にりんご畑が見られるようになってきた。しばらく進んでゆくと、道沿いの駐車場に車を止め、私設のエイドを出してくれているのが見えた。以前も同じ場所でエイドを出してもらったことがある。再びめぐりあえた幸運に嬉しくなる。

近付いていくと、こちらの存在に気付いてくれた女性が、ガラガラガラッと手にしている鈴を賑やかに振っている。今朝、金木の太宰治記念館に行く途中の道で追い越していった人たちだ。入れ替わりに、照井さんと鍋田さんが出発して行った。二人とも元気良く走ってゆく。さすがだなと思った。

今回のジャーニーランで初めての私設エイドに到着できた。おそらく夫婦と思われるお二人に明るく迎え入れられ、テーブルに並べられた果物などを頂く。少し小振りのトマトが甘くて美味しかった。食べながら、しばし会話を楽しむ。話題はやっぱり、暑さについてのことになってしまう。

今年は６月に入っていきなり猛暑が続き、大変な思いをして練習することになってしまった。自分が住んでいる地域は東京の西寄りにあり、特に気温が上がる日は４０度をこえてしまうこともある。そのような日に走っていると、首や顔にかけた水は数分もたたないうちに乾いてしまい、ひたすら身体に水をかけ続けながらのトレーニングになってしまう。高温下での走行では知らず知らずのうちに筋肉も痛めてしまい、ある日突然ふくらはぎの激痛におそわれて走れなくなってしまって、結果的に何週間も休養せざるをえなくなってしまった。

得てして口数も減ってしまって落ち込みがちになる後方のランナーにも、彼らは気の利いた食べ物を提供してくれるだけでなく、明るく気さくに接してくれることによって十分すぎるほどの気分転換をさせてくれている。ついうっかり、時間を忘れてしまいそうだ。

お礼を述べ、出発する。ふと、そういえば宮崎さんの姿を見ていないなと気付く。あちこち寄り道しているあいだに先行して行ったのだろうか。だとしても、見通しの良いこの道ならばどこかで確認できるはずなのだが。

歩道に出て歩き出しながら今やってきた方向を見てみると、意外にも別のランナーがこちらに向かって歩いてくるのが見えた。上下赤い色のウエアに身を包んだその彼は、初めて会う人だ。五所川原からここまでの国道区間でいつの間にか追い抜いていたらしい。この道は左右に歩道があり寄り道できるお店も多いので、おそらく気が付かなかったのだろう。見たところかなり疲れているようだったが、次の藤崎町のチェックポイントまでもう少しだ。頑張ってほしいと思った。

過酷な田んぼの中の直線道路を抜けた安堵感と、また思いがけない私設エイドでの援助のおかげもあって、気持ちがだいぶ前向きになった。両脚の疲労は大きいままだが、それでもまだ少し走れるだけの気力は残っている。ふたたび、歩き、そして走るをくりかえす。

やがて歩道はますます狭くなり、間近にりんご畑が迫ってきた。右手を見ると一面がり

んご畑だ。以前の大会で、この区間を一緒に走ったランナーがりんごについて色々と教えてくれたことを思い出す。
　実の生りをよくするために、小さいうちにいくつも間引きしなくてはならないこと。太陽にあたることによって赤くなるのだということ。まんべんなくその実を赤くするために地面から光を反射させていること。最近、病気がはやってきていて収穫が心配されていること。そして、ふじという名前は藤崎町の藤なのだということ。

　りんご畑の向こう側から、電車が通過する音が聞こえてきた。その方向を何気なく見てみると、たくさんの木々の枝の先が白く見えている。花が咲いているのだろうか。いや、もう夏だから違うかもしれないし、りんごの花がどういうものなのかは見たことが無いのでわからない。でも、きれいだ。

　そのとき、ざーっと風が吹いてきて顔に当たった。そのまま風が通り過ぎていくほうへ向って左側へゆっくり振り向く。道路をはさんでその向こうも広々とりんご畑が広がっていて、何本も連なった枝たちがまるで空にむかって手をさしのべるように高々とまっすぐに伸ばして、吹いてくる風に合わせて一斉に大きくゆれている。その枝もやはりみな白く光っていた。りんごの木はその赤く愛らしい形の実を我々に与えてくれているのに、その立ち姿は実にたくましく生き生きとしていて、そして、寡黙だ。

　どごまでいぐんですか。
　風に身をまかせてゆっくり歩き出したとき、不意に畑の中から声をかけられた。
　一瞬、りんごの木が話しかけてきたのかと思い驚いて見てみると、歩道から少し低い位置に植えられた木々の間に、農作業服姿の女性がまっすぐこちらを向いて立っていた。つばの広い帽子の上から手ぬぐいを被って顔を覆い、手に道具を持ったまま彼女は優しく微笑んでいる。年齢は自分と同じ位か、それともすこし上だろうか。木漏れ日の下でほっそりとした顎が透き通るように白く、ああなんてきれいなひとだろう、と思わず見惚れてしまった。
　すぐに我にかえり、黒石をまわって弘前に帰りますと答えた。すると彼女は納得したように、あーそうですか、おぎをつけでと言うと、すぐにまたりんごの木のほうに顔を向き直し、作業を再開してしまった。
　おそらく彼女はこの畑にいる間に何人ものランナーが通過するのを見ていたのだろう。走り去る人には無理だが、のんびり歩いている自分のようなランナーなら大丈夫だと思って呼び止めたのかもしれない。ほんの短い会話だったが、まるで近所の人に声をかけられたような気軽なやりとりだった。
　思いがけない出会いが強く印象に残った。津軽美人ということばを思い出したのは、ずっと後になってからだ。

ゆっくり走り出す。道の両側にはりんご畑が続いている。日差しが少し弱まってきたようだ。夕方に近付いてきたのかもしれない。ふと、遠くに雷の音が聞こえて右手を見てみると、遠く岩木山の麓あたりに入道雲が立ちのぼっているのが見えた。あそこには、一昨日の夕方に訪れた岩木山神社がある。そしてあの山の向こうにはわさおの海があるのだろうか。

いくつかカーブをこえていくと、りんご畑のずっと先のほうに、ピンク色の大型商業施設の看板が見えた。あそこのすぐ先がチェックポイントだ。長かった区間ももうすぐ終わる。まだ走れてはいるがその時間はかなり短くなってしまい、歩くほうが長くなってきていた。

りんご畑はなくなり、また住宅や店舗が並ぶ藤崎町の市街地に入った。この辺りまでくると道路は直線となり、遠く向こうに小さく見えていたチェックポイントのひとだかりが徐々に、ほんとうに少しずつだが近付いてきた。舗装の傷んだ歩道で躓かないように慎重に、まっすぐ前をみつめながら必死で走り続ける。

目印にしていた大型商業施設の前を通る。以前の大会のとき、黒石のチェックポイントで出会ったランナーがこの店の中にあるフードコートで仮眠を取ったと言っていた。その後彼は元気よく走り始め、自分よりもずっと早くゴールに到着してしまった。しかし今の自分には回復するためにそんなことができる時間の余裕などまったく無い。できもしないことまで考えてしまうのは、明らかに疲労がたまってきているからに他ならない。限界が訪れようとしているの感じる。

ようやくスタッフの一人が近付いてくる自分に気付き、手をあげてくれた。そこからは遅いながらも走り続け、国道沿いの肌色の建物と建物の間に設けられたチェックポイント１４スポーツプラザ藤崎に着いた。一番暑い時間帯を乗り越え、長い長いバイパスを進み続けてここまでやって来た。時刻は１５時４８分だった。

このチェックポイントでの最大のご馳走は、果汁１００％のりんごジュースだ。歩道と建物の間のスペースにテーブルを置き、その上に立派なサーバーが据え付けられている。前回ここに来たときにはすでに売り切れていたが、今年はまだ残っていた。すぐにザックのウエストベルトのポケットからカップを取り出し、注ぎ口のレバーにそれを押し付ける。そして器いっぱいに満たされた薄黄色のジュースを一口、また一口と飲み込んだ。酸味はほとんど感じられずただ爽やかな甘さと香りが鼻をぬけてゆく。ああ、藤崎の味だ。藤崎まで帰ってきたのだ。

歩道に沿って建物の壁に毎年、選手を鼓舞する横断幕が貼られている。けっぱれ、の文

字でもおなじみだ。そしてこれは藤崎町がみちのく津軽ジャーニーランを心から歓迎してくれている証でもある。
　藤崎町は、町のイベントなどを紹介するＳＮＳで、ジャーニーランの開催とここでのチェックポイントの設置を紹介してくれていた。そのなかで町長は町民に対し、通過してゆく選手達への応援をひろく呼びかけている。コロナ禍をいまだ引きずっているにもかかわらず、他県から集まってくるランナー達を決して拒まないその寛大な心を明言する彼の文面に、どれだけの者が励まされたことだろう。自分もそのひとりだ。藤崎町の人々にとってすこし強面の町長は、実は熱いハートをもつ父親のような存在なのだろう。
　夕方がせまる時間にもかかわらず、エイドの周囲には人も多く、にぎやかだった。

　五所川原で食事をしたきりなので、もうとっくに身体の中のエネルギーは使い果たしているはずなのだが、食欲が落ちてきてしまって食べようという気が起きない。それでも少しでも回復できるよう、口に入れやすいバナナや果物を食べる。ここから黒石のチェックポイントまでは上り坂が多い。しかしこれ以上ペースを落とすわけにはいかない。走れるだろうか。不安になってくる。
　テーブル横に置いてあったポリタンクの水でカップをすすぎ、再びザックのポケットにしまった。スタッフの人達にあいさつをして出発しようとしたとき、私設エイドで見かけた赤いウエアの彼が遅れて到着した。かなり疲れているようだ。すぐに再スタートするのは難しいかもしれない。ここまで来て、リタイヤしてしまうのだろうか。いや、まだ間に合いますよと心でエールを送って、歩き出す。
　そのとき、目の前をすれ違ってゆくミニバンがププッとクラクションを鳴らした。運転席の男性が笑顔でこちらを見ている。ＳＮＳを見て、ランナーを励まそうとしてくれたのかもしれない。そんな小さな応援にもなんだか嬉しくなってくる。

　引き続き国道に沿って歩道を歩いていくと、コンビニエンスストアの空き店舗があった。もともとはここにはローソンがあったのだが、閉店してしまったらしい。過去にこの店でおにぎりなどを食べたおかげで、黒石のチェックポイントまでの走行が楽になった覚えがある。でも今はそれができない。身体のエネルギーはもつだろうか。やはり不安だ。

　道はすぐに国道７号線と交差した。ずっと辿ってきた国道３３９号線はここで終わり、その先は県道になる。第３回大会までは、この交差点を右折して跨線橋を越えた後に県道１１０号線を左折して黒石へ向っていた。しかし前回大会からはこの交差点をそのまま直進し、奥羽線に突き当たる手前で右に折れ、１１０号線に合流するルートに変更となった。距離はほとんど変わらないようだが、畑や田んぼの一本道がさらに続くことで精神的にきつく感じてしまう。

しばらく信号待ちをした後、大きな交差点を渡って再び直線道路を進む。歩道も広く、見通しもよい直線道路だ。周囲の建物も極端に減って畑や田んぼがどこまでも広がっていて、空が大きく丸く見える。

走り出すときはあいかわらず、一瞬上半身に力をいれて弾みをつけてからでないと足が出ない。そしてすぐに歩いてしまっている。ペースはますます落ちる一方だ。景色はまったく単調で、岩木山は背後に去ってしまい見ることが出来ない。道路はこの先で右に９０度曲がるはずなのだが、よく見えない。ただただ、黙って足を動かし続ける。こんなに速度が落ちているのだから、誰か他のランナーに追い着かれてもいいはずなのだが、そのようなことは全くない。後ろを振り返る気力も起こらず、歩きながらぼんやりと目の前にひろがる空と地平線を見るだけになっている。

やっと右折する所までたどり着き、そのまま道なりに方向を変え、県道１１０号線を目指す。このあたりは奥羽線の川部駅に近く、静かな住宅街になっている。少し気温も下がってきて、楽になってきた。

県道１１０号線に突き当り、左折するとすぐに跨線橋となる。いつも車道右側の路側帯を歩いて渡っていたのだが、今大会からは左側に平行して設置された歩道を通ることになった。そのためには階段を上がらなくてならないのだが、少し面倒だ。跨線橋の側道を進み、線路脇から階段を折り返しながら上がっていくとき、足の筋肉が思うように動かせず時間がかかってしまった。

渡り終えた向こう側は自転車でも通りやすいように直線のスロープになっている。少し走れそうだと思っていたら、下から地元のランナーが上がってきた。もう夕方に練習するような時間帯になったんだなと思った。すれ違ったその男性は旅姿の自分にはまったく興味を示さず、そのまま走り去ってしまった。

側道から県道に合流し、右側へ渡る。この道は片側一車線で交通量が多く、路肩が狭いので注意が必要だ。初めのうちはりんご畑などが見られるのどかな道路なのだが、やがて住宅が増えてきて、黒石の駅まで家々が延々と軒を連ねる生活道路となっている。狭い歩道は足元が悪く、しかもゆるい上り坂がくりかえし現れるので、疲れ切ったランナーにとっては走り続けることが困難な区間となっている。

しかしながらこの道は、おそらくかなり昔から利用されていたらしい風情も感じられる。畑や田んぼなどをよけるように右へ左へと緩いカーブがつづき、また家の並び方も一定ではなく道幅も広がったり狭まったりと、人々が長きにわたってここに住んでいたのだろうと思われるような変化がみられる。もしかしたら、ずっと前の時代の旅人もこの道を歩いて黒石をめざしていたのかもしれない。広大な平野をのぞむこの地で土とともに暮らしてきた人々を見ることで、自然豊かな津軽半島の海の街道を旅してきたランナー達に、もうひとつの津軽の旅を経験させてくれている。

跨線橋を越えると、りんご畑が道に迫ってきていた。路肩に歩行者が通る余裕はなく、アスファルトが盛り上がっている部分などもあり、とても走ることができず車をよけるので精一杯だ。だが、それでも地元の車は速度を調節し、対向車とすれ違ってからランナーのために大きく間隔をとってよけてくれる。そんな気遣いがほんとうに有り難い。

りんご畑を抜けると住宅地となり、その先には工場などが建っている区間がある。路肩をよろよろと走っていると、道沿いに砂利が敷き詰められて駐車スペースのように整地されているところを通りがかった。ふと見ると、その砂利の広場の奥に、マスクをした女性が一人ぽつんと椅子に座っているのが見えた。足元にはクーラーボックスがひとつ置いてある。私設エイドだろうか。立ち止まってその姿をみたとき、彼女と目が合った。まるで、あ、来た。と言っているような眼差しだった。
ゆっくり歩いていき挨拶をすると、彼女はぺこりとお辞儀をしてくれた。やはりエイドをしてくれていたようだ。見落とさなくてよかったと思った。

ザックのポケットからカップを取り出すと、彼女は黙ってクーラーボックスのふたを開いて中を見せてくれた。お茶やスポーツドリンクなどいくつか大型のペットボトル飲料が入っていたが、どれも中身があまり減っていないようだった。その時何となく、ここに寄ったランナーは少なかったのかもしれないなと思った。
いったい何時からここにいたのかはわからないが、かなり暑かっただろうと思う。それでも待ち続けてくれたことが嬉しかった。クーラーボックスのなかにコーラのボトルを見つけたので、それをカップに注いでもらう。この数か月、カフェインを断っていたのでコーラを飲むのは久しぶりだ。少しぬるくなってしまったコーラを飲んだとき、彼女がここでランナーを待ち続けていた時間の長さがわかった気がした。でも、美味しかった。

飲みながら、彼女はいったいどうやってここに来たのだろうかと考える。私設エイドを出してくれる人たちはたいてい、自家用車のかたわらでテーブルを出したり、または後部ドアを開けたままでトランクルームに飲料などを並べている。しかし周囲に彼女のものらしき車や駐車場は見当たらず、ちょっと不思議だった。歩いてクーラーボックスを持ってきてくれたのか。大変だっただろうな。ありがとう。
お互い疲れていることもあって特に会話もなく、黒石まではまだありますよね、と言うと彼女は黙ってうなずいてくれた。
あまり時間も無いので、出発することにする。お礼を言うと彼女はやはり黙ったまま頭を下げた。ほんの数分間だったが、彼女のエイドに寄れてよかった。素通りしなくてほんとうによかったと思った。

県道に戻ると、道はやがて町中に入った。この先、ゴールの弘前まで大体同じような景色のなかをゆくことになる。
そんな退屈になりそうな道にもじつはちょっと面白いものがある。市街地に入って間もなくのあたりの道路脇に、年季の入った橋の欄干があるのだが、その形が特徴的で、手すりがわりの錆びた太い鉄の棒を支えるコンクリートの四角い柱が、斜めに地面へ設置されているのだ。普通ならば直立しているはずの支柱をあえてまるで芸術作品のように作っているところが、とても興味深い。
おそらく昔は橋として使われていたのであろうが、いまはアスファルトの道路と一体化してしまっていて、その短い欄干がちょっとしたガードレールがわりになっている。初めてこの道を通ったときからずっと、この欄干は自分だけの津軽ジャーニーラン終盤の目印になっていて、これを見るとああ、ここまで来たんだと妙に実感させてくれるのだ。ちなみに同じような欄干がもう一つ少し先のほうにもあるのだが、その支柱は斜めにはなっておらず普通に直立している。そしてどちらも川などを跨いでいるのではなく、少し低くなった土地に畑などが作られている。おそらく昔は用水路のようなものがあって、のどかな田舎の風景が見られていたのかもしれない。

ほとんど歩きになってしまった。狭い歩道で車への気遣いもあり、走ろうという気が起きなくなってきている。ただいたずらに時間を浪費しているだけの感じが強くなる。だけど怖くて腕時計が見れない。

交差点が見えてきた。その手前左側の角にローソン前田屋敷店があるはずだ。徐々に近付いていって、もうすぐだと思ったそのとき、一人のランナーが店から出てきてそのまま信号を渡って行くのが見えた。また誰かに追い着いた、とちょっと安堵したのだが、そのまま彼は走って行き交差点に着いたときにはもう見えなくなっていた。その元気な姿に、今の自分とのあまりの違いを痛感させられてしまい気持ちがへこんでしまった。

本来ならばこの店で何か食べないといけなかった。もうとっくに身体のエネルギーは枯渇している。わかっているのだが、寄ろうという気が起きない。黒石のチェックポイントにつけば、名物のつゆ焼きそばが食べられるという期待もあったものの、ここで休んでしまうともう歩く気さえ起きなくなるのではないかという怖さがあったのが本音だった。黒石にさえ行けば、また回復できる。黒石でつゆ焼きそばを食べさえすれば、また走れるようになる。そんなことばかり考えるようなっていて、ザックの中にどんな補給食が入っているのかさえ忘れてしまっていた。ここに寄ったところでも、せいぜい５分かそこらだ。だけどそのことさえ判断できないくらい追い込まれていたのかもしれない。結局、青い看板を横目で見るだけでそのまま交差点を渡ってしまっていた。

まるで大きな階段を登るように、ゆるい上り坂がくりかえし現れる。そのことを自分自身に言い訳をして、ただただ歩き続けている。だんだん身体に力が入らなくなってきた。たしかこの先に境松とかいう無人駅の踏切があったはずなので、それだけ目標に進み続けていた。

住宅や商店、畑などを見ながら歩いて、ようやく踏切に到着できた。線路脇にある自販機で飲み物を買ったのは第一回大会のときだっただろうか。走っていないゆえに喉も渇かず、ただ思い出すのはそのときの飲み物の味ではなく、まだ元気よく走れていた自分自身の姿だった。

ゆるいカーブをいくつか越えて、じわりじわりと道を上り続けて、ようやく道路の遠く向こうの突き当りに信号のようなものが見えた。あそこが黒石駅に曲がる交差点かもしれない。もうすぐか。
たしか、左側にこみせがある大きな家があったはずだ。ごく普通の住宅街のなかにあたりまえのように建ち並んでいるその古民家には、ひさしのようにせり出した屋根の下に人が通れるようになっていて、雪をよけることができるようになっている。この家の前を通ると黒石の街に入ったことが実感でき、年に一度の旅人にとっては目印のような存在になっている。こみせ通りとよばれる保存地区も見応えがあるのだが、このようにぽつりぽつりと残されているものも風情があっていいものだと思う。

その大きく立派な家に近付いてきたとき、こみせの下の通路にかわいい花柄の着物を着た女の子がしゃがみこんで、何か地面をいじって遊んでいるのが見えた。ああ、今日は縁日か何かあって、浴衣を着せてもらったんだなと思いながらすぐそばまで歩いていくと、その女の子はだんだん丸いかたまりのようになってきて、実はそれは家の前におかれたプランターだとわかった。それを視界の端にとらえながら歩いていくと、すぐにまたその先のこみせの下のコンクリートの上に、やはり着物を着た女の子がしゃがんでいた。今度こそ本物だろうと思ったが、やはり真横に来るともうひとつのプランターだった。錯覚だった。ただ、いつもそうなのだが、錯覚を見出しても本人はあまり危機感を感じない。思考力が低下してきていて、それがあたりまえのようになってしまうのだ。

道路が信号で突き当たった。そして左折する。もう、黒石の街中だ。道はぐっと狭い一方通行となり、両側には民家が建ち並んでいる。にぎやかな中心街もいいが、このような地元の人々の生活感が出ている住宅街を通るのまた興味深い。ごく普通の暮らしをしている、ごくありふれた家々を何気なくながめながら歩いて行くと、道が終わるところに線路らしきものが見えてきた。おそらく黒石駅のプラットホームだろう。道なりに右折するとそこには黒石駅の裏口にあたるのであろう小さな入口があった。四角くて茶色の壁にただ

黒石駅と表示されているだけの建物はまるで何かの事務所のようだ。その堅牢そうなつくりを見て、きっと気象条件が厳しいこの地で風や雪から守るためにこのような形をなったのだろうと、勝手に想像してしまう。
　駅の入り口を過ぎるとまたすぐに道は突き当り、左に曲がったところですぐに大通りとの交差点があり、向こう側に公衆トイレが見えた。あそこが黒石駅前広場のチェックポイントだ。

　信号待ちをしながらふと右横を見ると、男女のランナーが二人立っていた。それまで全く気付かなかったので驚いてしまった。違う方向から来たように思えたので、もしかしたらコースを間違えてしまったのかもしれない。後ろから追い着いてきたのではなさそうだった。
　ただ、二人の落ち着いた様子から、もしかしたらもうリタイヤするつもりなのかもしれないなと感じた。彼らはこちらを気にすることもなく、静かに話をしている。それはまるで、まだ完走をあきらめていない者に対する気遣いのようでもあった。こちらもそれを何となく感じ取ることができ、また彼らのこころのなかにあるであろう無念さをも推し量り、声をかけることはせずただ黙って赤信号を見ている。

　信号が青に変わり、交差点を渡って広場に入った。きれいなつくりの公衆トイレの建屋の奥は公園になっていて、入口近くにエイドステーションが設置されていた。規模も大きく、スタッフの人数も多い。ただ、他のランナーは誰もいなかった。
　あいさつをし、消毒液のボトルを持った係の人に両手を差し出しアルコール液をかけてもらう。そしてマスクをしてからテーブルに向かう。最初のエイドステーションから必ず行われていたルーティンもこれが最後だ。絶対にコロナ感染者を出さないという強い意志を主催者側は貫き通している。我々も、アルコールでなめらかになった両手をこすり合わせるたびにそれを想う。この手のひらの感触は一生忘れられないものとなるだろう。
　腕時計のラップタイムのボタンを押した。ＣＰ１５黒石駅前多目的広場の到着時刻は１７時４１分。スポーツプラザ藤崎のエイドを出発してから、わずか１０キロ足らずの距離に１時間４５分もかかっていた。

　とにかく、つゆ焼きそばが食べたかった。場所は何度か変更になったが、ここ黒石のエイドでは必ず提供され続けてきた郷土料理だ。世間ではＢ級グルメなどという言葉がはやっているようだが、２５０キロを超える距離を踏んできた者にとっては、ランク付けなどできない最高の味なのだ。
　スタッフの男性にたずねると、まだ残っているらしいので一杯注文した。そして、発砲スチロールのカップに麺を入れ、それをスープで満たしちゃんと天かすまで入れてくれてから渡してくれた。そのていねいな仕事が有り難い。このつゆ焼きそばは、地元の有名な

お店がランナーのために提供してくれている。年に一度だけ、広大な津軽平野を進み続けてきた者だけが味わえる格別の一杯だ。

　エイドとして置かれているテーブルの裏手にベンチがあるので、そこに腰掛けて食べることにした。見ると、二つ並んだ奥のベンチに先ほどの二人が座っていた。
　どかっと座り込み、つゆ焼きそばを食べ始める。丁度よい硬さの麺に、甘辛いソース味のスープがよくなじみ、天かすの食感と香りがいい。これを食べるのは５回目だが、今年もほんとうに美味しかった。一気に食べてしまい、おかわりまで頂いてしまう。

　二杯目を食べながら、ゴールのさくらの弘前店までのルートを考える。前回までは中間あたりにもうひとつ、田舎舘村にチェックポイントがあったのだが、今年はない。毎回、それぞれの区間に一時間くらいづつかかっていたと思うので、残りは２時間弱か。もう、全てを歩いていくことはできない。走らなくては。でも、走れるのだろうか。一杯目とは違って、二杯目は緊張感を感じながら食べることになってしまった。

　食べ終わり、テーブルに戻ってまだ何か食べなくてはと思ったのだが、腹がいっぱいになってしまってもうそれ以上は無理だった。エネルギーがもつか不安だった。しかし、もう行くしかなかった。
　スタッフの男性にごちそうさまでしたとお礼を言い、公衆トイレに入った。用を足すとすぐに外に出て、ザックからヘッドライトとテールランプを取り出す。この電池式の尾灯は自転車用として売られているものだが、付属のクリップを使えば布地などにも装着できる。スイッチを入れて赤く点滅させてからザックの背面にくくり着けた。弘前に着くころは確実に日没となっているはずであり、もう立ち止まって電源を入れたりしている余裕などないからだ。ヘッドランプも額にのせた。これで、暗くなってもそのまま走り続けられる。

　三日目の夜

　ザックを背負い直し、少し離れたところからテーブルの向こう並んで立っているボランティアのスタッフの方々に向かって、ありがとうございましたと大きな声でお礼を言った。
　まだこんな明るいのに夜間走行の準備をしている自分を不思議そうに見守ってくれていた彼らもすぐに、行ってらっしゃいと励ましの声と拍手を返してくれた。
　ちらっと、ベンチに座っている二人組を見た。彼らはエイドの食べ物には手を付けず、ただのんびりとおしゃべりをしている。まるで自分たちは、もうしばらくはここにいるつもりだというような感じだ。きっとこのあとは、電車で弘前に帰るのだろう。

それでも、彼らはみちのく津軽ジャーニーランでの２５５．１km の完走者だ。

交差点に戻り、さっき通った横断歩道をまた渡り直した。そして黒石駅とは反対方向へ大通りを歩きだす。

前回大会のとき、この交差点を渡って次の田舎館村役場チェックポイントへ向おうとしたとき、入れ違いに宮崎さんが黒石駅のほうから現れたことを思い出した。そのときも、午前中に金木町のチェックポイントに到着したときと同じように怒った顔をしていたのが印象的だった。どうやら疲れているときの彼女の特徴のようだ。しかし、今日はついに追い着いて来ることはなかった。もう１８時近い。大丈夫だろうか。

大通りを歩いていく。なかなか走りだせない。時間がかかってしまうかもしれないと心配になってきた。

交差点を二つ越えると、右に斜めに入る道があった。こみせ通りに行く目印だ。その細い道もすぐに突き当り、右折すると一直線に伸びる商店街になる。ちょうど、黒石駅に向かって歩いた道路と並行している。この道がこみせ通りだ。

はじめは普通の住宅街だが、徐々にこみせをそなえた古民家が両側に見られるようになってくる。そのどれもが商店として営業していたり、または住宅として今でも現役で頑張っている。歴史ある町並みを強調するあまり、なかばテーマパークのようになってしまっているところも多いが、ここはちょっと違う。雪深いこの地で本当に必要なものを、自分達のために残し、使い続けているだけなのだ。それはくりかえし訪れる厳しい冬を何度も何度ものりこえてきた風格さえ感じさせ、どこか誇らしげにも見えてしまう。人々を守るためのひさしを支える柱は決して太くはないが、幾本も連ねているその姿はやはり力強い。

藤崎でみたりんごの木の枝は空へのばした腕のように見えたが、このこみせの柱はまるで津軽の大地を踏みしめる黒い脚のようだ。このこみせ通りは、両側から向い合せでそれぞれ形の異なる家々が足を出して並んで座っている。そのどれもが個性的で、寡黙だ。

こみせ通りを直進する。走り続けようとするのだが、すぐに歩いてしまう。でも走らなくてはとすぐに思い直し、また走り出す。身体に力が入らない。それでも走ろうとしている自分がいる。

この通りは全くの生活道路になっていて、車の通りもあるし人の往来も多い。信号もあるし道路標識も電柱もある。道行く人々は夕方のすこし忙しい時間帯ゆえ、ランナー姿の自分には特に興味を示さず、かえってそれが走ることに集中させてくれている。なんとなく、黒石の町の住民になったかのような気楽さで車をよけ信号待ちをし、さりげなくこみせの奥に見える商店をのぞき込んだりしている。

夕方に訪れるこみせ通りは、黒石のひとたちの一日を終えようとしている安堵感が満ち

ていた。

　何個めかの交差点で、シャロンという名前の菓子店を目印に右折した。そして少し先のセブンイレブンのある信号を左に折れる。道路は下り坂になり、道路左側の歩道をゆっくりだが走っていくと、前方の歩道が区切られているところに地元の住民らしき女性が立っていた。すれ違えないほど狭いわけではないのだが、彼女はその場で立ち止まり道を譲ってくれているらしかった。
　急いで足を進めて、やっと通過することができたのだが、彼女はずっとこちらに背中を向けたままだった。なぜそうするのかはこちらもわかっている。マスクをしていないからだ。
　自分が住んでいる東京郊外の街でも、マスク無しでランニングをしていると、立ち止まり背中を向けてしまったり急に道路の反対側に渡ってしまったり、距離を取ろうとするあまり車道に出てすれ違ったり道路脇の植え込みをがさがさと歩いてしまったりと、まるでウイルスそのものだと思われてしまっている。日傘をこちらに傾けてばたばたと揺すられたことも一度や二度ではない。屋外でのマスクは不要であると言われても、ウイルスは至近距離での飛沫でしか感染しないと言われても、もはや彼らにはそのようなことは全く耳に入らない。仕方のないことなのだ。
　不快な思いをさせてしまったようだ。苦しいが走り続け、すこしでも早く立ち去るしかなかった。

　下りきって、草地が多い広々とした川を歩いて渡る。空が広くなって見晴らしがよくなったのだが、このまま走り続けることはできなくなるかもしれないという不安感がつのり、気分が晴れない。
　いつも通り、橋を渡って右にカーブしたところで道路右側に移った。ここから田舎館村役場前まではずっと一本道だ。もう、走ることだけを考えていくだけになる。陽がだいぶ傾いてきた。

　この区間は、路肩の側溝の上を歩道としていて、ところどころに排水のための金属製の水切りがあり、歩行には注意が必要だ。連続するコンクリートの蓋のわずかな段差でさえ、躓いてしまう。必死で腕を振るのだが、脚は前に出せず走ることが困難になっていく。息が上がってしまって、おおきな溜め息ばかり出している。それでも腕を振る。走ろう、走ろう、走らなくては。走らないと間に合わなくなる。ここまで来て、時間切れにはなりたくない。その思いだけで、走ろうとしていた。

　ゆるいカーブをいくつか過ぎて前方が見通せる直線路に出たとき、ずっと先のほうに小さく二人組のランナーが見えた。照井さんと鍋田さんだろうか。だがすぐにその先のカー

ブに隠れてしまった。
　少し歩きを入れながらも走り続け、直線先の弘南鉄道の踏切を越えた。このあたりは広い平野部が見えていて、田んぼの中に伸びる軌道が印象的な風景だ。苦しいのだが、このような景色も津軽らしくていいものだと思う。

　空に夕方の色が濃くなってきた。踏切の先をしばらく進んだところでようやく二人に追い着いた。おしゃべりに興じていた彼らに後ろから声をかける。息も切れ切れな自分を見て照井さんが、急がなくてもだいじょうぶ、ほらあそこにお城が見えるよと、田んぼの向こうを指さした。見ると、たしかに地平線に建物が並んでいるなかに天守閣が小さく見えている。何度もこの道を通っていたが気が付かなかった。一緒に歩きながら、そのおもちゃのようなかわいいお城にすこし笑ってしまった。
　彼らは歩いて足を回復させて、また良いペースで走り出してしまうだろう。このまま一緒に歩いてしまったら、きっと置き去りにされてしまうに違いない。やはり走るしかない。自分は足が遅いのでとことわりを言い、先行させてもらう。

　右カーブを過ぎて歩道が狭くなってきた。もうすぐ田舎館村だ。すこしよろけながらも歩いたり走ったりして、ようやく以前にチェックポイントがあった役場前の立派な門の前に着いた。人影は全く見えず、あたりはひっそりとしている。
　ここは言わずと知れた田んぼアートの名所なのだが、残念ながら鑑賞したことはない。それができるくらい早い時間にここを通過できるのが理想なのだが、とても今の自分にはできそうもない。
　役場の向かい側にはコンビニエンスストアがあるのだが、もはや立ち寄る時間など残されていない。店を見ることもせず、ただ前を見ながら走り抜けてゆく。身体に力が入らなくなってきた。つゆ焼きそば二杯では足りなかったか。でも、もう立ち止まって背中のザックから何か食べ物を出している余裕すらなくなっていた。

　首から下の感覚がなくなってきている。完全なエネルギー切れだ。ふと道路脇に赤い自販機を見つけ、無意識に駆け寄り何かすこしでも力が出そうなものを探す。もう、必死だ。そして、ザックのウエストベルトに付いているポケットから小銭入れを出そうとするのだが、腕に力が入らずわなわなと震えてしまう。何とかコインをガチャガチャと放り込み、栄養ドリンク味の炭酸飲料を選びボタンを押した。
　手で握れるほどのその小さな缶飲料を一気に飲み干してしまい、回収箱に入れるとまたすぐに歩き出す。冷たい飲み物のおかげですこしだけ、目が覚めた。

　田んぼや点在する住宅のそばを、時折やってくる車をよけながら走る。懸命に腕を振るのだがその動きに両脚がついていくことができず、まるでスローモーションのような走り

方になってしまっている。路肩が狭くなっているところもあり、よろけないようにこらえるので精一杯だ。苦しさのあまり、わずかに開けた口で歯をくいしばってしまう。その時だ。

　がんばってくださーい！

　左側の車道から女性の大きな声が耳に入った。
　しかし、その声のする方を振り向くことができず、足元に落としていた視線を上げて前方を見るのがやっとだった。すると、運転席の窓を全開にした赤いコンパクトカーが走り去っていくのが視界に入った。返事もできず、せめて手をあげてあの車のサイドミラー越しにでも彼女にあいさつしたかったが、とっさのことで身体が動かない。ただ視線でその車の動きを追うことしかできなかった。
　そしてその赤いコンパクトカーはすぐに小さくなって遠ざかり、カーブの向こうへすっと隠れて見えなくなってしまった。
　他のランナーの姿はほとんど見かけなくなっているなかで、はたから見ても明らかに最後尾付近と思われる自分に向かって窓を開け、そして届けとばかりに大きな声で励ましてくれた彼女。うれしかった。その声だけがしばらく頭に残り続けていた。

　県道は一旦、平行する国道のすぐそばまで近付いてまた右にカーブしながら遠ざかって行く。しばらく行くと境橋があり、この橋の上からはさくらの百貨店の建物が見える。長い旅の終わりが近づいていることが実感できる象徴的な場所だ。

　歩くような速度で走りつづけ、ずっと先のほうに境橋手前の交差点の信号が見えた。あ、あれが境橋だと思ったそのとき、すぐ横をお疲れさまと言いながら男性ランナーが追い越して行った。それまで全く見かけなかったので、驚いてしまった。田舎館村役場のコンビニエンスストアで休憩していたのだろうか。元気よく走れていて、自分とは明らかに速度が違っている。
　彼はあっという間に交差点まで行ってしまい、タイミングよく青信号で道路左側へ渡って境橋を上っていってしまった。まさに風のようだった。当然、彼についていくことなどできない自分はただひたすらに腕を振り続けている。そしてやっと交差点までたどり着き、信号を渡ることができた。
　左側のみにある歩道を歩いて境橋を渡ってゆく。上まで来たとき、日が暮れて暗くなり始めた弘前の街並みの中にさくらの百貨店のうす赤い建物が見えた。ついにここまで来たのだ。あともう少しだ。

　周囲も少し暗くなり始めた。境橋の中心を過ぎてまた走り始めると、道路を隔てた右手

の欄干に、男の人がこちらを見ているのが視界に入った。しまった。幻覚が見え始めた。
右を見てみても、あたりまえだがそのようなところに人などいない。しかし前を見るとまた視界の隅に男の姿が見えてしまう。走っていてもずっとこちら見たままついてくるのだ。
以前見たことがあったいわゆる幻覚と言われているものは、道路にある標識や看板などが重なって人などに見えていたもので、幻覚ではなく錯覚だと思っていた。しかしいま見えているものはそこには全く存在していないものなので、これはやはり幻覚と言っても良いのかもしれない。結局、その男の姿は境橋を渡り終えると見えなくなった。

あたりはどんどん暗くなっていく。黒石のチェックポイントを出発するときから額に装着していたヘッドランプのスイッチを入れるが、まだ完全に夜になっているわけではないので、あまり明るさを感じることができない。おぼろげに照らされた狭い歩道を、疲労困憊の身体で懸命に走ってゆく。
通り過ぎる車もライトを点け始め、その灯りを頼りに足元を見ている。低い縁石で申し訳程度に仕切られた狭い歩道は、人がひとり通れるだけの幅しかない。段差につま先を引っかけないように注意して走る。もう、首から下の感覚が無くなってきている。走っているつもりなのだが、おそらく歩いているのと変わらないだろう。辛い。でも、もう少し頑張ろう。

先のほうの暗がりに、歩道をふさぐようにお年寄りの女性が車道のほうを向いて立っていた。まるで停留所でバスの到着を待っているように見えるのだが、何かおかしい。この県道は何度も通っているのだが、バス停など無かったはずだ。いや、勘違いか。
徐々に近付いていっても、そのお年寄りは横を向いたままでこちらに気付かない。困ったな。これでは彼女が邪魔で通ることができない。しかし走るのをやめて、歩きながら近くまで来てヘッドランプの光が届きはじめると、その姿は靄のように消えてしまった。幻覚だった。

気を取り直して、また走り出す。しかしすぐに歩いてしまう。でも、また走る。エネルギーが切れてしまったが、耐えるしかない。苦しい。早くゴールに着きたい。その一心だけで一歩また一歩と脚を前に出している。

前方に再び、横を向いた老婆の姿が見えた。またか。また幻覚だ。しかも今度はその隣には若い男性もいる。彼も同じように横を向いて立ち、手に持ったスマートフォンを見ている。そしてやはり先ほどと同様、その姿はヘッドランプの明かりとともに霧のように消え去ってしまった。

すっかり暗くなってしまった道を呆然とゆっくり歩く。もう、疲れてしまった。

県道はこの先、別の県道と合流し、すぐ先で国道７号線と交差する。その県道との交差点の手前の道路右側に、第一回大会のときから毎回欠かさず家族ぐるみで選手たちに声援を送ってくれる家がある。
その家が見えた。今年も家族の人たちが外に出てきているようだ。辺りはもう真っ暗でその姿は確認できないが、家の前でおしゃべりしている声が聞こえる。向こうからはこちら側は見えないだろうと思っていたが、いつも大きな声で応援してくれる男の子がヘッドランプの光に気付いてくれた。
彼は、あ、と声をあげ、すぐに頑張れー、頑張れえーと叫びながら家の前の歩道まで出て来てくれた。こちらも立ち止まり声を張り上げ、暗闇のなかにおぼろげに見える人影に向かってありがとうーと返事をする。
彼とこの津軽の地で出会ってから、もう６年が経つ。当時は幼稚園くらいの年齢だったとしても、もう小学校の高学年になっているかもしれない。暗くてよく見えないが、その声が少し大人っぽくなっていて彼の成長を感じてしまう。今年も会えてよかった。熱い声援、いつもありがとう。

少し元気になれた。よろよろと走り、県道との交差点にやっとたどり着いた。この交差点では、まずこのまま左側から反対側に渡り、そしてまた信号待ちをして右方向へ進まなくてはならないので、少し時間がかかる。そしてまた国道７号線の交差点でも必ず信号待ちをするので、さらに時間を要してしまう。制限時間ぎりぎりのところにいるランナーにとっては間に合うかどうか心配になってしまうのだが、この信号待ちはまた、参加者一人ひとりに長かった旅を振り返る時間を与えてくれてもいる。

県道交差点の信号が青に変わり、向こうに見える国道７号線の交差点に向かって歩いて行く。もう走る必要はない。周囲は店舗が多く、とても明るくて賑やかだ。すぐに広い歩道の角に着き、そして赤信号の向こうの夜の弘前の街を見つめる。

終わろうとしている。
このみちのく津軽ジャーニーランを完走するために３年ものあいだ待ち続け、何百キロも走り続けてきた最後の２６６キロがいま、終わろうとしている。
何度も故障をしてしまった。でも、津軽を走ることだけを目標に耐えてきた。
孤独な旅だったが、それでも多くの心に残る一期一会があった。
それがいま、終わろうとしている。

片側二車線の広い道路を行き交う車が立ち止まり、信号が青に変わった。ゆっくり歩い

て渡る。たしかもう一か所、この先に信号待ちがあったはずだ。もう走るのはやめよう。
　車のヘッドライトに照らされた自分の姿はきっと、背中のザックはずり下がりシャツはうす汚れ、ハーフパンツから出ている両脚はホコリにまみれて黒ずんで見えていることだろう。でも人々はそんな旅人に気付くこともなく、大きなレストランの中で楽しそうに食事をしている。

　県道の広い歩道を歩いて行くと、またすぐに交差点の赤信号で立ち止まる。この道は一昨日の夕方、弘前城を目指し参加者全員で走った道だ。まさに今、自分が立っているこの交差点を曲がって行ったのだ。
　ここを渡って左折し、一本目の道を右斜めに曲がればさくらの百貨店のゴールだ。
　交差点の向こう側に、直前に渡り終えた２,３人のランナーがゴールめざして走って行くのが見えた。最後の最後で、先行していた人達に追い着いたようだ。腕時計で時刻を確認してみると、まだ間に合う時間だった。ああ、完走できる。走りきった。思わず空を見上げてしまう。

　青信号になり、走り出す。いつもゴール直前は必ず走ることにしていたのだが、さすがに今年は無理かと思っていた。でも、やっぱり走ってゴールしたくなってしまった。
　県道から左折すると道は暗くなり、すぐに右折するとさくらの百貨店の大きな建物が目の前に現れた。正面玄関右側の広場にテントや人だかりが見え、そこがゴール地点であることが確認できた。
　よたよたと走る。店舗の前にある横断歩道に、赤く点滅させた誘導棒を持ったスタッフの人が立っている。暗いせいか彼はまだこちらの存在には気付いていないようだ。一生懸命走るのだが、脚が思うように動かせない。それでも必死で走った。
　もう少しで横断歩道に着くと思ったときだった。

　おつかれさまー！
　右側の商業施設の方、おとといの午後５時にスタートを切ったあの広場から大きな声が聞こえた。二、三歩走り過ぎてからはっとして立ち止まり、右斜め後ろを振り返って見てみると、広場の奥の暗がりに若者らしき男女３人がこちらに向かって大きく手を振ってくれている。真っ暗な中でも自分を見つけてくれたことが嬉しい。こちらも大きな声でありがとうー！と返事をし、力の入らない手を懸命に高く揚げて大きく振った。最後まで励ましてくれてありがとう。帰って来られてほんとうによかったよ。

　あらためてゴール地点に向き直り、スタッフの誘導で横断歩道を渡った。店舗前の明るい広場を三角コーンとバーで仕切り、建物に突き当たる場所にスタッフがゴールテープを持って待っている。周囲には直前でゴールを果したランナーや一般の人々など、まだ結構

な数のひとが残っており、皆に拍手で迎えられた。
　スタッフの男性に促されて、ゴール地点のすぐ前の台に置かれている黄色いキャリーケースのような形をした計測器に、大会中右手首にずっと着用していたブレスレット型のセンサーをかざす。ピュイっという音がして計測が完了し、みちのく津軽ジャーニーランの完走が正式に記録された。

　センサーをかざした右手をぎゅっと握りしめ、その拳を身体の前へ突き出して気合の声とともに渾身のガッツポーズをする。周囲の人達から、おおっ、という声が聞こえた。

　ゴールテープの前で記念撮影をしてもらう。寝不足と疲労でひどい顔になってしまったがそれでもかまわなかった。完走できたのだから。
　そして、舘山代表と握手をした。いつも代表とは短い言葉のやり取りしかない。でもそれでいいと思っている。こちらの思いは十分に理解してくれているはずだからだ。お疲れさまでした。ナイスジャーニーでした。ありがとうございました。

　ゴール横のテントでは、その場でプリンターを使って完走記録証を発行してもらえるのだが、少し時間がかかるためその場で待つことにした。すると、そばにいた女性スタッフが飲み物をすすめてくれた。高野崎キャンプ場でのエイドステーションで味噌汁を渡してくれた、茶髪のポニーテールの元気の良い彼女だ。
　迷わずコーラを注文すると、すぐに彼女は紙コップに入れて手渡してくれた。中に氷が入っている。そのさりげない気遣いが嬉しくて思わず、あ、氷が入ってるとつぶやくと、すぐに彼女は、はい、入れときましたと答えてくれた。
　今大会、二杯目のコーラも美味しかった。
　飲み終わろうとしたとき、別の男性スタッフがザックに取り付けた点滅灯が点いたままですよ、と言いながらスイッチを切ってくれた。どこまでも親切なボランティアのスタッフの人々。この人たちがいてくれたからこそ、自分達は完走できた。彼らはエントリーリストには載ることのない、しかし絶対に欠かすことのできない真のアスリートたちだ。

　そうしている間に、照井さんと鍋田さんの二人も無事にゴールに到着して来た。歩きと走りを効率よく配分して回復させ、最後にきっちりと走って帳尻を合わせるその冷静な組み立て方は本当にすごいことだと思う。お疲れさまでしたと声をかける。疲れていたようだが嬉しそうだった。

　出来上がって机に並べてあった自分の完走証を手に取り、テント横に保管してもらっていたレストポイント用のリュックと旅行バッグを受け取った。そして建物に沿って裏に回

り、もう一か所ある店舗入り口前のベンチに座って荷作りをする。路線バスの発着所になっているこの広場はスタート前にも利用した場所だ。周りにはまだ数人のランナーが帰り支度をしていた。

Ｔシャツを着替え、旅行バックを背負ってまた正面入り口のほうへ戻って建物の角を曲がる。この商業施設には正式なタクシー乗り場というものは無いのだが、ちょうど店舗の入り口から離れたこのあたりはよく空車のタクシーが停まっていることが多い。それを知っているランナーが数人、そこで空車待ちをしていた。ちょうど一台のタクシーが客を乗せて出発していくところだった。

ゴール地点から何だか賑やかな声が聞こえてきた。聞き覚えのある声だ。

見ると、宮崎さんが大きな声で何かしゃべっている。うれしそうだ。ということは、制限時間に間に合ったのだろう。となりには五所川原の手前で追い越した斉藤さんもいる。すごいな。自分たちがラストランナーだと思っていたが、まだ後ろにも時間内の完走をあきらめていなかった人がいたなんて。やっぱり彼女は追い着いたんだ。

人影もだいぶ減ってきたゴール前広場で、スタッフやランナーに囲まれながら興奮げに叫んでいる彼女こそが、ラストランナーだった。

今年もみちのく津軽ジャーニーランが終わった。振り返れば、津軽の大空、海、そして大地、風と鳥たちなど様々な自然との出会いがあった。そのどれもが、その時でしか見たり感じたりすることができないものだった。

完走をあきらめて脱落してゆく人たちもたくさん見た。そんな彼らすべてをゴールまで連れて行くことなど到底できない自分の無力さも感じた。最後尾を走るということは、彼らの無念さを常に背中に感じながら進むことなのだいうことも、この旅で知った。

ここ津軽での走る旅というものは、毎回違ったものを自分に与えてくれる。それはいつまでも心に残り続けていくものであり、けして忘れられないものだ。だからこそ、何度でもここに来てしまうのかもしれない。

次はまた違った津軽を見てみたい、という気持ちに突き動かされて一年後にまたここへやってくるだろう。そのときにはもう少し強くなっていたいので、また日々走り続けていきたいと思う。

２０２２年　第６回みちのく津軽ジャーニーラン
２６６キロの部　ゼッケンナンバー２０２
原田　議之
記録　５０時間４７分３１秒